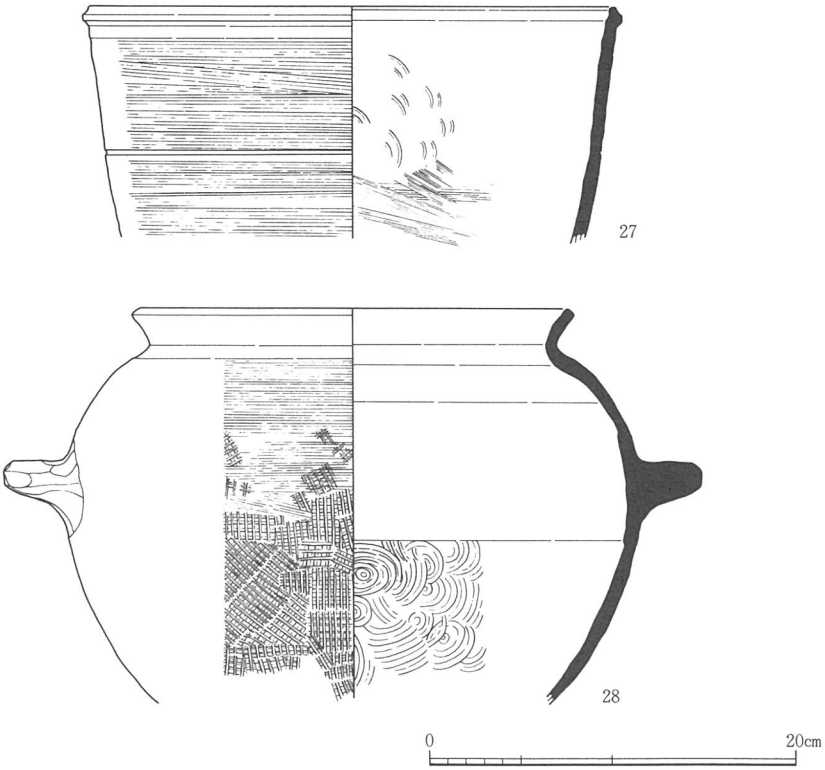
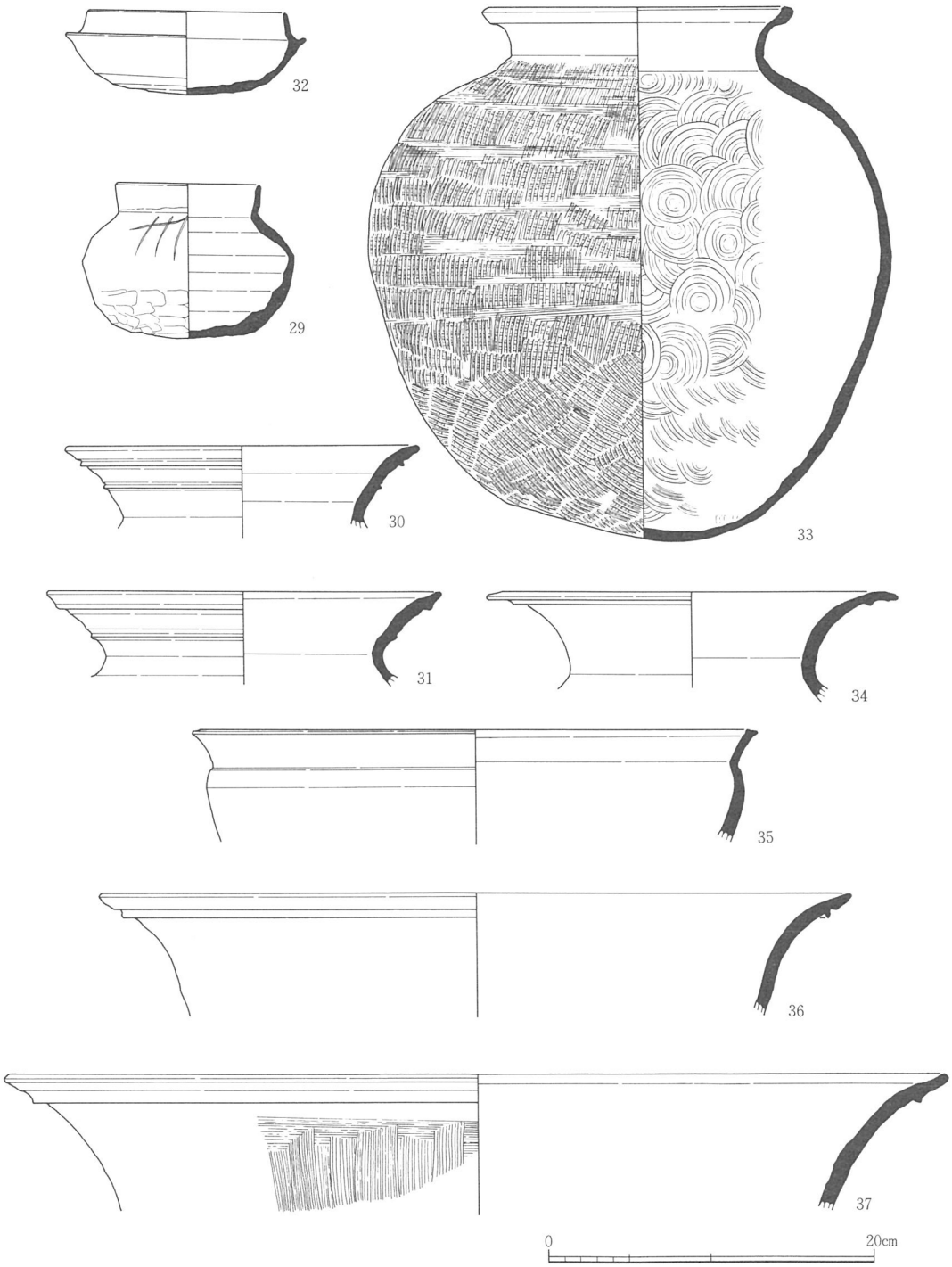


第18図　１－ＯＬ　丘陵１側斜面出土遺物（３）Ｓ＝1/4

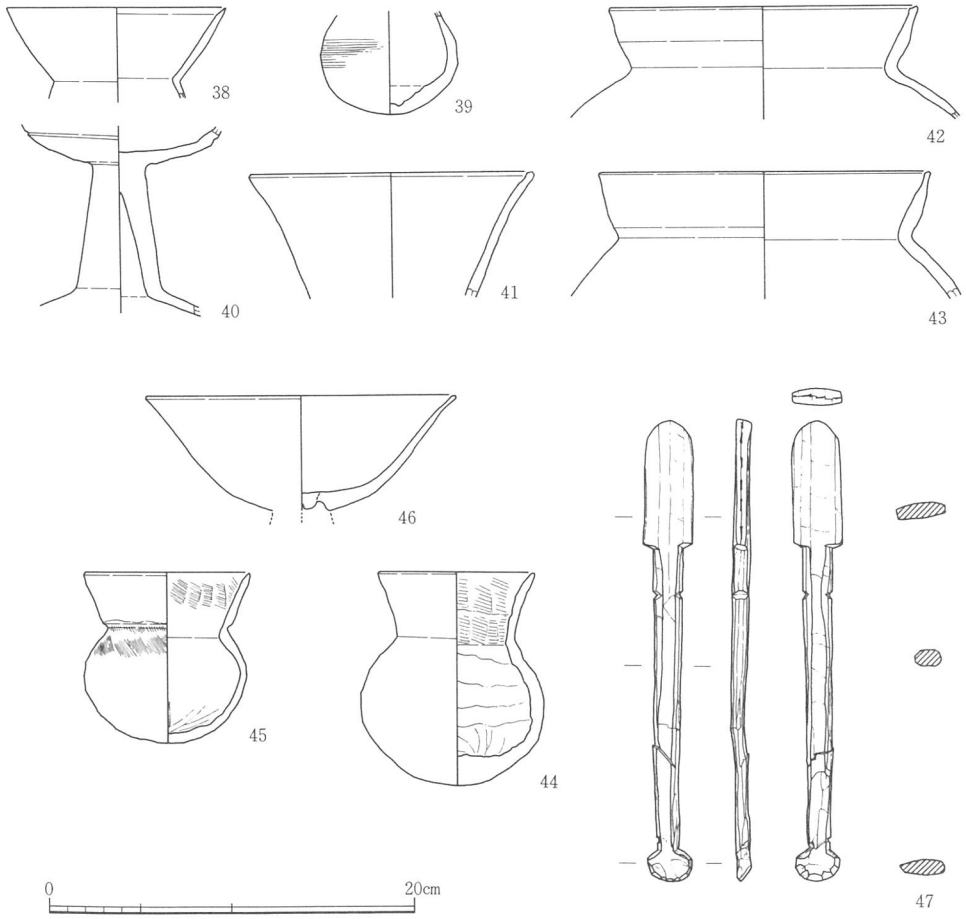
向について簡単に説明する。

丘陵１側斜面第Ⅵ・Ⅶ層の出土遺物は第16～18図（１～28）に示している。第Ⅶ層では初期須恵器・軟質系土器・土師器などが出土し，Ⅵ層ではこれに加えて６世紀代の須恵器の出土量が増える。また，この両層の出土品には完形品に近いものや大型破片が他層に比べ多くみられ，丘陵１からの投棄が考えられる。一方，丘陵２斜面部の出土遺物（29～31）ではこのような傾向は見られず，出土遺物の大半が細片であったが，大甕の口縁部にハケ調整を施すもの（37）など，ＴＧ232号窯と共通するものが多くみられた。これは丘陵２の西斜面に窯（ＴＧ232号窯）が築かれており，その反対側斜面に当たる１－ＯＬの斜面地にも遺物が流入したものと考えられる。ただ，この流入が窯操業時か窯の削平時に伴うものかについては，今回の調査区では確認できなかった。

谷の底面に広がる第Ⅴ層の出土遺物（32～37）には初期須恵器，６世紀前半～中頃，６世紀末の須恵器や土師器などが見られるが，出土量は初期須恵器に比べ６世紀代のものが多い傾向が見られた。



第19図　１－ＯＬ　丘陵２側斜面、谷中央部出土遺物　Ｓ＝1/4



第20図　１－ＯＬ　丘陵１・２側斜面、谷中央部出土遺物　Ｓ＝1/4

Ⅲ・Ⅳ層の出土遺物もⅤ層同様，そのほとんどは古墳時代の須恵器で占められるが，Ⅳ層では奈良時代の須恵器や中世の瓦器椀・瓦，Ⅲ層では近世の染付椀・陶器などが混在してくる。さらにⅢ層では，下駄やヘラ状木製品（47）などの出土も見られた。Ⅰ・Ⅱ層も現代の遺物に混じって古墳時代の須恵器細片が多く出土している。

なお，本報告では古墳時代の堆積層第Ⅴ～Ⅶ層を中心に図化しており，完全なものではない。これは，1992年度にこの谷の追加調査（第Ⅷ調査区）を行っているが，遺物整理が終了しておらず，正確な遺物データが得られていないためである。

第２節　１－ＯＬ土器溜り

第１項　検出状況（第15図，図版６・７）

土器溜りは調査区の南東端，丘陵１側斜面の下端付近に位置するが，この場所は斜面地の中でも比較的緩やかな傾斜地に当たる。土器溜りの広がりは５×２ｍの範囲に及び，古墳時代中期の初期須恵器・軟質系土器・土師器，古墳時代後期の須恵器などが覆い重なるような状態で検出されている。検出面は第７層上面に相当する。

土器溜りは，大きく上・中・下層の三層に分けられるが，上層に比べ中・下層で土器の重なりは密であった。遺物の取り上げはさらに細分して行っている。その結果，上層では中期の須恵器と後期の須恵器が混在するが，下層は後期の須恵器の混在は認められず，中期の単純層であることが確認された。中層もわずかながら後期の須恵器が認められるものの，そのほとんどは中期に属する遺物で占められ，中層も中期の範疇で考えられた。

このような出土状況からは，当初中期の土器溜りが形成され，その後の上層に後期の土器を伴う堆積層が形成されたことがうかがえた。さらに，後期の堆積層が形成される時点では，この中期の土器溜りの上には堆積層は形成されていなかったと推定され，上層として取り上げた中期の土器群も中・下層の土器溜りとの同時性が考えられた。

また，後期の須恵器の完形品が集中して出土する場所は，丘陵１側斜面では当土器溜り以外では確認されていない。後期の土器溜りも，この中期の土器溜りが意識されていたことが推定されよう。

第２項　出土遺物

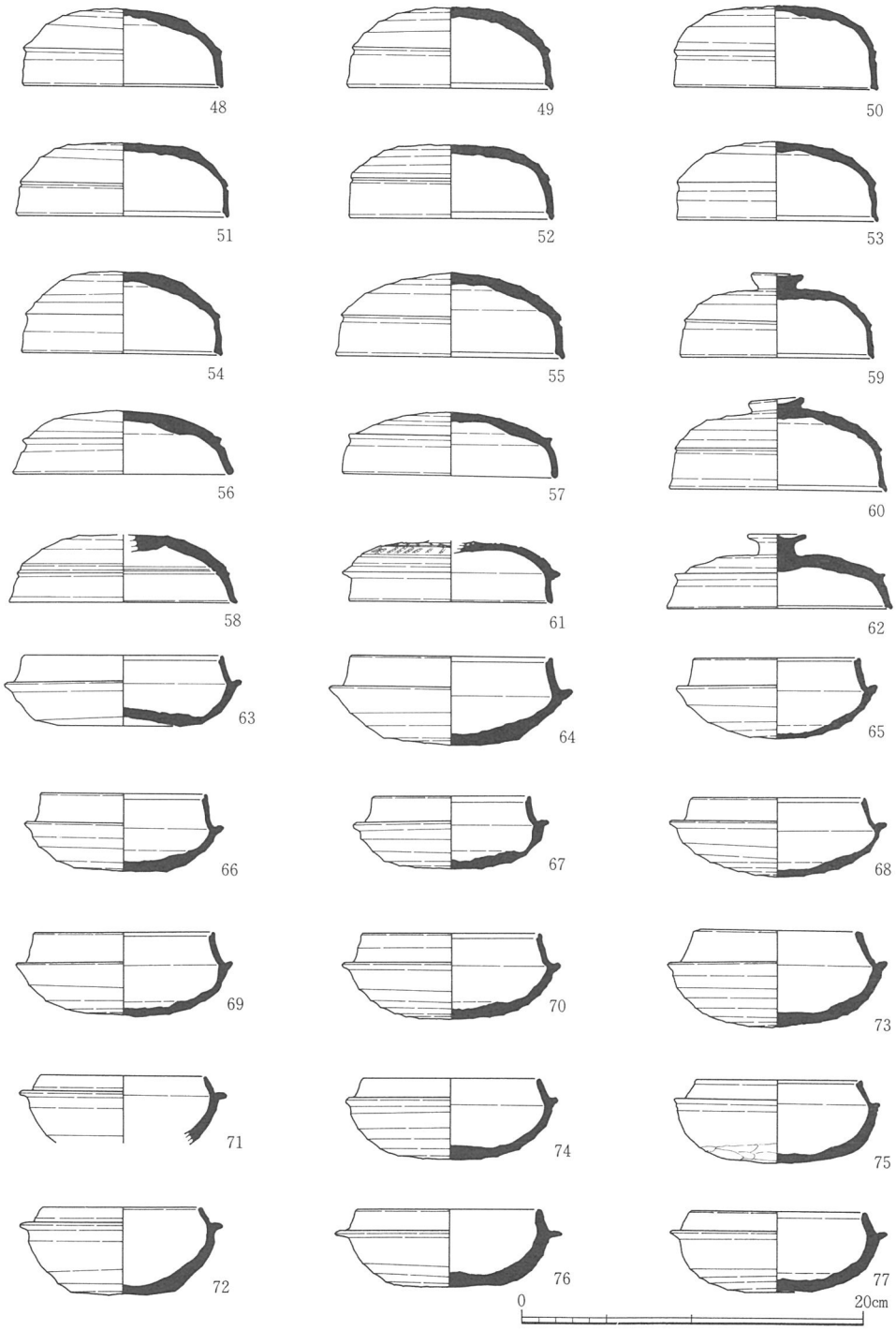
１．上層の遺物（第21～29図，図版34～44）

上層出土遺物には古墳時代中期の初期須恵器・軟質系土器・土師器，古墳時代後期の須恵器がある。以下器種毎に説明を加える。

古墳時代後期の須恵器（第21・22図，図版34・35）

蓋（48～55・59・60）

蓋には杯蓋と高杯の蓋がある。杯蓋は口径11～12㎝前後のもの（48～54）と，13㎝を越えるもの（55）がある。いずれも天井部は丸みをもち，口縁端部の端面は内傾する。回転ヘラケズリは天井部の2/3の範囲で行うものが多い。高杯の蓋（59・60）は，杯蓋と基本的な形態的・技法的特徴は同様である。つまみは中凹みのものがつき，稜は比較的鋭いも



第21図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（１）Ｓ＝1/4

の（59）と甘いもの（60）がある。

杯身（63～70）

杯身は口径約10㎝のもの（68～70）が多いが，これよりも小型のもの（65～67）や11㎝を越える大型のもの（63・64）も存在する。いずれも口縁端部の端面は内傾させる特徴を有するが，63・64は口径に比して口縁の立ち上がりが短く，底部も他のものと比較して直線的であり，後出する時期と考えられる。

高杯（78）

高杯は良好な資料が少なく，ここでは短脚有蓋のものを示している。この短脚高杯には他にも長方形透かしを3方に配する形態のものも見られた。

古墳時代後期の須恵器は，代表的なものの一部しか図示していない。他にも瑯・器台・甕なども出土している。この土器群の年代は，杯身などに一部後出時期のものも含まれるが，ほぼTK23～TK47型式併行期と考えられよう。

古墳時代中期の遺物

須恵器（第21～26図，図版37～43）

蓋（56～58・61～62）

つまみを有するものと無いものがある。つまみの無いもの（56～58）は杯蓋，つまみを有するもの（61・62）は高杯の蓋と考えられる。56・57は口径約13.5㎝，器高約3.5㎝で，口径の割に器高が低い。天井部は緩やかな丸みをもつが扁平で，口縁部は外側に開く傾向がある。口縁端部は丸く仕上げ，天井部を分ける稜は凸帯状に明確につくりだしている。天井部の回転ヘラケズリは広い範囲で行い，56・58は天井部全体に及んでいる。高杯の蓋は口径11.8㎝の61とやや大型で口径13.2㎝を測る62を示した。61は口縁部は直立し，端部は丸く仕上げる。天井部には沈線を3条巡らしその間に刺突紋を巡らす。62は口縁部が外側に開き，端部は若干内傾する面をもつ。天井部は回転ナデによって仕上げ，無紋である。つまみは稜線を鋭く仕上げ，中央部は円錐状に整えている。

杯身（71～77）

底部が平底のもの（71・72・76・77）と，丸く仕上げるもの（73～75）がある。

平底のものは，器高の高い土釜状を呈する71・72と，底部下端部の稜に鋭さがなく器高の低い扁平な76・77に分けられ，前者の形態は陶邑TK85号窯に類例が求められる。後者の形態は全体的に器厚も厚く，シャープ感に欠ける。77は底部が若干丸みを帯びるが，下

端部にわずかながら平らな面があり，全体的な形態も76と共通点が認められ同一形態と考えられる。成形方法は，後者では明確に観察できないが，いずれも円盤状の粘土板から粘土紐を巻き上げ器形の素形をつくりだしていると考えられる。器面調整は全体を回転ナデによって整え，最終的に底部下端部をヘラケズリによって仕上げている。ヘラケズリの範囲は，後者の形態のものが広い。また，76・77の受部にはセットで焼成された蓋の痕跡が認められる。

底部を丸く仕上げるものは，比較的深い底体部・立ち上がり部が内傾するなどの共通点をもつが，立ち上がりの高さ，端部や受部の形態は様々である。成形方法は，平底の71ほど明確ではないが，粘土板状の底部から粘土紐を巻き上げた可能性の高いもの（73）も存在する。底部調整にはヘラケズリを用いるが，回転力を利用したもの（73），回転ヘラケズリの後に部分的に静止ヘラケズリを施すもの（74），静止ヘラケズリのみで仕上げるもの（75）が混在している

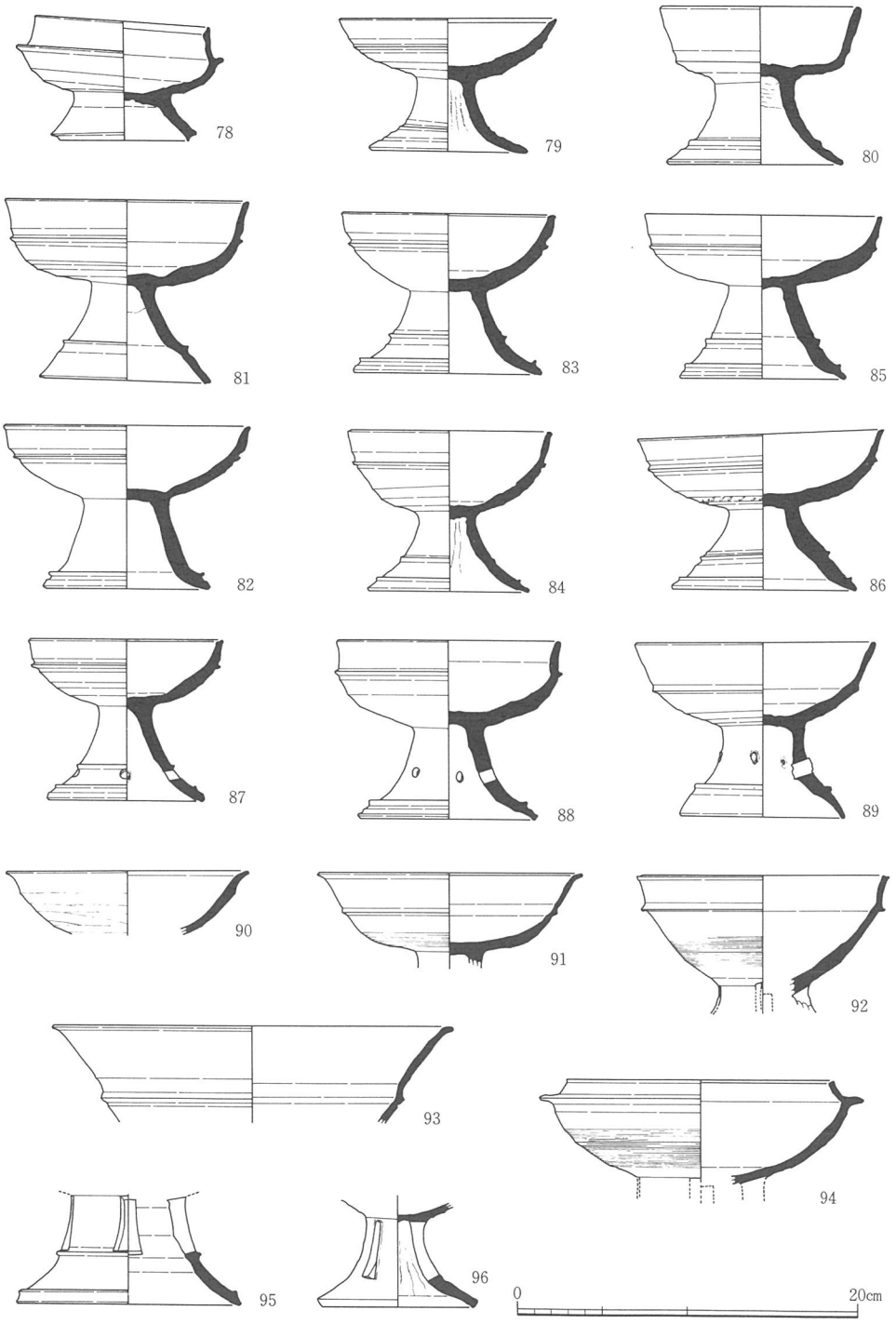
高杯（79～96）

有蓋と無蓋があるが，圧倒的に無蓋高杯の出土量が多い。

無蓋高杯79・81～89は，杯部全体に丸みをもち，深くやや扁平である，口縁部が屈曲して立ち上がるなどの形態差は認められるが，いずれも蓋を逆転させたような杯部をもつ形態として分類できる。脚部は，太い脚柱部から裾部は大きく開き脚裾やそのやや上方に凸帯を巡らすもの（79・82～87）がほとんどであるが，裾が段をもってラッパ状に開くもの（81・89）もある。透かしを有するものは少なく，87に円形４方，88に円形５方，89に涙滴形７方が認められる程度である。調整は基本的に回転ナデで仕上げているが，杯部の外面には脚部接合前に施されたケズリが観察されるもの（84）もある。また，79のように脚部の凸帯の稜が鈍く全体に粗いつくりのものもある。

その他無蓋高杯には杯部の口縁部を上方に大きく屈曲させるもの（80），大きく外反する口縁部をもつもの（91・93）などがある。93は大型品で中層出土の195と同一形態である。92は深い杯部をもち，脚部には長方形透かしを４方に配するが，この土器溜りでの出土例は少ない。96も無蓋高杯の脚部と考えられる。長方形透かしを３方に配するが，透かしには面取りは施されず全体的にも粗いつくりである。

有蓋高杯は出土量が少なくここでは１点（94）のみを図示している。この高杯は口径15.7㎝を測る大型品で，脚部には長方形透かしを４方に配する。95の脚部は透かしに面取りが施され全体的にもていねいなつくりで，有蓋高杯の脚部の可能性が高い。



第22図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（２）Ｓ＝1/4

把手付椀（97～102）

97～99は小型品である。97・99は口縁部と体部を分ける凸帯は鈍く，全体の調整も粗い。98は器壁は薄く仕上げ，調整もていねいである。101は体部は直線的に立ち上がり，100は口径に比べ器高が低く底部にはヘラ記号が線刻される。また，100は形態の特徴から他より後出する可能性が高い。102は重厚な大型品で，通常すり鉢と呼称されているものである。成形方法は粘土板からの粘土紐の巻き上げが良好に観察され，器面は回転ナデにより整えている。回転調整後は底部を粗くナデたのみで，底部の下端部には粘土板の端が凸凹に張り出している。また，底部にはロクロのゲタ痕がかすかに観察される。

鉢（103～106）

丸みをもつ体部のもの（103・104）と直線的にのびる体部のもの（105・106）がある。103は小型品で，口縁部は大きく外反させる。104は口縁部が直立し蓋の可能性もある。105•106の底部には部分的に粗い静止ヘラケズリやナデを施す程度で，未調整部が多く残存している。106は大きく焼け歪んでいる。

脚台付有蓋鉢（107）

球形を呈する深い鉢部は，中央付近に２条の凸帯が巡り，外面にはカキ目状の横ハケや縦ハケを施す。口縁部は短く内傾して立ち上がり，受部は大きく張り出さない。脚部は低く，端部は玉縁状に肥厚する。また，脚端だけでなく凸帯の稜も鈍く，全体的にシャープ感に欠ける製品である。

瓶（108～110）

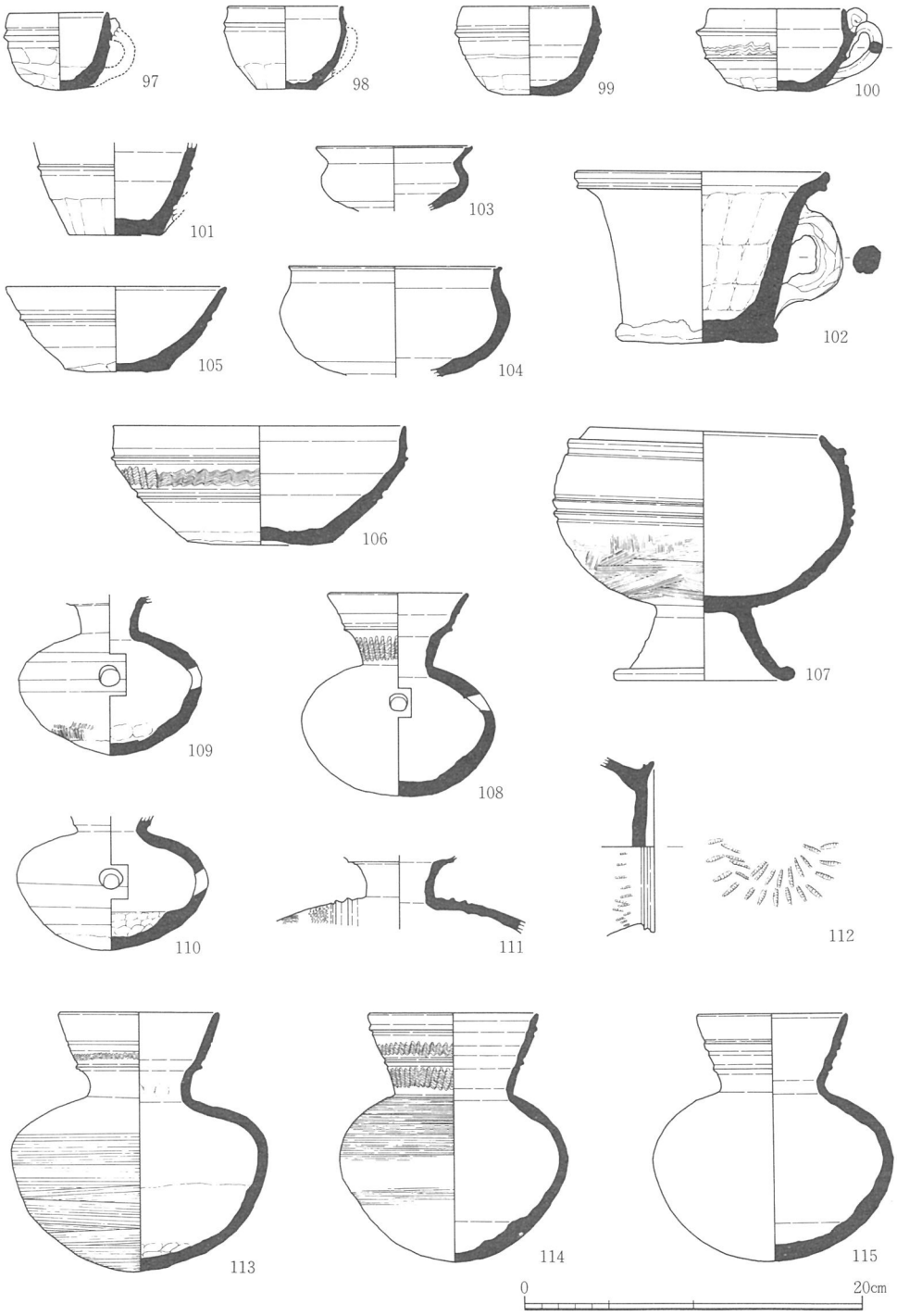
口縁部までの完存品は少ないが，108のように頸部から大きく外反する口縁をもつものが通有の形態と考えられる。頸部径は3.5～４㎝と総じて細く，底部は若干尖り気味のもの（109・110）となだらかに仕上げるもの（108）がある。底部内面には棒状の工具で強く押した痕跡が観察され，外面には粘土の継目の観察されるものもある。

樽形瓶（111・112）

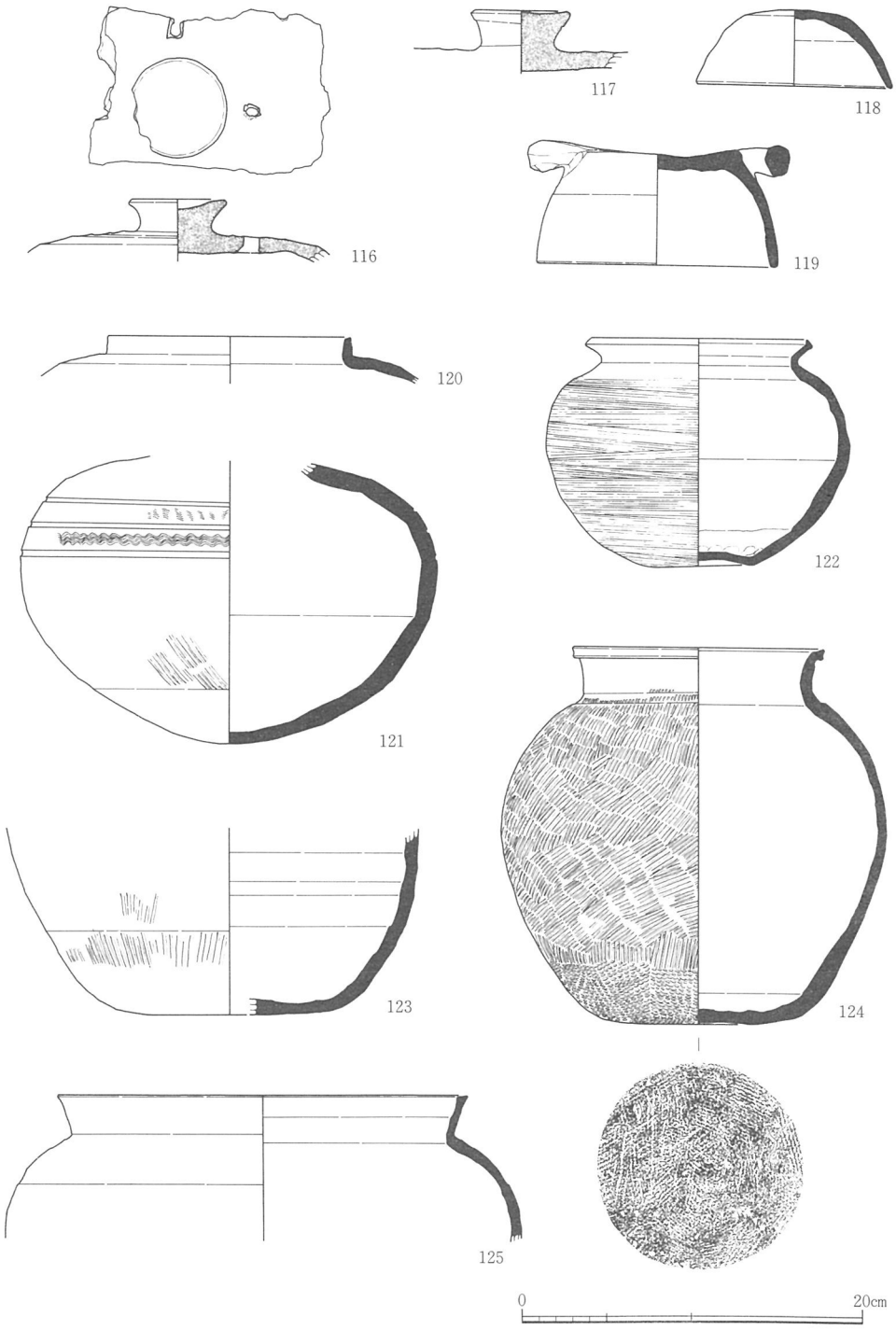
樽形瓶の出土量は少ない。図示したものはいずれも破片であるが，胴部が大きく張る形態と考えられる。

小型壺（113～115）

口縁部と頸部の間に段を有するもの（113）と，直口のもの（114・115）がある。底体部の形態は，113は肩が張る，114は底部が尖り気味，115はやや扁平な球形を呈するなど，それぞれで異なる。113・114にはカキ目が施されているが，いずれも粗いものである。



第23図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（３）Ｓ＝1/4



第24図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（４）Ｓ＝1/4

大型蓋（116～119）

116は大型のつまみを有し，天井部には不整形な長方形を呈する孔が4方に穿たれる。焼成は焼きの甘い瓦質で，甑などに伴う蓋の可能性が高い。117も瓦質焼成で116と同形態と考えられる。118・119は短頸壺の蓋と考えられ，119には円環状の把手が付く。

器台（126）

上層では器台の出土量は少ない。図示した126は小型の高杯形器台で，短冊形透かしを千鳥状に配している。

壺（120～124・127～135）

広口壺（128～135）は，口径20㎝前後のもの（128～132）と25㎝を越える大型品（133～135）に分けられる。前者には，直線的にのびる頸部に波状紋を施紋するもの（128～130），短く外反する頸部の中間に凸帯を巡らすもの（131）などがある。後者は口縁部を大きく外反させ口縁端近くに断面三角形の凸帯を巡らす。いわゆる中型甕と呼称されているものである。

その他にも出土量は少ないが短頸壺なども出土している。短頸壺は，直立する口縁の120と短く外反する口縁の122などがある。122は底部を平底状に仕上げ，口縁部の端部を断面三角形に肥厚させる特徴をもつ。平底壺124は，体部全体を平行タタキによって整えるが，最終段階の底部調整には縄蓆タタキを用いている。また，この壺の胎土には砂礫粒が多量に含まれ，焼成も還元化はしているが通有の須恵器に比べると甘い。砂礫粒を多量に混和させることにより，軟質製品に焼き上げようとした可能性もある。底部のみの出土であるが123も器形，胎土，焼成の状況から124と同形態と考えられる。

大型鉢（125）

125は大型鉢としたが，把手付堝の可能性もある。

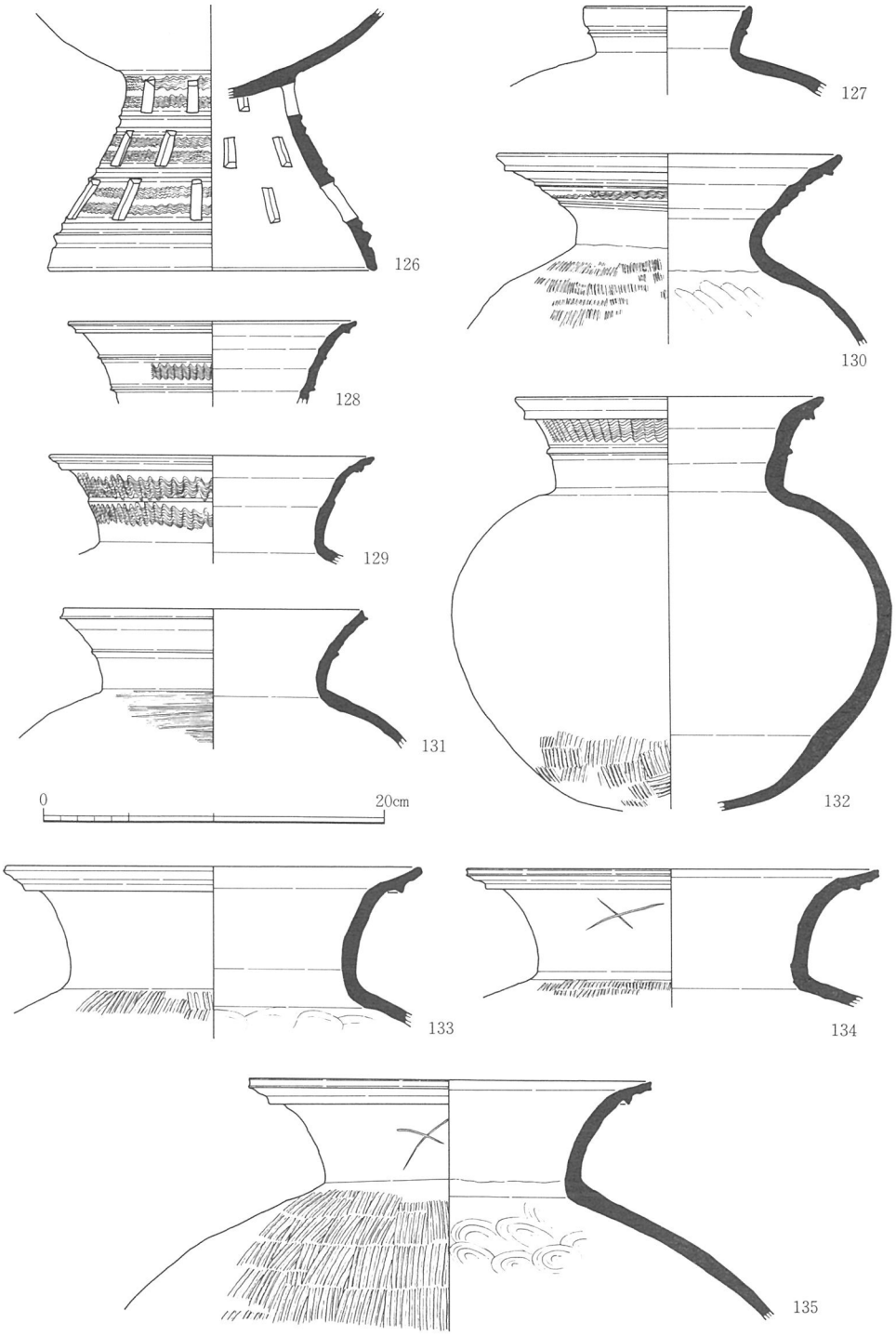
大型甕（136～139）

大型甕は口頸部を図示した。口縁端部を口唇状に丸く仕上げるもの（136）と平らな面をもつもの（137～139）がある。口頸部の装飾はいずれも凸帯を口縁端の近くに1条巡らすが，他に装飾性のあるものは少なく，138に波状紋が認められる程度である。

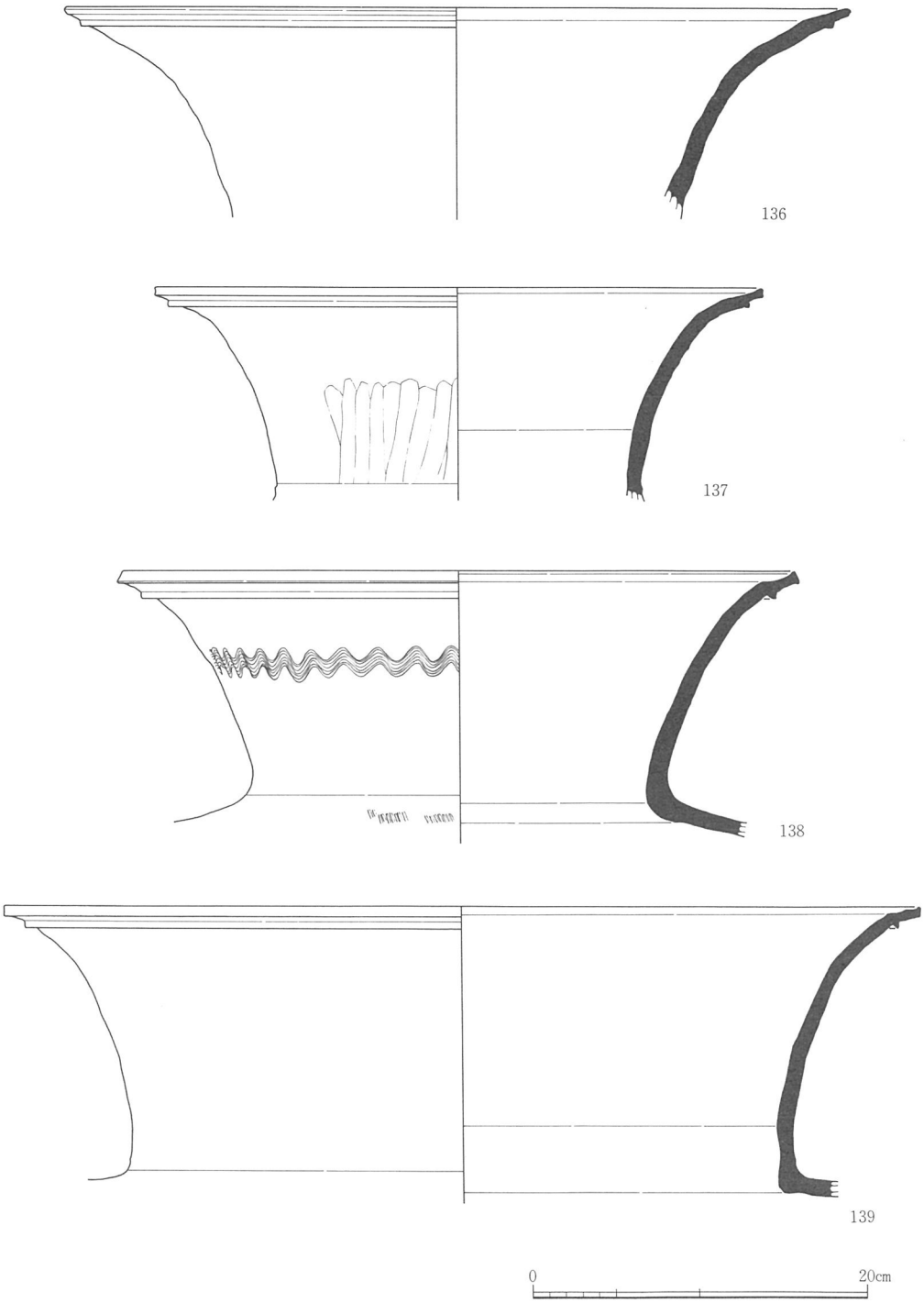
軟質系土器（第27・28図，図版44）

平底鉢（140～150）

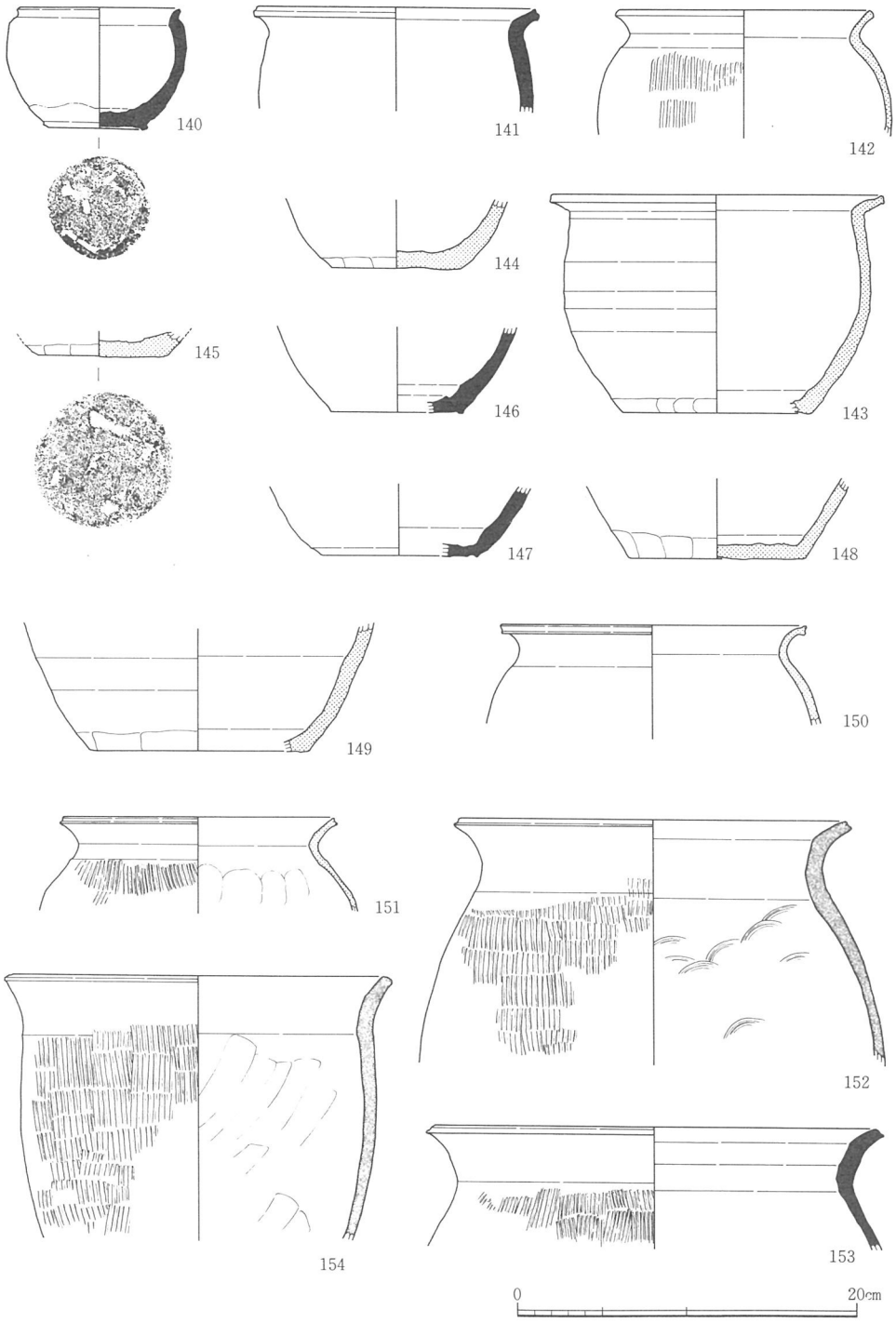
口径10㎝前後の小型品（140），15㎝前後の中型品（141），20㎝前後の大型品（143）がある。器形は体部全体に丸みをもつもの（142・150），口径の割に器高が低く体部の最大



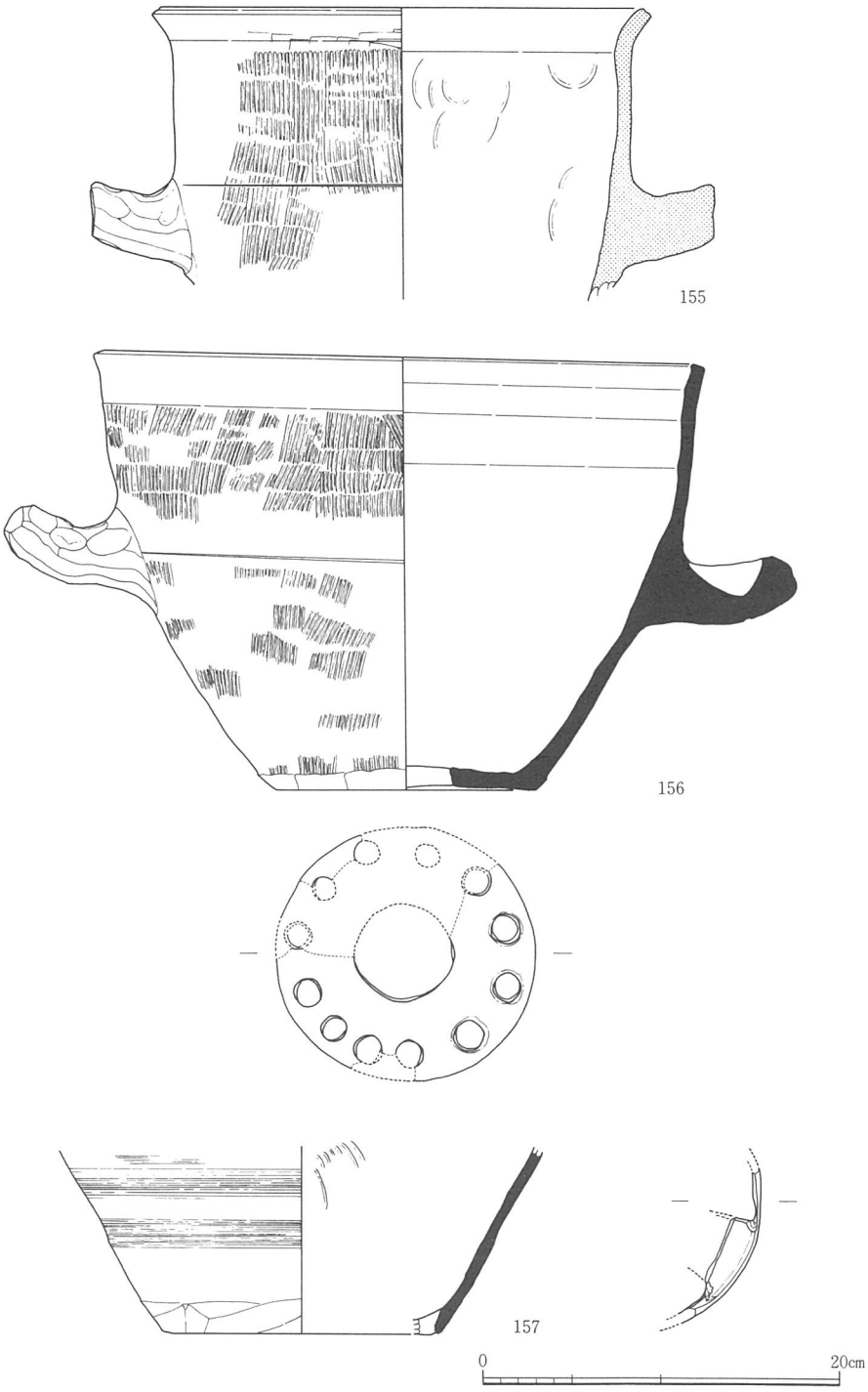
第25図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（５）Ｓ＝1/4



第26図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（６）Ｓ＝1/4



第27図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（７）Ｓ＝1/4



第28図　１－ＯＬ　土器溜り　上層出土遺物（８）Ｓ＝1/4

径が体部中央付近にあるもの（140・143），体部の張りが小さいもの（141）など様々である。口縁部は端部がナデにより凹線状にくぼんだものと，丸くおさめるものがある。外面調整はタタキ目が残存するもの（142）もあるが，ほとんどは回転ナデ調整で仕上げている。底部調整は下端部に静止ヘラケズリを施すものが多く，下面にはロクロのゲタ痕跡が観察されるものもある。胎土はいずれも混和材として多量の砂礫粒を含む。焼成は土師質のもの（142～145・147～150），堅固な酸化焔焼成のもの（147），還元焼成が充分に行われ青灰色を呈するもの（140・141・146）が混在している。また，平底鉢の中には143のように外面に煤の付着したものもある。

長胴甕（151～154）

長胴甕は胴部がラグビーボール状に張り，外面には平行タタキ目を残す。胎土は平底鉢同様砂礫粒を多く含む。焼成は，還元焼成が行われているが焼き上がりの甘い瓦質のものと，土師質のものがある。154は長胴甕としたが，甑の可能性もある。

甑（155～157）

口縁部から底部の蒸気孔まで全体が復元できるものは少ない。155は緩やかに外反する口縁をもち，把手は端部をヘラ切りにより平らに仕上げている。胎土には砂礫粒を多量に含み，焼成は堅固な酸化焔焼成である。156は他の甑に比べ口径の割に器高が低く，扁平な感を受ける。口縁は直立し，蒸気孔は大型円孔の外縁に小円孔を巡らす。胎土には砂礫粒を多量に含み，焼成は還元焼成が行われているが通有の須恵器に比べると甘い。157は還元焼成によって仕上げられ，蒸気孔は円孔の外縁に台形孔を配する形態と推定される。

土師器（158～162）

土師器は高杯と甕を図示した。高杯158は脚裾が大きく開き，脚柱部にはヘラにより面取りが施される。甕は口縁部が外反するものが多いが，160は内湾気味に立ち上がり，端部をわずかに肥厚させる。いわゆる布留式の系譜で捉えられる甕である。

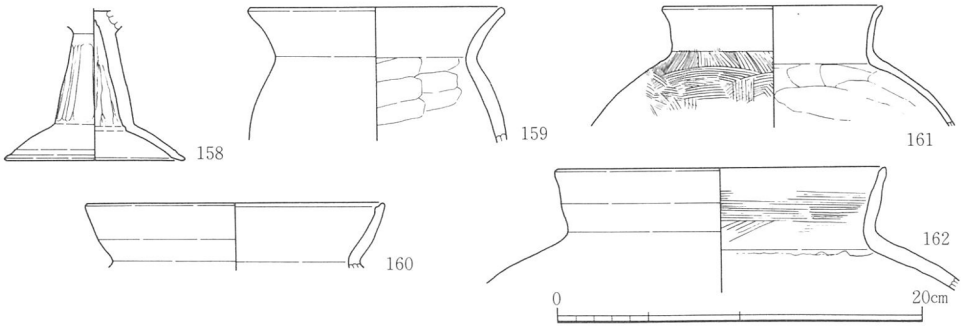
２．中層の遺物

中層からは古墳時代後期の遺物も若干出土しているが，ほとんどは古墳時代中期に属する遺物であり，ここでは中期のもののみを図示している。

須恵器（第30～37図，図版45～54）

蓋（163～166・171～175）

163～166は杯蓋，171～175は高杯の蓋である。



第29図　1－OL　土器溜り　上層出土遺物（9）S＝1/4

杯蓋は，天井部が扁平なもの（163・164）と丸みをもつもの（166）がある。いずれも自然釉は外面に認められ，杯身とセットで焼成された可能性が高い。165は口縁部が直立し，土器溜りでは他に類例がない。他の蓋より後出する可能性もある。

高杯の蓋は，良好な資料が出土している。高杯の蓋は基本的に天井部が沈線と刺突紋で飾られるが，器形の特徴から口径が大きく全体的に扁平な感を受けるもの（171・172）とやや小型で天井部全体に丸みを帯びるもの（173）に分けられる。前者は口縁部と天井部を分ける稜は鋭く張り出し，全体的をシャープに仕上げるていねいなつくりである。それに比べ後者は稜は鈍く，前者よりシャープ感に欠ける。その他，口径18.5㎝を測る大型品（175）や無紋でつまみの形態が特異なもの（174）もあるが，出土数は少ない。175についてはその大きさから高杯よりは，上層に出土例がある脚台付有蓋鉢（107）に伴う可能性が高い。自然釉は172・173が内面，175は外面に認められた。

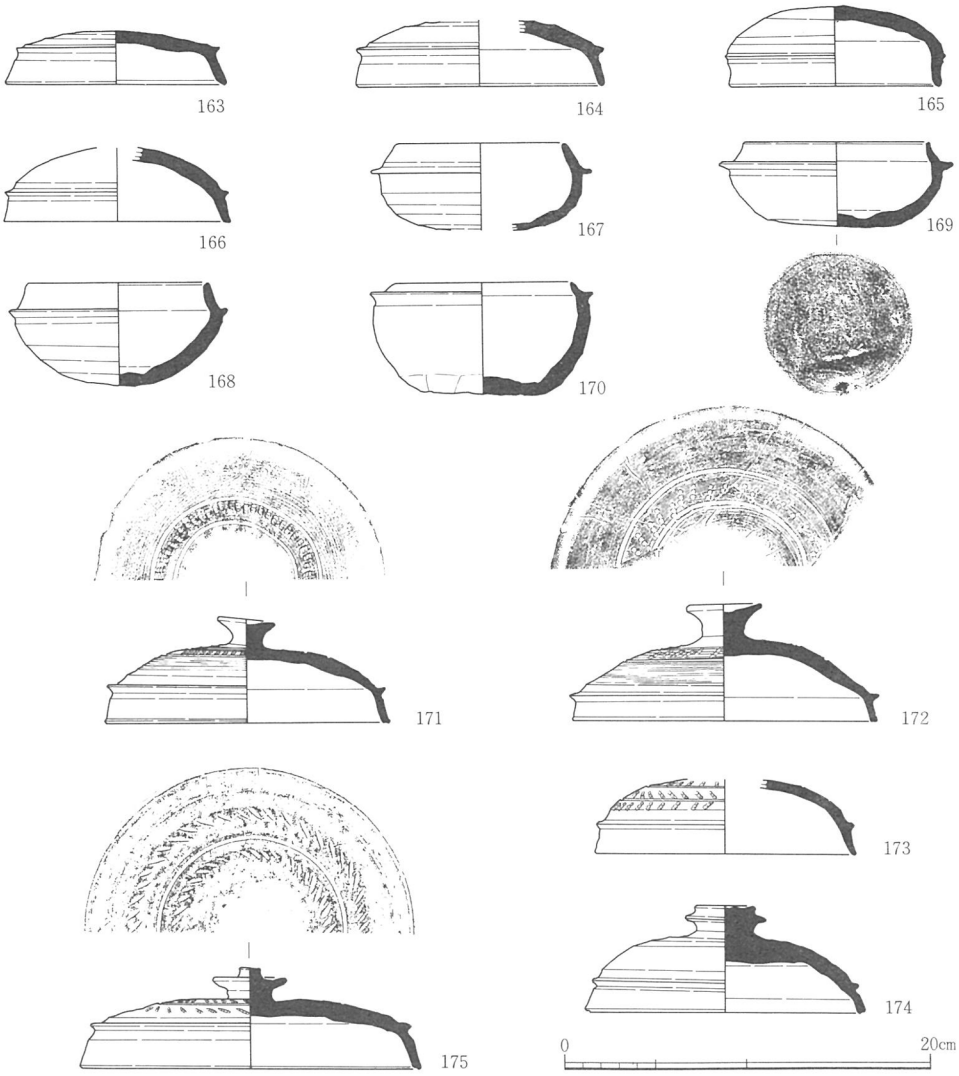
杯身（167～170）

上層同様，底部が丸みをもつもの（167・168）と平底のもの（169・170）がある。168は他の出土例に比べ底部から急角度で立ち上がり，断面は半球状を呈する。平底の169は，器高が低く扁平で，上層出土の76・77と同形態である。170は底部下端部の稜が鋭く，器高の高い土釜状を呈するが，上層の72に比べると立ち上がりは短く，体部には丸みがあり全体的に重厚なつくりである。陶邑の中ではＴＫ73号窯に類例が求められよう。また，杯身では167に蓋とセット焼成の痕跡が観察された。

高杯（176～201）

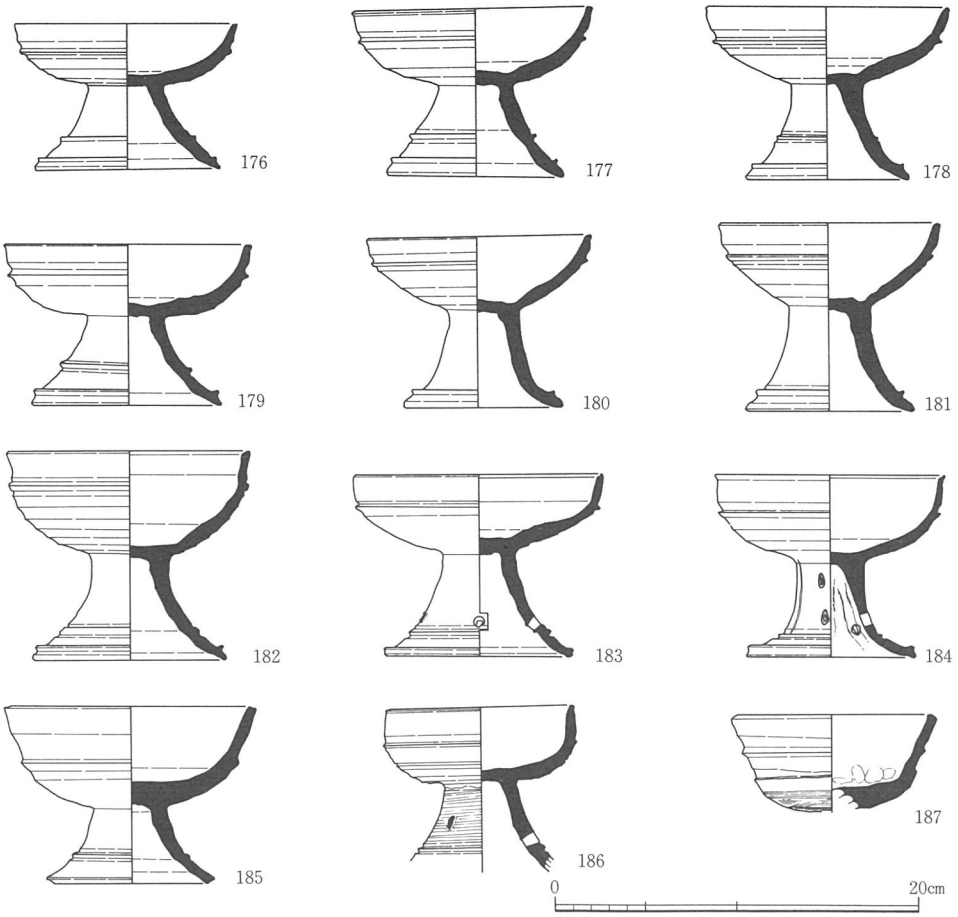
中層でも無蓋高杯の出土量が圧倒的に多い。

無蓋高杯は，蓋を逆転させたような杯部（176～186）の他に，口縁部を大きく外反させた鉢状の杯部（188～195）の出土量が増加する。前者の様相については上層とほぼ同様で



第30図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（１）Ｓ＝1/4

ある。ただ，中層では脚部の裾に段の有するものはみられず，全体に器壁が厚く粗いつくりのもの（185），小型品（186），脚部の透かしの配置があいまいなもの(184)など特異な形態も数点みられる。後者については中層で良好な資料が得られている。口径は16～17㎝のものが通有の大きさであるが，20㎝を越える大型品（195）もみられる。通有の大きさのものは杯部の深さは比較的浅いが，大型品は口縁部が長く体部に丸みをもち，杯深は深い。脚部は全体を把握できるものは少ないが，通有の大きさのものは三角形透かしを配するものが多いようである。



第31図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（２）Ｓ＝1/4

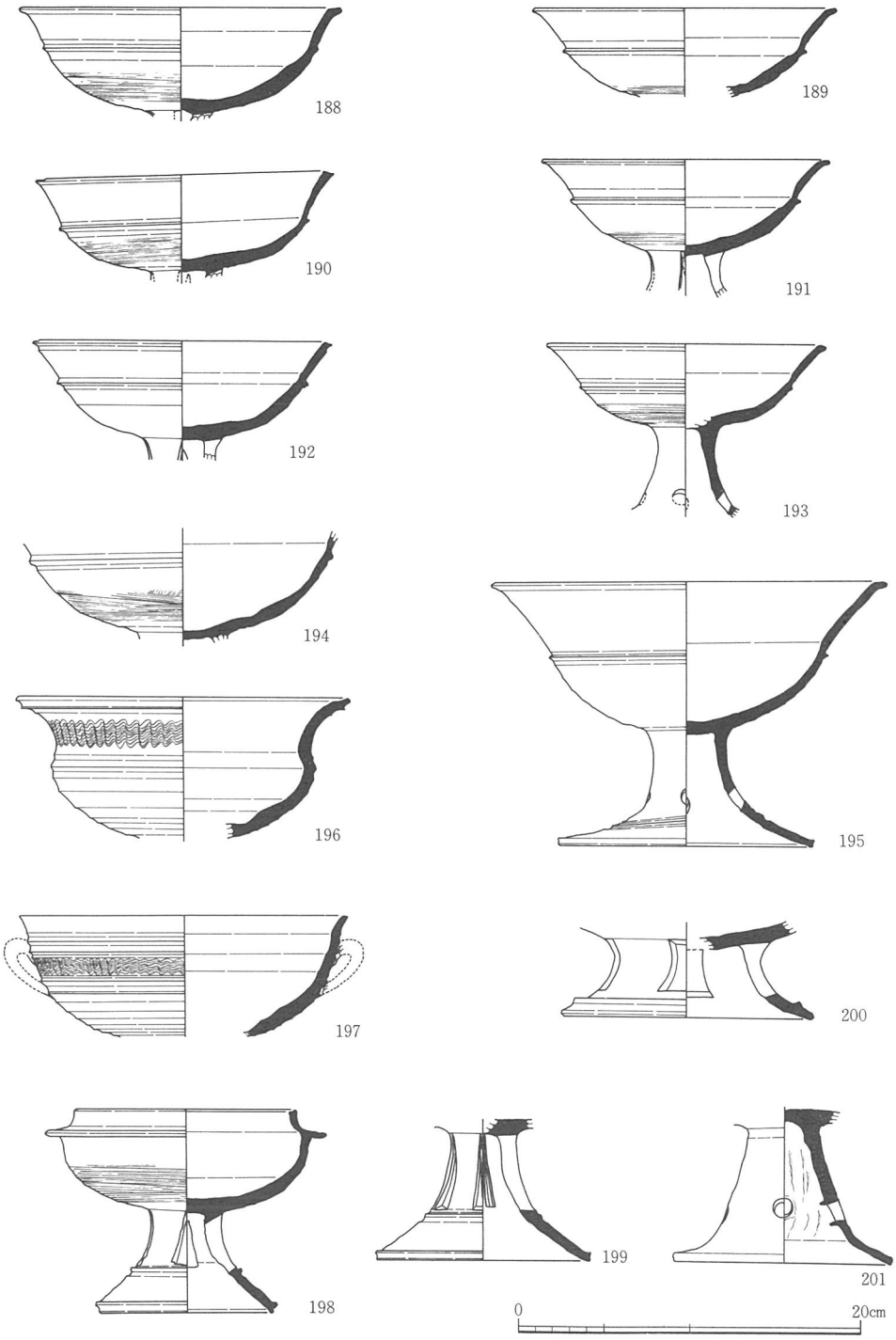
その他，無蓋高杯には数は少ないが，杯体部から口縁部が「く」の字状に大きく外反し，波状紋を巡らすもの（196）や杯部に大きな飾りつまみを付けるもの（197）もある。

有蓋高杯は全体器形が把握できる198を図示した。口径は13㎝で上層出土の94に比べると小さい。口縁部の立ち上がりは短く，受部は水平に大きく張り出す。脚部には三角形透かしを４方に配し，凸帯は鋭く引き出している。

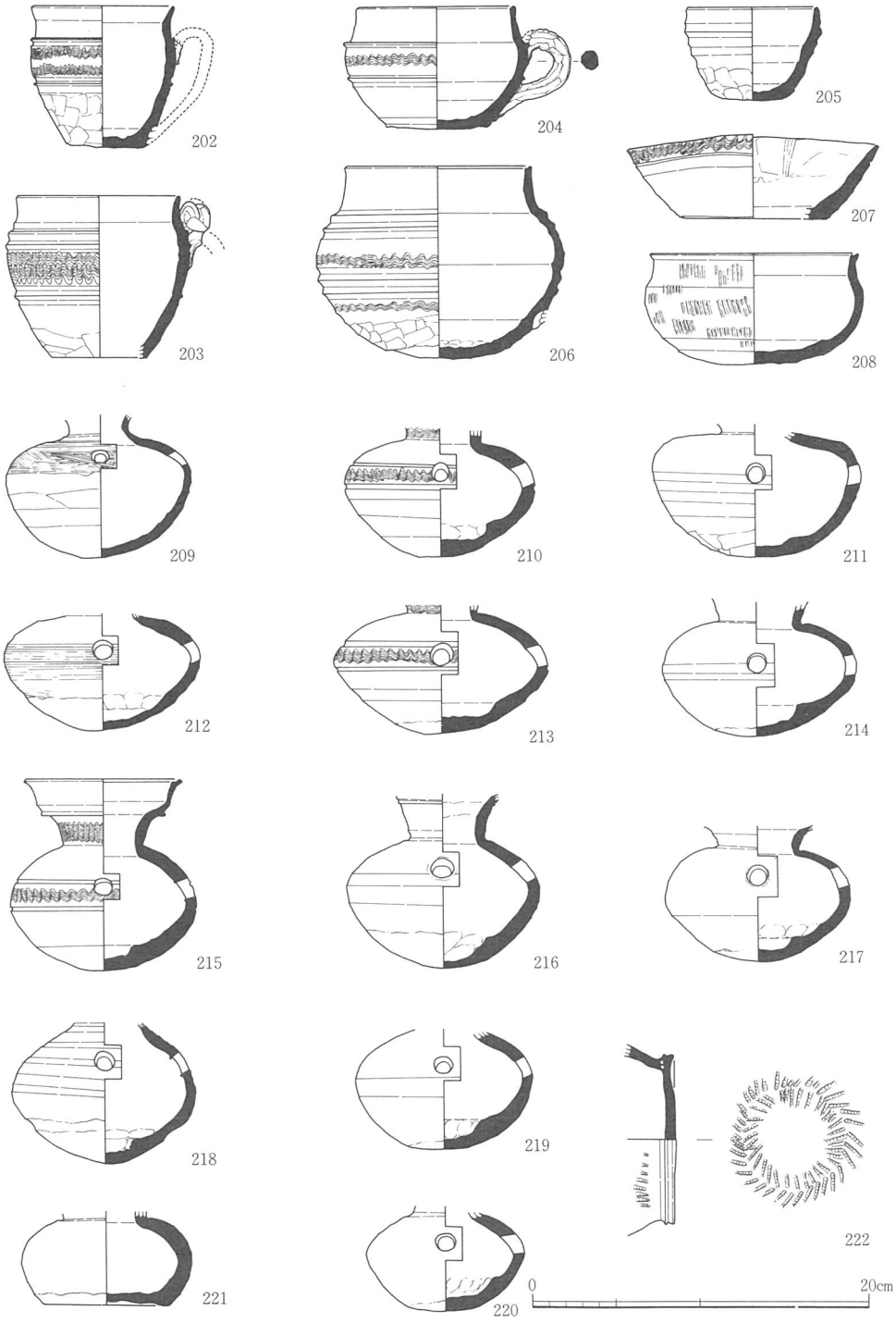
199～201は脚部のみの残存品である。200は低脚の大型品で脚台付鉢の可能性もある。

把手付椀（202～206）

上層に比べ出土量は増加する。器形の特徴も様々で，器高の高いもの（202・203），口径の割に器高の低いもの（204），大型品で体部が球形を呈するもの（206），小型で粗いつくりのもの（205）などがみられる。把手部は完存品は少ないが，203には渦巻状の蕨手装飾が施され，204にも紋様装飾の欠損が把手上部に観察される。204・206は器形等の特徴



第32図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（３）Ｓ＝1/4



第33図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（４）Ｓ＝1/4

から202・203より後出する可能性もある。

鉢（207・208）

207は口縁部が歪んでいるが，これは口縁部をヘラ切りによって仕上げているためである。また，この鉢は口縁部を薄く仕上げるために横方向のヘラケズリを内面に施すこと，波状紋を施紋した後に口縁成形のヘラ切りを行っていることから，当初は器高の高い器種として製作したが，その成形途上で鉢へ変更されたものと推定される。208は底部付近を部分的にナデによって整えているが，ほとんどは未調整である。

瓶（209～221）

完存品は少なくほとんどは口頸部の欠損した底体部である。体部の形態には，肩部の張りが大きく最大径が体部上半にあるもの（209・211），肩は張るが最大径は体部のほぼ中央にあるもの（210・212～214），体部全体に丸みをもつもの（215～219）などがある。紋様は波状紋を巡らすものやカキ目を施すものもあるが，無紋のものが多い。外面調整は上部を回転ナデ，回転ヘラケズリで整え，最終的に底部をナデや静止ヘラケズリで仕上げている。内面は底部に押圧痕跡が顕著に認められるものが多く，棒状工具により底部を押し出し丸底成形が行われていると考えられる。また，中層では底部成形が行われていないもの（221）も出土している。221は体部上半をロクロ調整で整えた後，底部を押し出さず，平底未調整のまま焼成したものである。ただ，221は瓶としたが，円孔の有無が不明であり小型壺の可能性もある。

樽形瓶（222）

中層でも樽形瓶の出土数は少なく１点のみが図示できた。破片のため全体器形は把握できないが，体部の張りは大きいと推定される。

大型蓋（223）

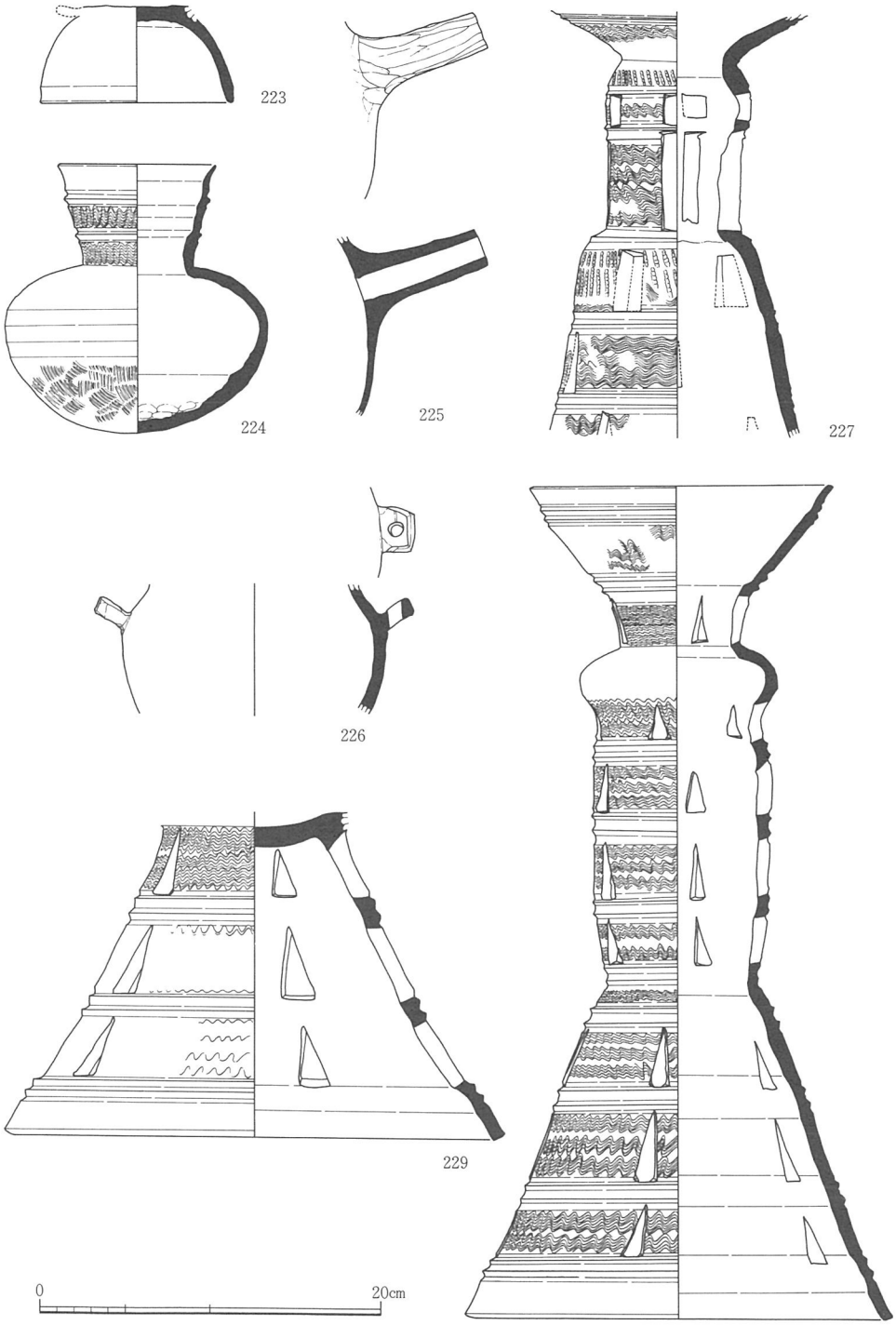
短頸壺の蓋と考えられる。上端部には把手の欠損が観察されるが，欠損部の片面には自然釉が付着しており，二次的に窯の焼き台等に再利用された可能性もある。

小型壺（224）

瓶に比べ小型壺の出土数は少ない。直口にのびる口頸部は上層出土の壺に比べ細長く，波状紋によって飾られている。

注口土器（225）

注口部のみの破片で，全体の器形は分からない。注口部の外面は細かいヘラケズリによっててていねいに仕上げている。



第34図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（５）Ｓ＝1/4

双耳付壺（226）

破片のため不明な部分が多いが，短頸壺に把手状のつまみが付くものと推定される。陶邑ではＴＫ216号窯に類似例がある。

器台（227～229）

筒形器台（227・228）と高杯形器台（229）がある。227は筒部の短い小型品である。受部は筒部から大きく広がり，筒部と脚部の境界には段を有する。透かしは筒部に長短の短冊形のものを２段に直列させ，脚部には１段目に台形，２段目以下は三角形のものを千鳥状に配する。228はバランスのとれた優品である。受部には短い頸部が有り三角形透かしを５方に配する。筒部は上端部が壺の体部状に丸みをもち，直立する下部は凸帯により４段に区画される。脚部は筒部から直線的に開き，凸帯により３段に区画される。透かしは筒部，脚部とも三角形のものを５方に配す。また，この器台は受部，筒部上端の形態からは，筒形器台と壺を組合せた状況を表現していると考えられる。229は高杯形器台の脚部で，直線的に開き，凸帯によって３段に区画される。区画内には波状紋を巡らせるが，自然釉のため完全には図化できなかった。

壺（230～245）

口径20㎝前後のもの（231～240・242）と25㎝を越えるもの（241・243～245）がある。このうち前者は口頸部の形態によって細分される。①短く外反する口頸部の中央に凸帯を巡らすもの（231・232・235），②直線的に長くのびる頸部に凸帯を数条巡らすもの（233・234），③口縁部を大きく外反させ，凸帯により紋様帯を区画するもの（236～239），④口縁部を大きく外反させ，口縁端近くに断面三角形の凸帯を１条巡らす単純なものなどである。口縁端部の形態は①と②，③と④で共通点が多く認められた。また，先に示した上層の131は①，128は②，129・132は③に分類される。

25㎝を越えるものは，いわゆる中型甕と呼称されているもので，口頸部の形態は大型甕と共通する。

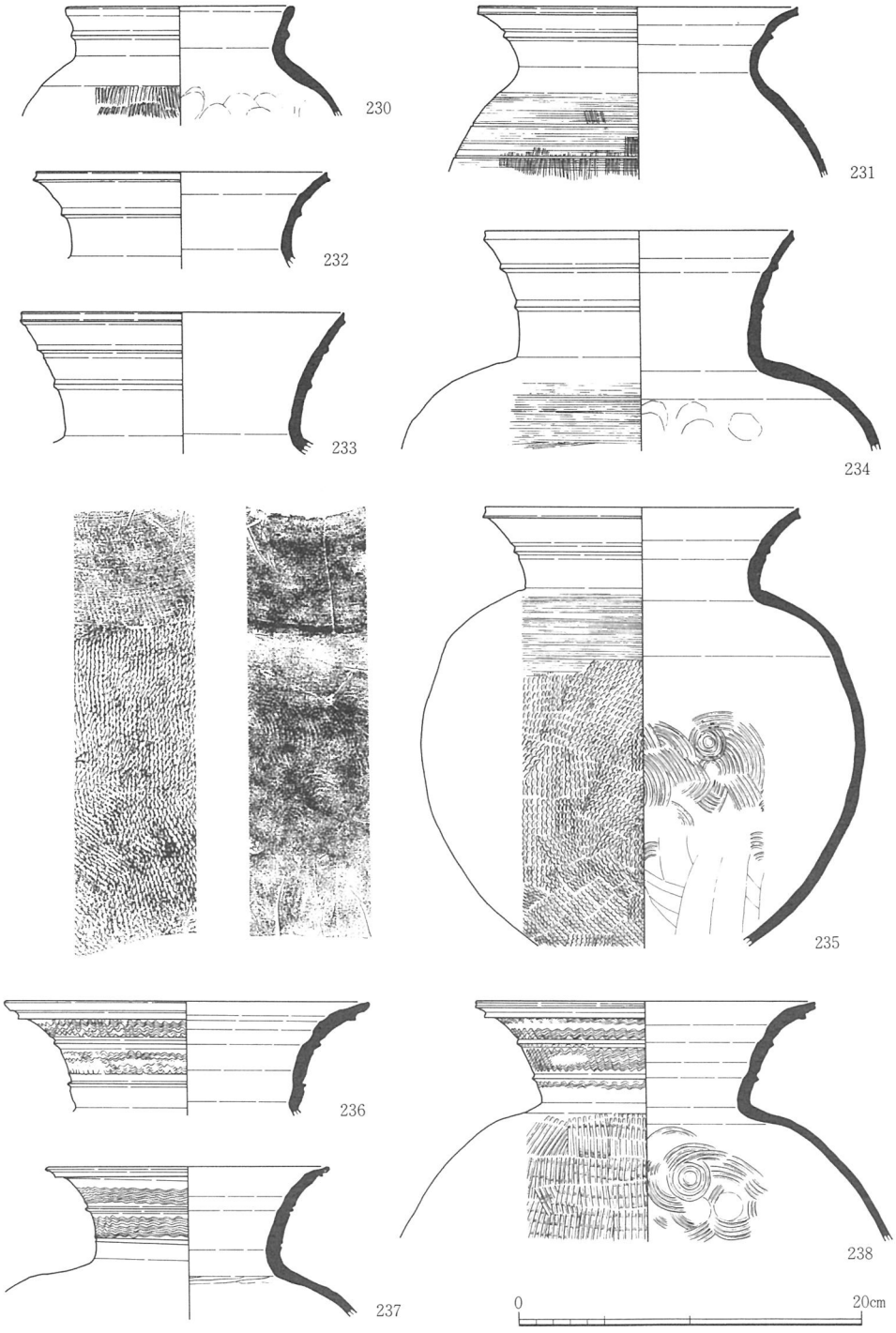
大型甕（246～249）

上層同様，口縁端部を丸く仕上げるもの（246）と平らな面をもつもの（247～249）がある。出土量は圧倒的に後者形態のものが多い。

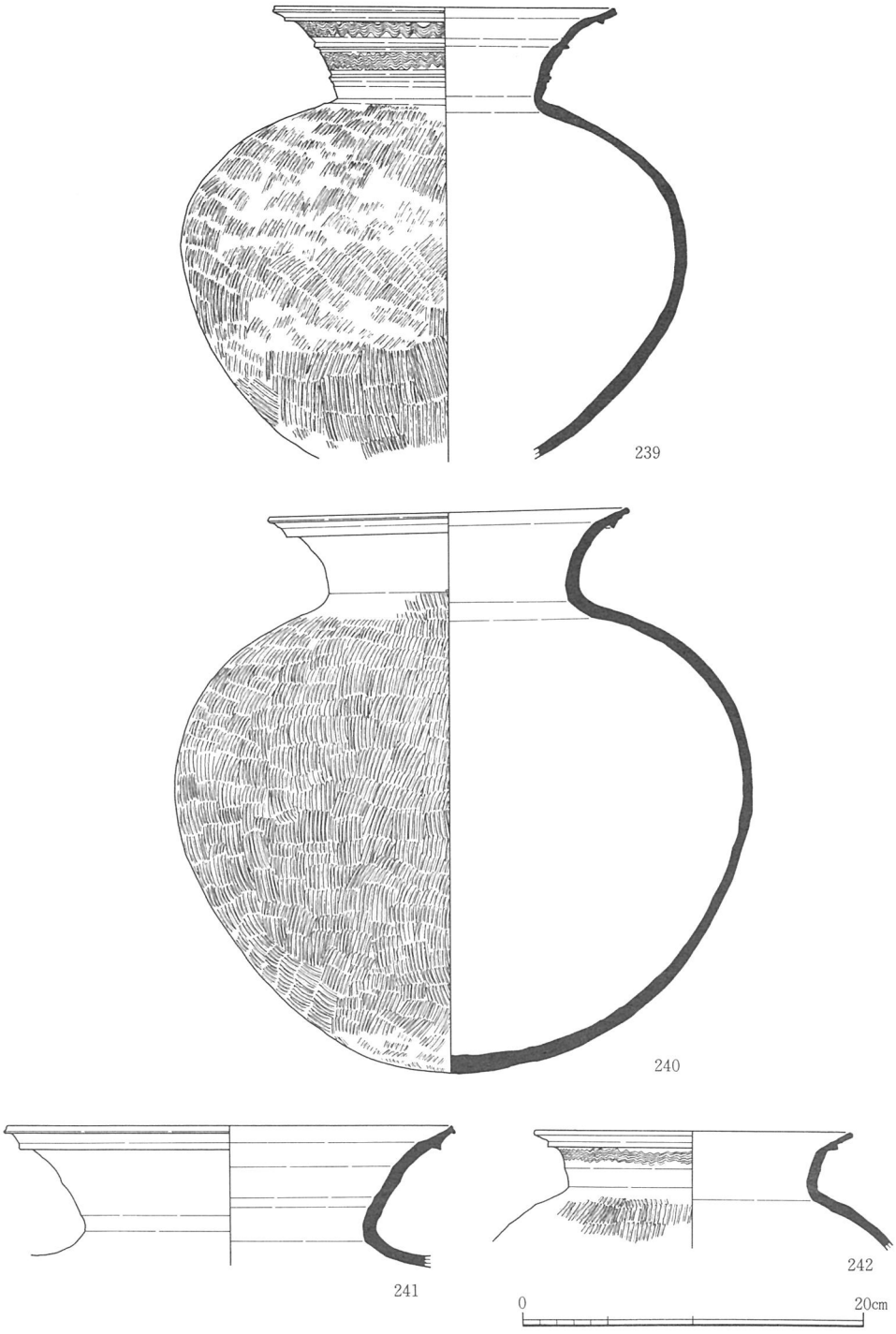
軟質系土器（第38図～41図，図版54～56）

平底鉢（250～263）

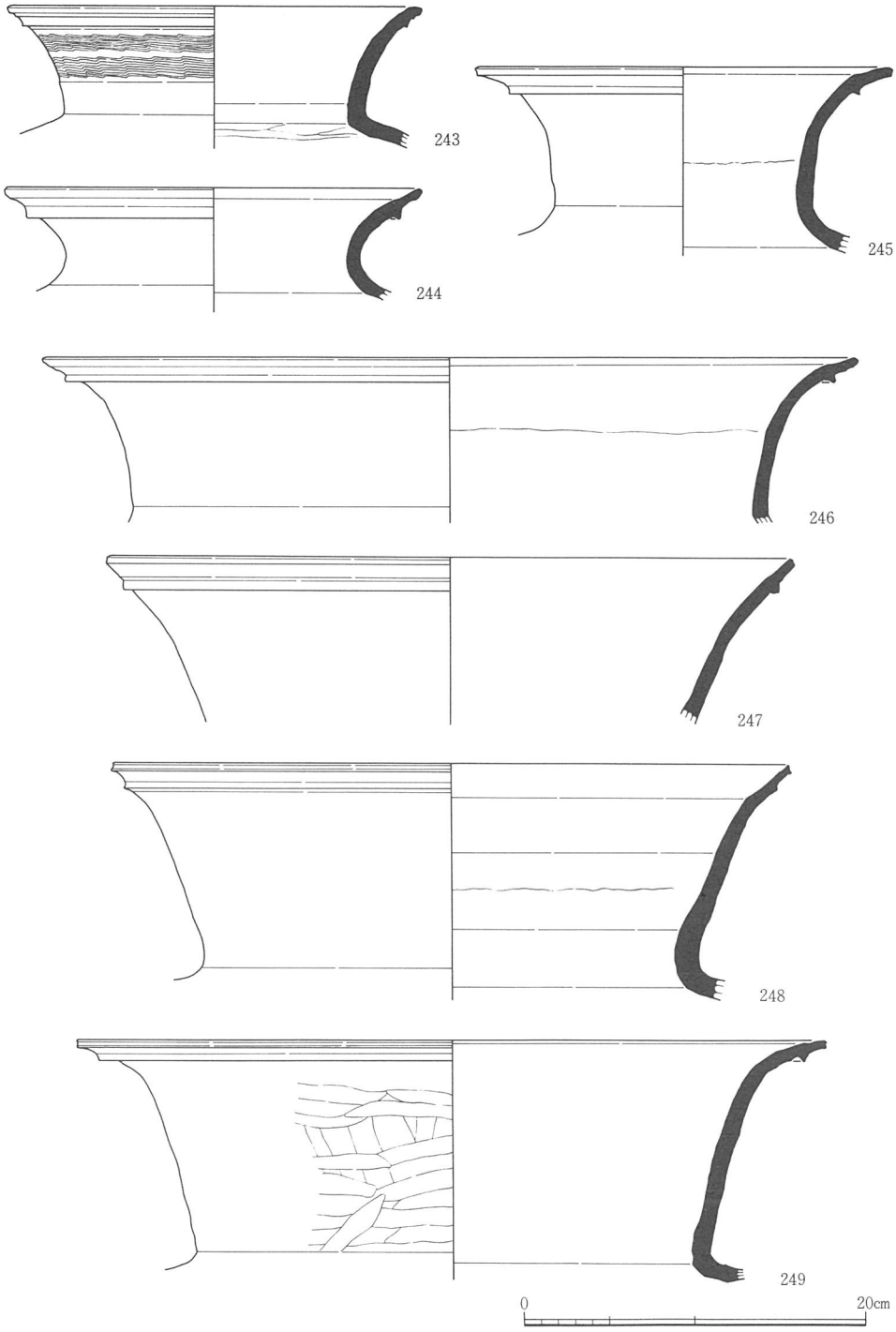
中層では胴部の最大径が上半にある形態のもの（253・257）も出土しているが，大きさ，



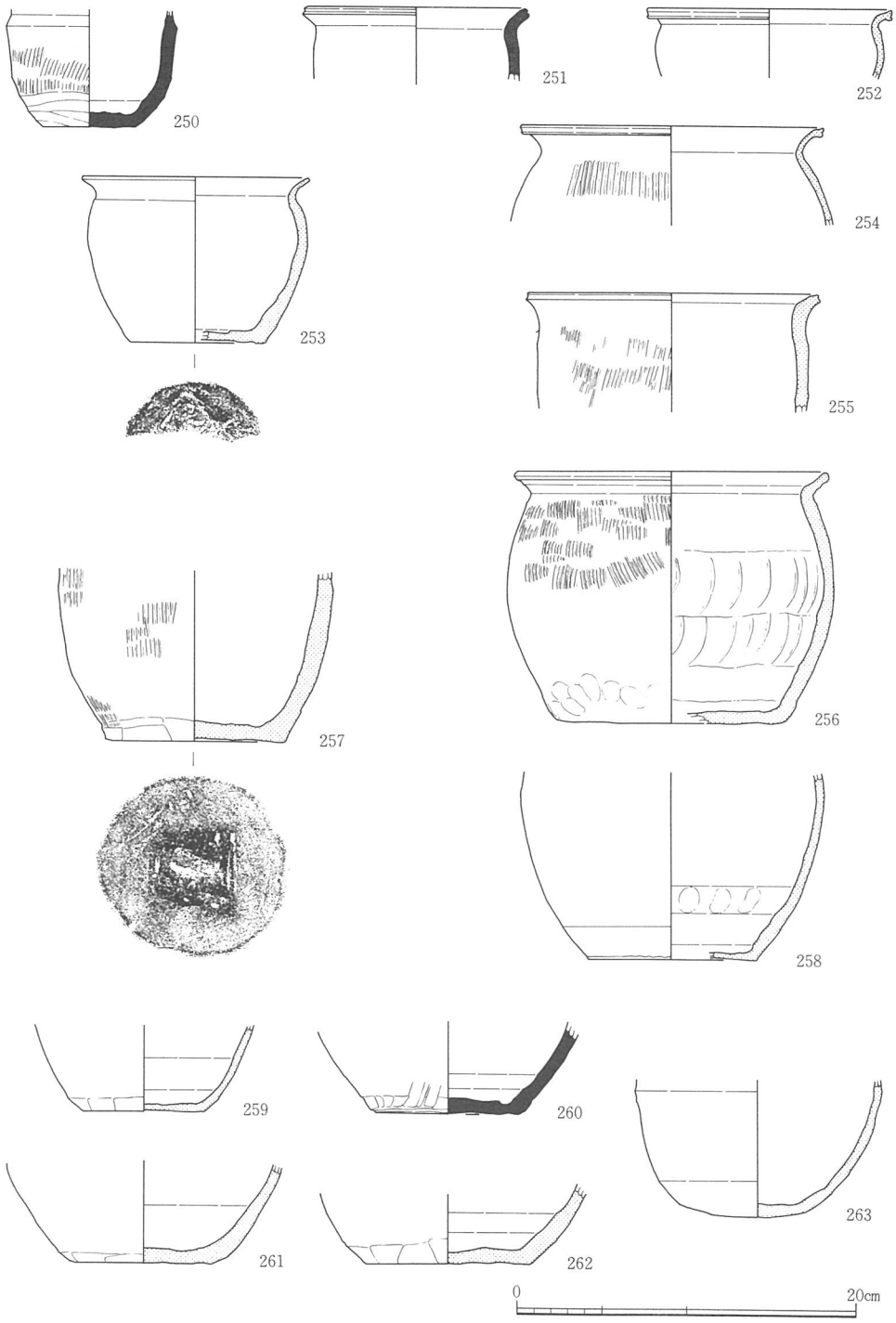
第35図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（６）Ｓ＝1/4



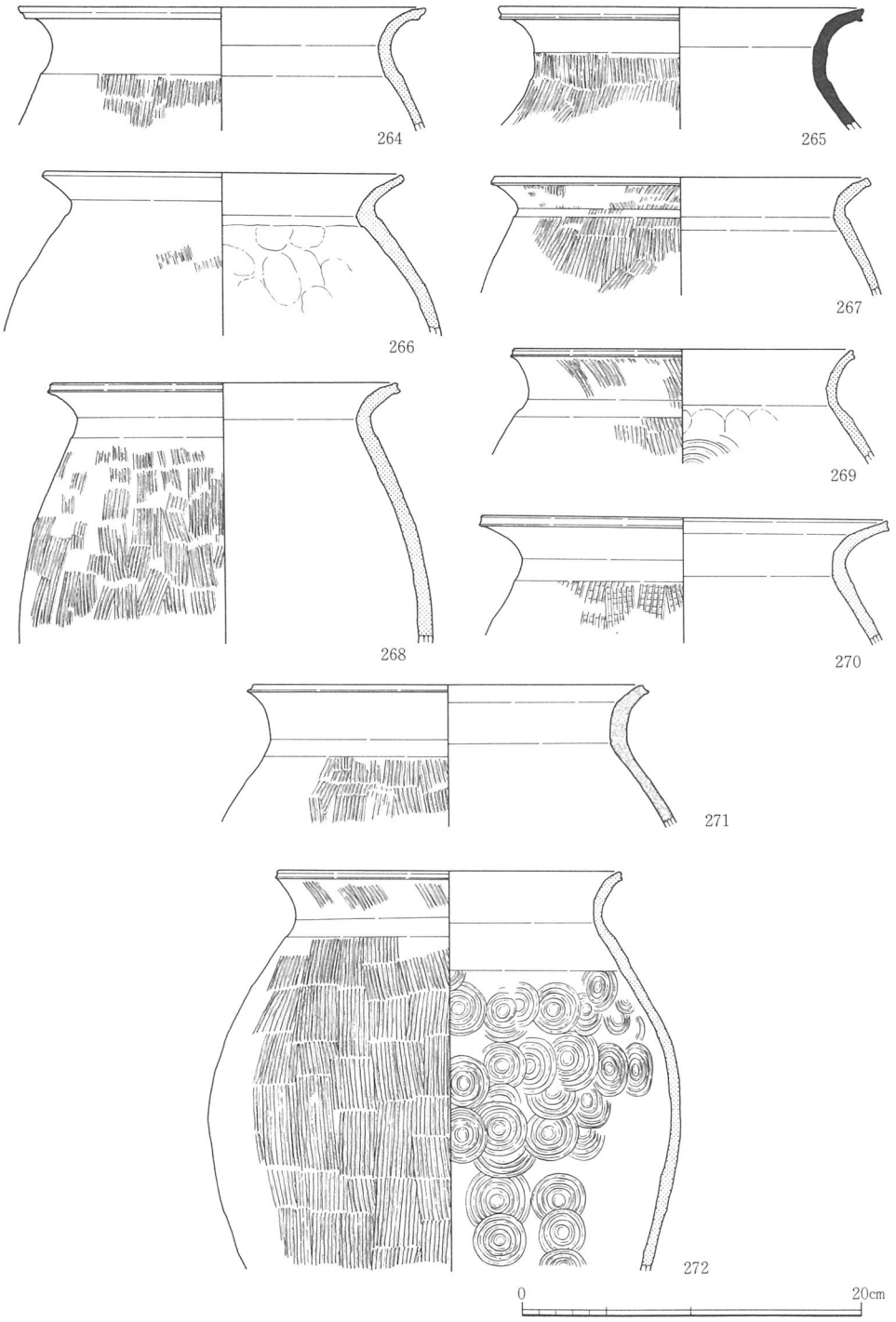
第36図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（７）Ｓ＝1/4



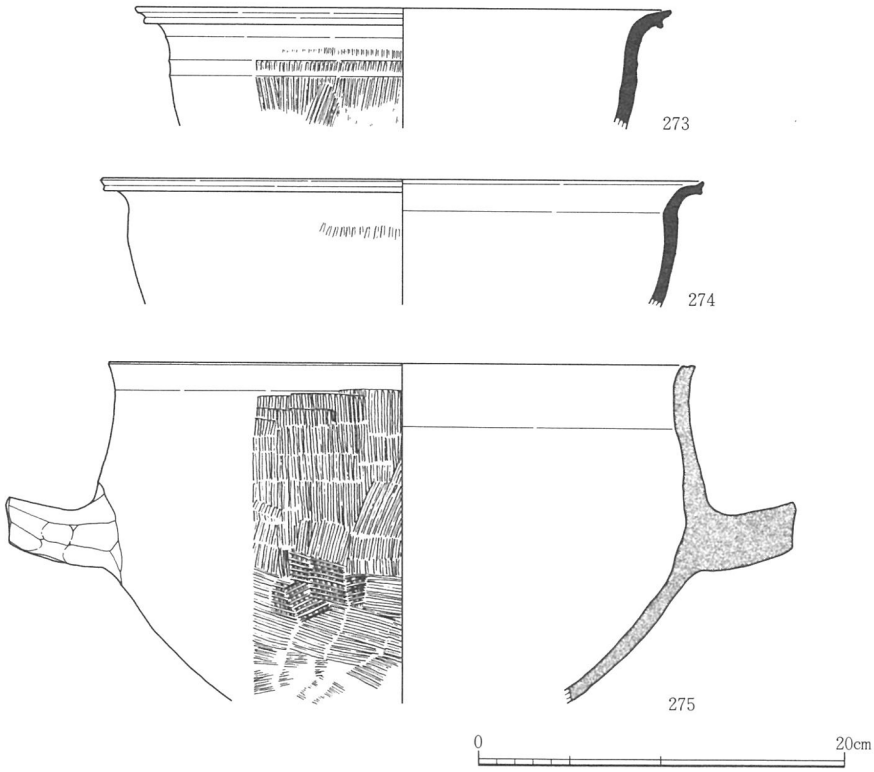
第37図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（８）Ｓ＝1/4



第38図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（９）Ｓ＝1/4



第39図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（10）Ｓ＝1/4



第40図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（11）Ｓ＝1/4

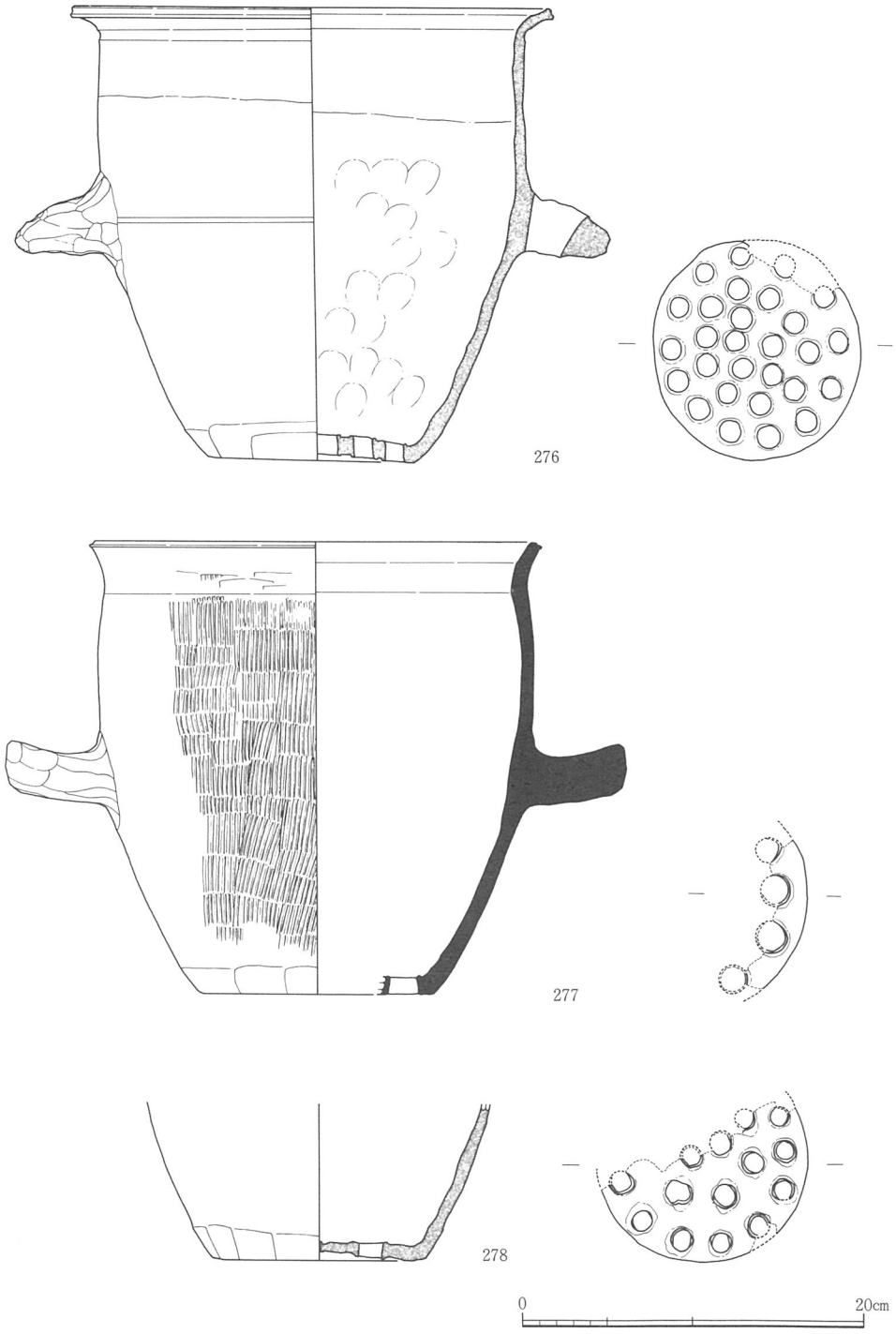
器形，口縁部の特徴，胎土，焼成状況など基本的な様相は上層と同様である。また，ここではタタキ痕跡のあるものも図示しているが，基本的にはナデ調整で仕上げており，255～257は部分的にタタキ痕跡が残存したものである。263については平底鉢として扱ったが，底部の形状や胎土に砂礫粒を含まないなど，通有の平底鉢の特徴とは異なっている。

長胴甕（264～272）

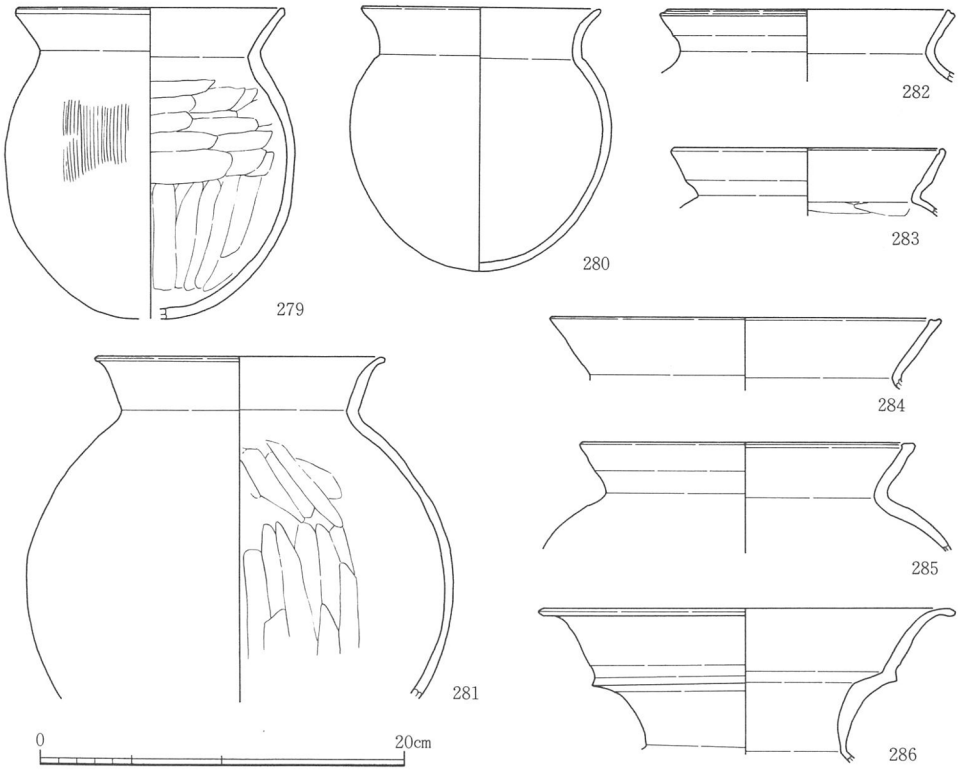
完存したものがなく全体の器形は把握できないが，胴部は全体的にラグビーボール状に大きく張り出す形態のものが多い。外面のタタキは平行タタキを用いるものがほとんどで，内面の当て具痕はナデ調整によりスリ消すものが多いが，未調整で同心円紋が残存しているものもある。焼成は，焼きの甘い須恵質や瓦質のもの，土師質のものが混在し，胎土にはいずれも砂礫粒を多量に含んでいる。

堝（273～275）

口縁部が短く外反するもの（273・274）と直立するもの（275）がある。焼成，胎土の特徴は長胴甕と同様である。



第41図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（12）Ｓ＝1/4



第42図　１－ＯＬ　土器溜り　中層出土遺物（13）Ｓ＝1/4

甑（276～278）

中層では全体器形の復元できるものが出土している。276は口縁部を短く外反させるもので，把手は牛角状を呈し，蒸気孔には小円孔を多数巡らす。外面は回転ナデによって整えられ，底部付近を静止ヘラケズリによって仕上げる。胎土に含まれる砂礫粒は長胴甕などに比べ少なく，焼成は瓦質に仕上がっている。277は口縁部が直立気味に立ち上がり，把手の端部を平坦に仕上げるものである。外面には平行タタキ目を残存させ，底部付近は静止ヘラケズリで仕上げる。焼成は焼きの甘い還元焼成で，胎土には砂礫粒が多量に含まれている。

土師器（第42図－279～286）

甕と壺を図示した。279～281は短く外反する口縁をもち，体部は球形より若干胴長である。内面にはヘラケズリを施すが，粗い。284・285は口縁部の破片であるが，その特徴からはいわゆる布留式土器の系譜を引く形態と考えられる。甕に比べ壺の出土量は少ない。286は二重口縁壺の口頸部であるが，摩耗が著しく調整は不明である。

3．下層の遺物

下層は古墳時代中期の単純層である。ここでは初期須恵器や軟質系土器を中心に図示している。

須恵器（第43図～48図，図版57～63）

蓋（287～289・291～295）

287・288は杯蓋，289・291～293は高杯の蓋である。

杯蓋287の天井部は扁平で，広い範囲を静止ヘラケズリで仕上げている。288は天井部に丸みをもち，天井部と口縁部の境の稜は鋭く張り出す。また，288は小破片のため明確ではないが，高杯の蓋の可能性もある。

高杯の蓋は，口径が大きく端部や稜をシャープに仕上げるていねいなつくりのもの（292）と器壁が厚く全体にシャープ感に欠けるもの（291・293）がある。その他，天井部が扁平な小型で無紋の289もあるが出土数は少ない。自然釉は292が外面，289・293は内面に認められた。

294・295は口径に比べ器高が高く，全体的に丸みをもつものである。ここでは小型品の蓋として示したが，短頸壺などに伴う可能性が高い。

杯身（290）

下層では図化が可能なものは少なく，1点しか示していない。小破片のため全体の器形は不明であるが，底部が丸みをもつ形態のものと推定される。

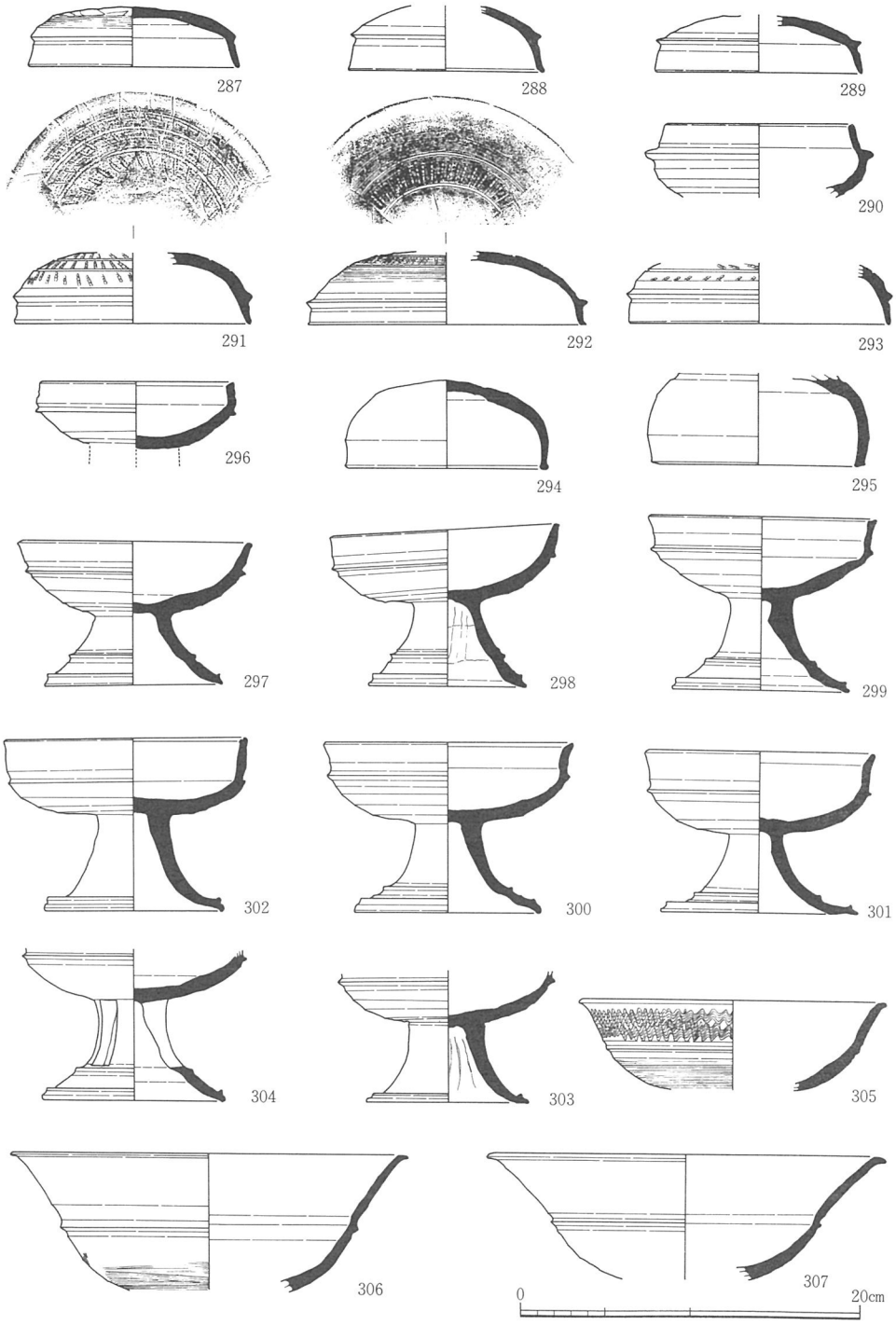
高杯（297～307・311）

中層に比べて出土量は減少する。出土遺物の様相は上・中層と同様で，無蓋高杯の出土が圧倒的に多く，その中でも蓋を逆転させたような杯部を有するもの（297～304）の出土が顕著である。306・307は口縁部を大きく外反させた口縁をもち，中層の195と同形態である。305も中層188～193のような外反する口縁のものと同形態と考えられるが，305のように波状紋を巡らす例は少ない。

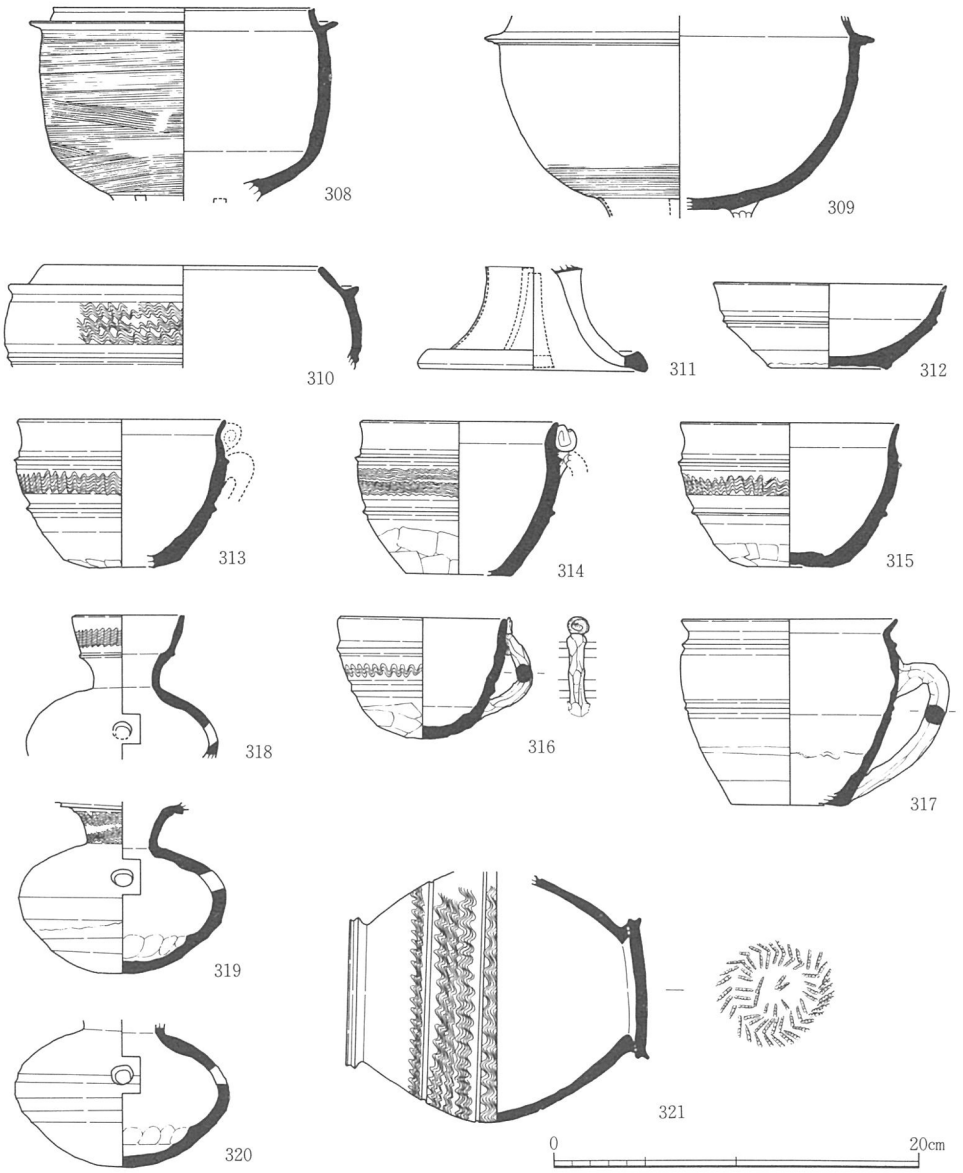
有蓋高杯はその可能性がある脚部（311）を図示している。

脚台付有蓋鉢（308～310）

309は308に比べ体部に丸みをもつが，鉢部や脚部の透かしの形態には共通点が多く同形態と考えられる。310は鉢部の上半部の破片である。立ち上がり部は大きく内傾し，体部には凸帯が巡り文様帯を区画する。また，脚台付有蓋鉢は，上層で完形品（107）が出土しているが，受部の形態，体部の凸帯，脚部の形態など細部形態は異なる。



第43図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（１）Ｓ＝1/4



第44図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（２）Ｓ＝1/4

脚台付鉢（324）

残存部が鉢部の一部と脚部のため，全体の器形は不明である。鉢部は波状紋，刺突紋，脚部も波状紋や５方に配された三角形透かしで飾られ，装飾性の高い鉢である。また，焼成なども含めた諸特徴からは，310と同一個体の可能性が高い。

把手付椀(313～317)

中層出土の203に比べ，器高が低いやや扁平なもの（313～315）がみられる他，器高が高く器壁を薄く仕上げたもの（317），凸帯の稜が鈍く底部調整もあいまいな粗いつくりのもの（316）などがある。把手は，完存したものは少ないが，313・314・316は渦巻状の蕨手で加飾される。

鉢（312）

口縁部を若干上方に屈曲させるが，上層出土の105と同形態と考えられる。底部は部分的にヘラケズリを施す程度で，粗い調整である。

瓻（318～320）

中層に比べて出土量は減少する。319・320は上・中層の中にも多数認められる通有の形態のものである。318は他の瓻に比べ口縁部は直立する，口縁と頸部の境界となる段が小さい，口縁部に波状紋を巡らすなどの特徴をもち，出土例は少ない。

樽形瓻（321）

樽形瓻のなかでは小型品に属する。胴部が大きく張る形態で，紋様帯は沈線によって区画される。

樽形土器（322）

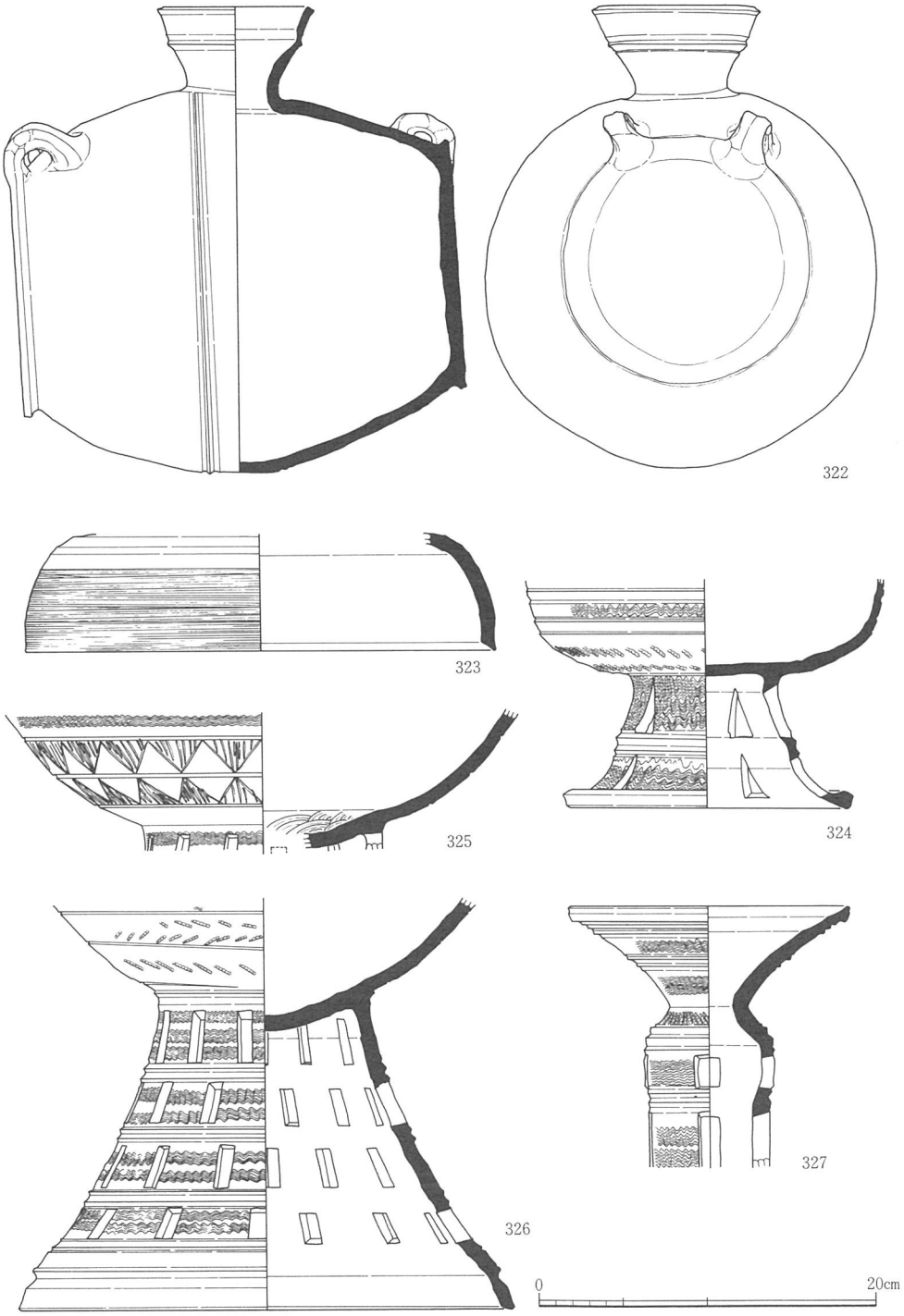
胴部に円孔が穿たれずここでは樽形土器とした。器形は樽形瓻と酷似するが，胴部径は約22㎝を測り，通有の樽形瓻よりも大型の製品である。装飾は胴部中央付近に凸帯が２条巡るだけのシンプルなもので，樽形瓻に通常認められる波状紋や刺突紋は施されていない。また，この土器には，二個一対となる円環状把手を両側端の上面に付けるが，このような形態のものは陶邑の中では他に類例が見られない。

大型蓋（323）

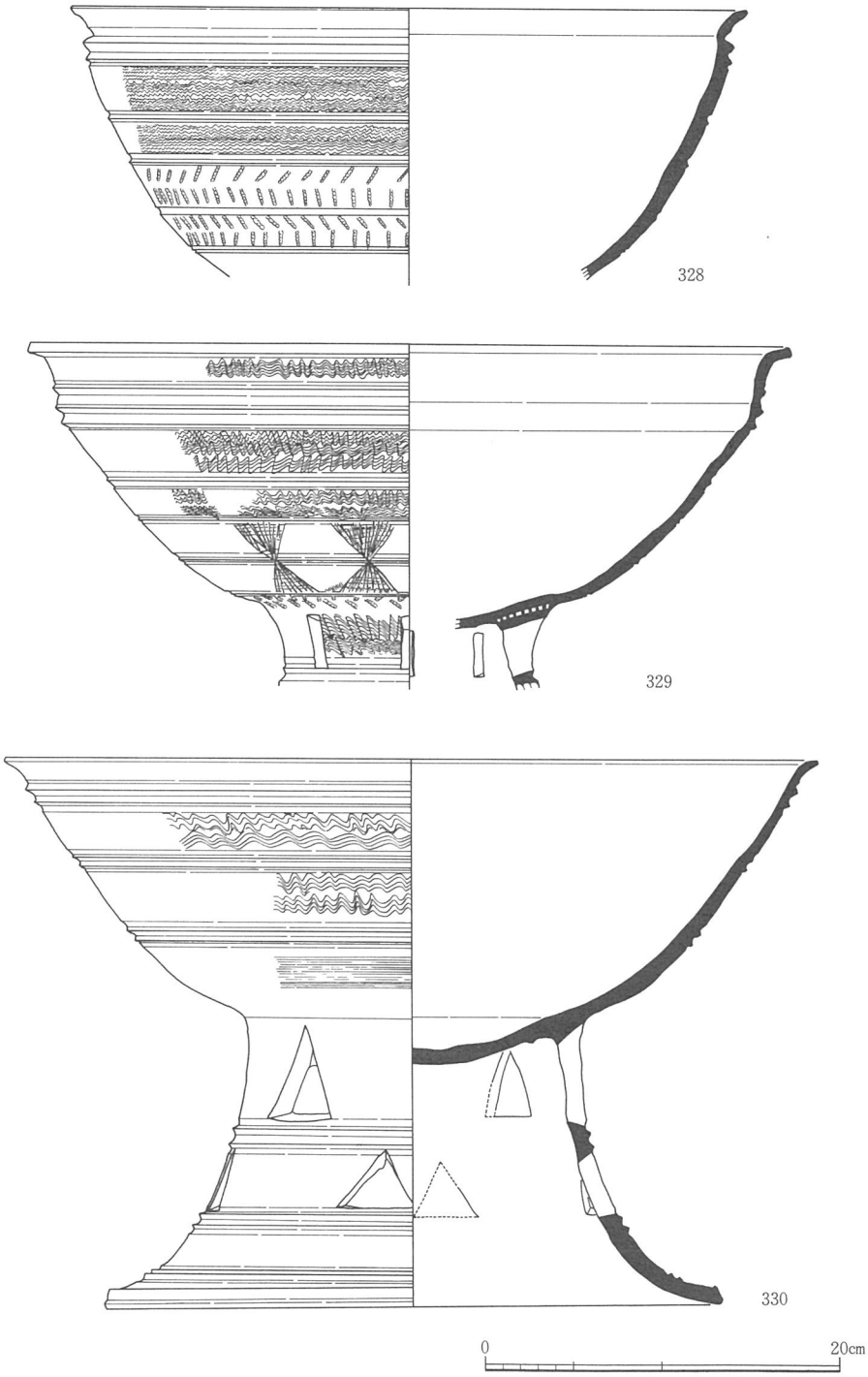
口径27.5㎝を測る。口縁部にはカキ目を施し，天井部付近は回転ヘラケズリで仕上げている。

器台（325～334）

下層では，高杯形器台の良好な資料が得られている。高杯形器台は８点図示したが，そのうち全体器形が復元できるものには330，333，334の３点がある。330は杯部に緩やかな丸みをもつが，口径に比べ深さが浅く，口縁部を緩やかに外反させる。脚部は太く短く，脚裾が大きく広がる特徴をもち，透かしは三角形のものを２段６方に千鳥状に配する。334は屈曲して直線的な杯部をもち，口縁端部は330と酷似する。紋様帯には細かい波状紋



第45図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（３）Ｓ＝1/4



第46図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（４）Ｓ＝1/4

を施している。脚部の形状は330と酷似するが，334では透かしに三角形と短冊形を混在させている。333は杯部にわずかな丸みをもち，大きく外反させた口縁部の端部下端には三角形の凸帯を巡らせる。脚部は細長く，直線的に下方にのびる特徴をもち，透かしは三角形のものを5方に直列に配する。紋様の特徴は杯下部に単位の大きい波状紋を巡らすことが注目される。332も杯部のみの残存であるが333と同形態と考えられる。その他，高杯形器台には，全体的に丸みをもった深い杯部を有するもの（328），口縁部付近を屈曲させるもの（329），紋様に櫛描の波状紋だけでなく鋸歯紋などのヘラ描き紋を混在させるもの（325・329），凸帯によって紋様帯を細かく区切り，短冊形透かしを千鳥状に配した脚部のもの（325・326）などがある。

高杯形器台の他には，筒形器台（327）や特異な器形の器台（331）がある。327は小型品で，中層の227と類似する。331は皿状の杯部をもち，太く低い脚部は裾部が大きく開く。皿状の杯部の中央には直径約3.5㎝の円孔が穿たれ，その周辺には粗いハケ調整が施されている。外面に巡る2条の凸帯は幅広で稜の鈍いものであり，完全に引き出されていない部分もあり，この器台では杯部の凸帯は形骸化している。脚部は凸帯により3段に区画され，各段には三角形透かしが5方に配される。また，脚裾には，焼成前に行われた布と粘土による補修痕跡が認められる（図版60参照）。

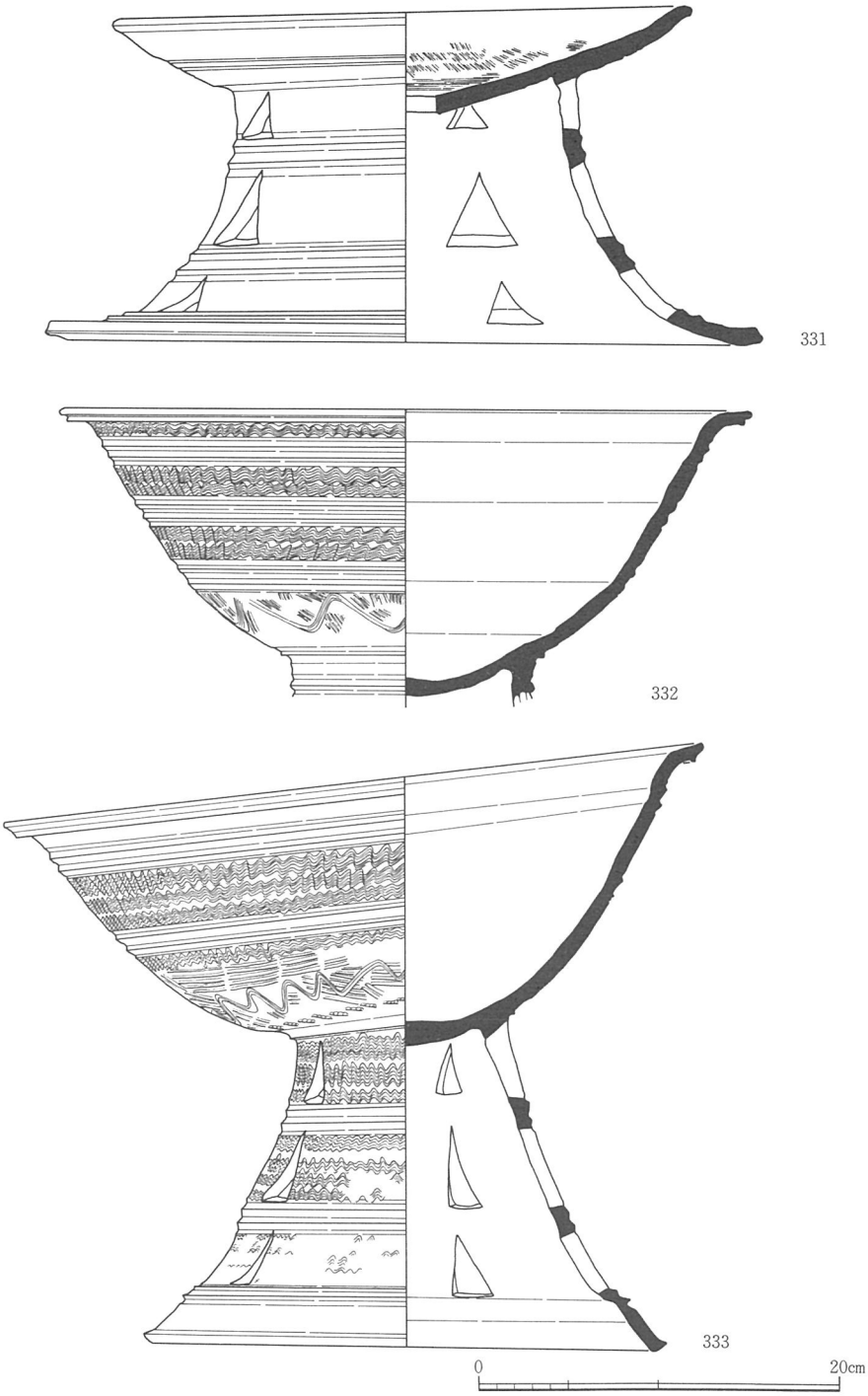
壺（335～340）

335は直線的にのびる口頸部に数条の凸帯を巡らすもので，紋様の有無はあるが，中層の234と類似する形態と考えられる。337は口径は20㎝前後と小さいが口頸部の特徴は大型甕と類似する。338～340は中型甕と呼称されているものである。336は口縁部を短く外反させるもので，出土数は少ない。

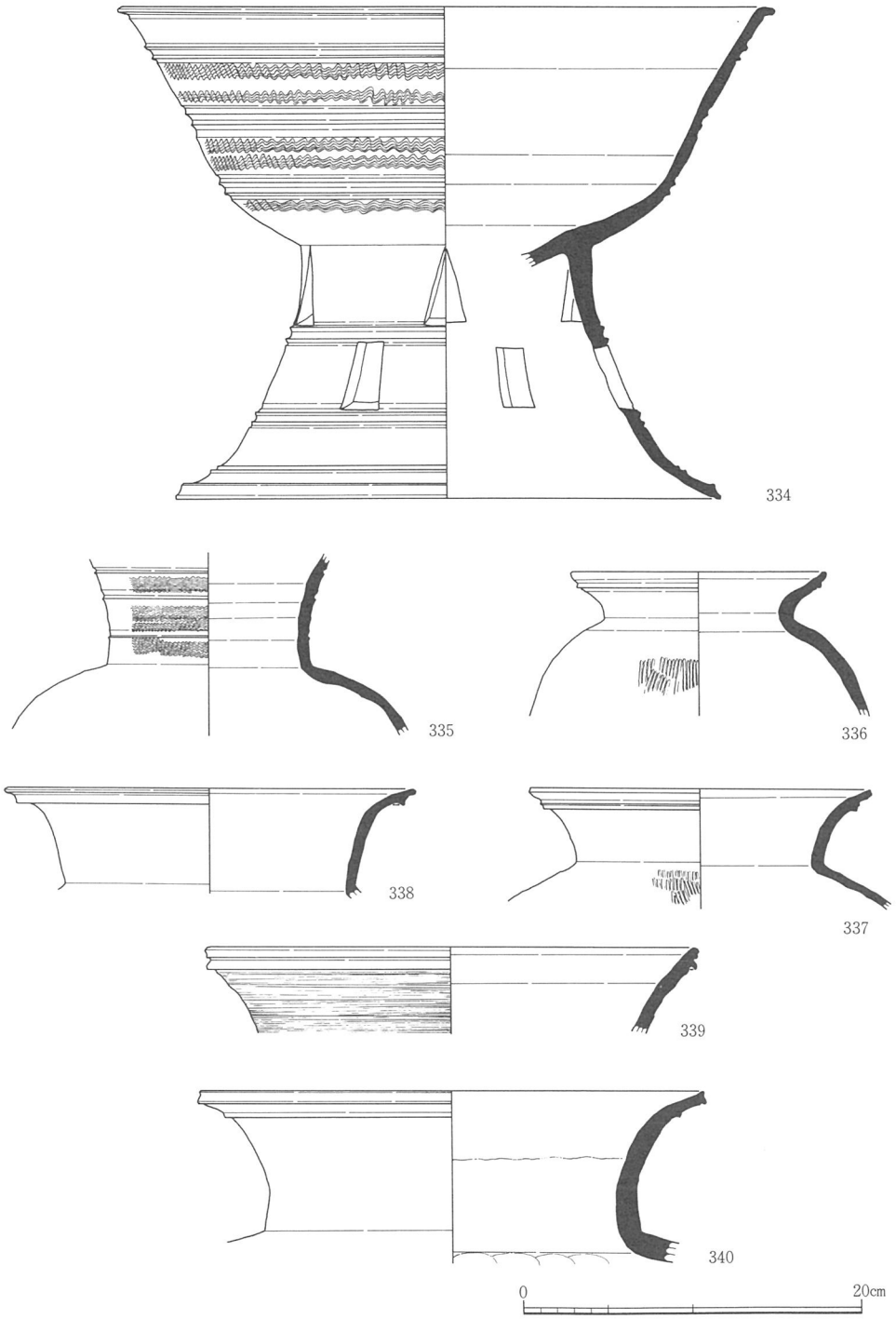
軟質系土器（第49～52図，図版64・65）

平底鉢（341～349）

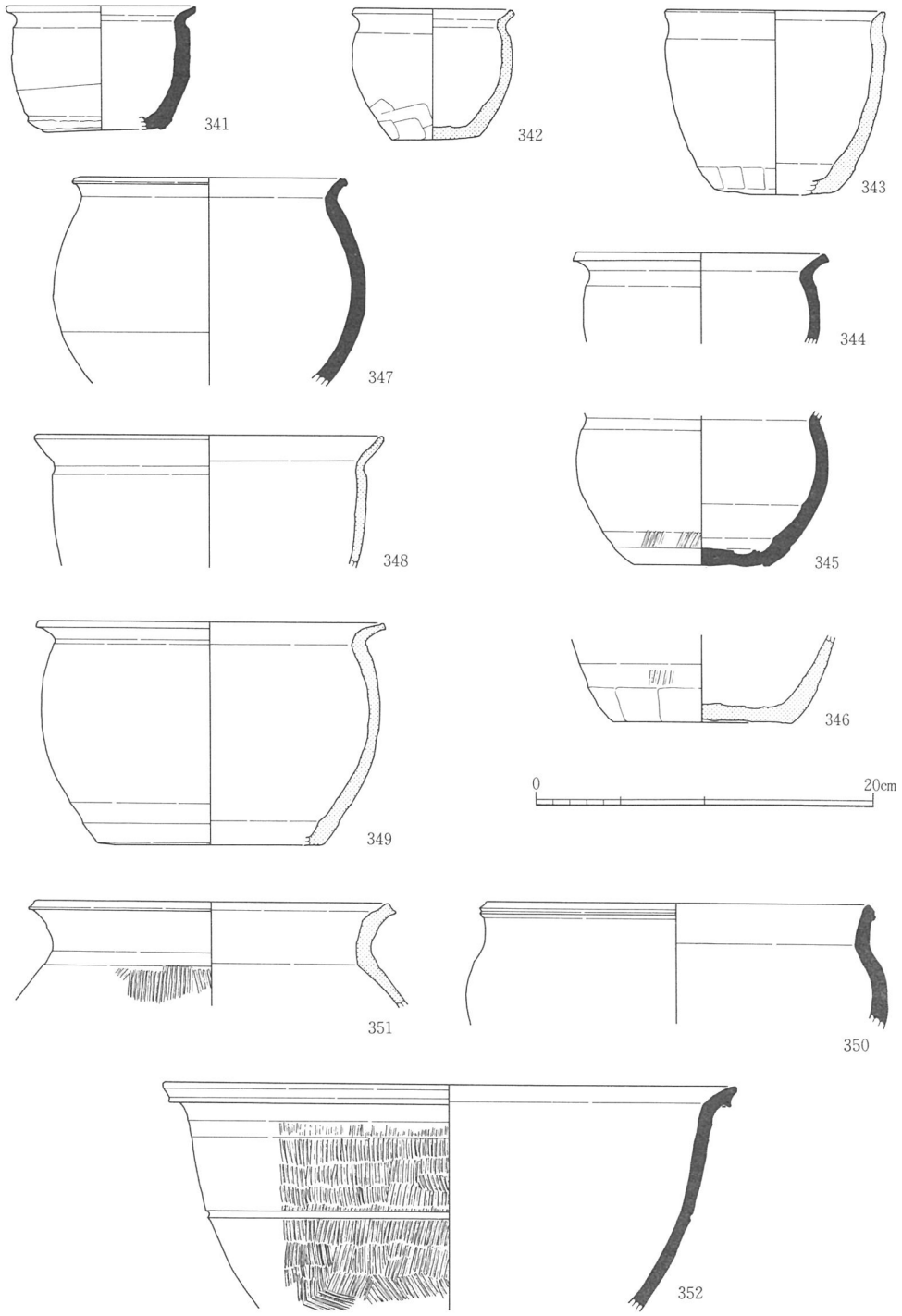
基本的な様相は上・中層と同様であるが，一部下層では体部の張りが大きく最大径が体部中央から下半にあるもの（347）や口縁部が極端に短いもの（343）などがみられる。焼成は，還元焔焼成のもの（341・344・345・347）や酸化焔焼成による赤焼けのもの（342・343・346・348・349）が混在している。342・349の外面には煤の付着が認められ，使用後に投棄されたことがうかがえる。なお，348については平底鉢としたが，口縁部の小破片で他の器種の可能性もある。



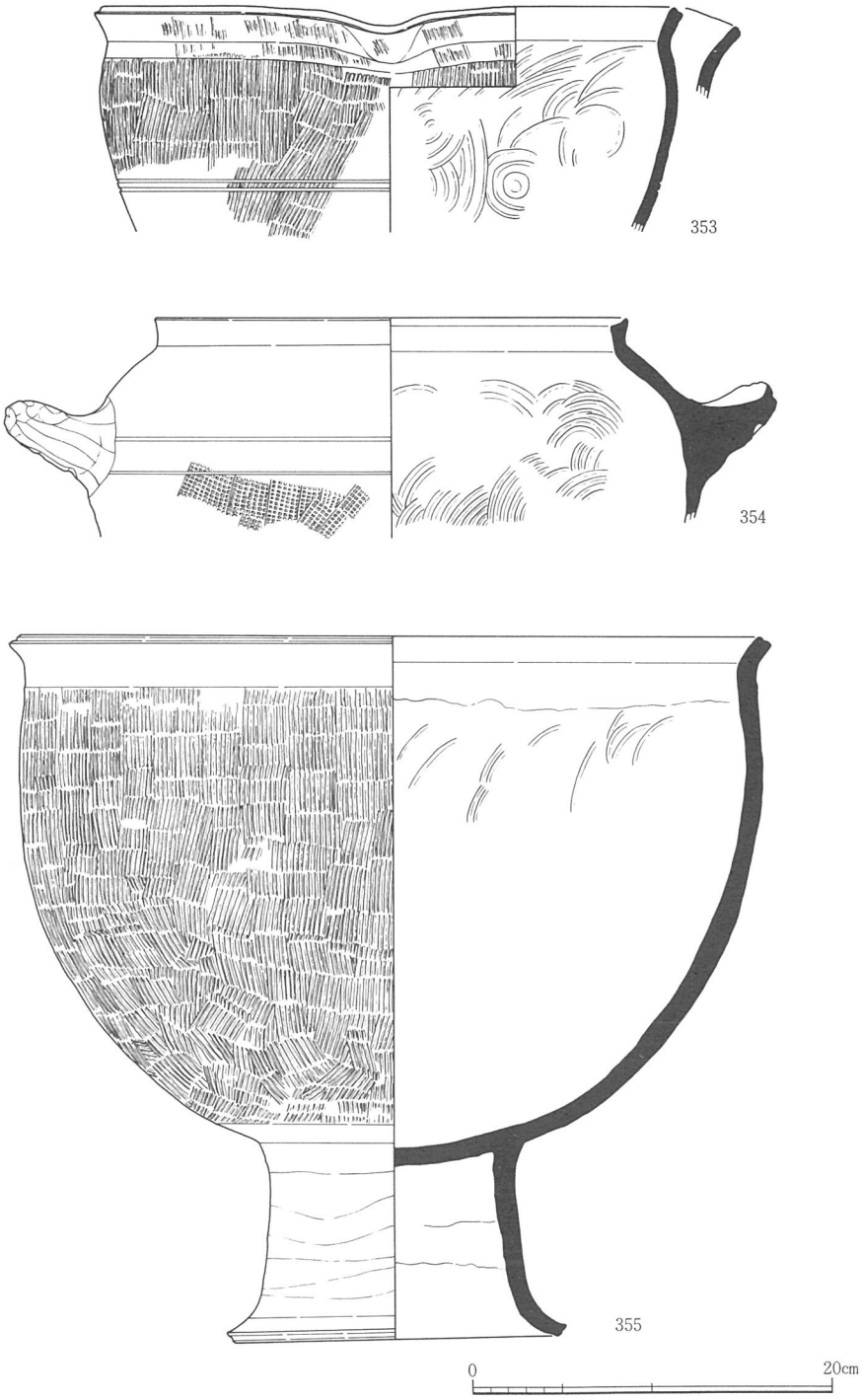
第47図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（５）Ｓ＝1/4



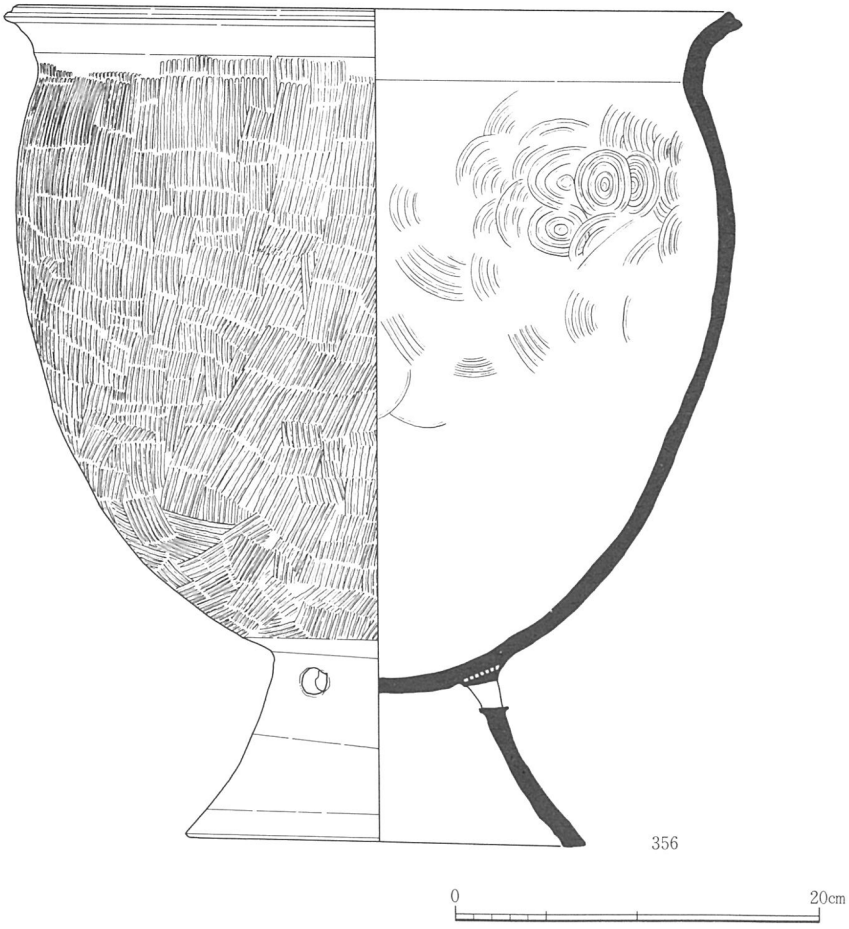
第48図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（６）Ｓ＝1/4



第49図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（７）Ｓ＝1/4



第50図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（８）Ｓ＝1/4



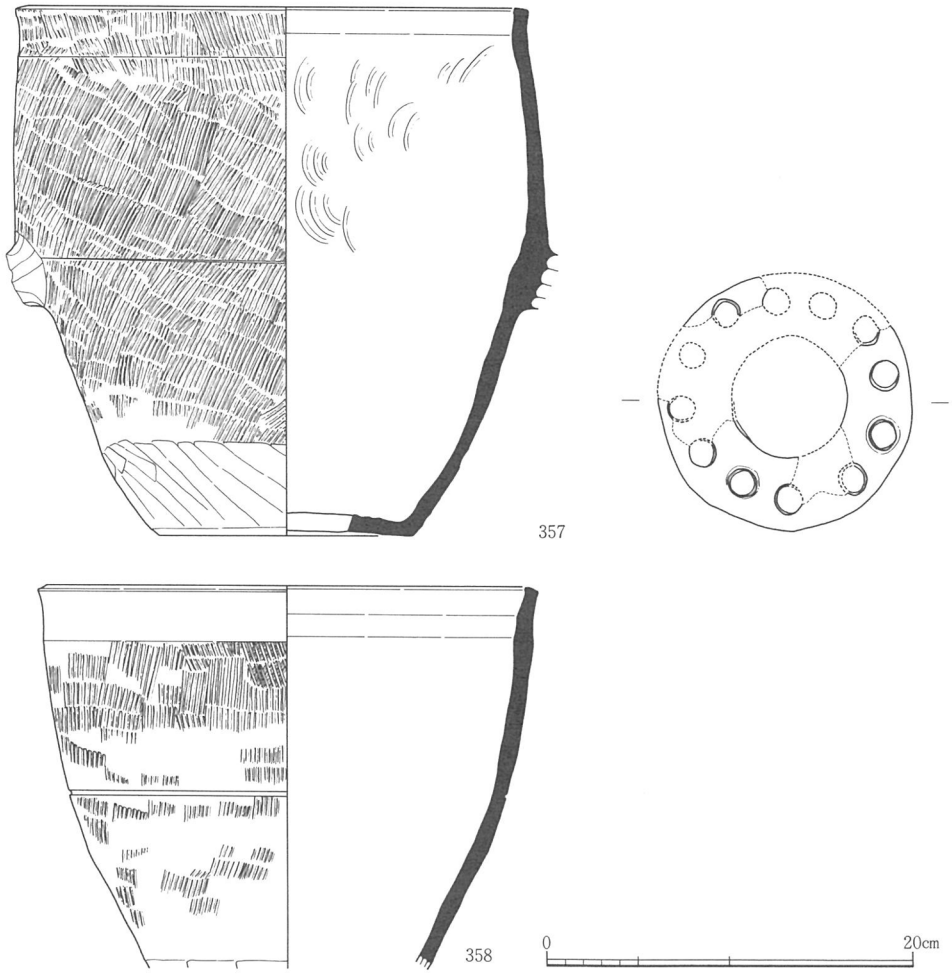
第51図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（９）Ｓ＝1/4

長胴甕（351）

下層では良好な資料が少なく１点を図示した。胴部は大きく張ると考えられ，タタキ目を残存させる。胎土には砂礫粒が多量に含まれ，焼成は酸化焔焼成により仕上がる。

堝（350～354）

堝は鉢状の体部（352・353）と体部上半が大きく内傾し球形を呈するもの（350・354）がある。前者については，口縁部を短く外反させ体部は比較的浅い352と口縁部が緩やかに外反し体部は全体的に丸みをもつ353があるが，352が先行する形態と考えられる。また破片のため明確ではないが，352・353は把手が付き，352・353は片口と推定される。焼成は，還元焔焼成は行われているが焼きの甘いもの（350・352），窖窯の酸化焔焼成によるもの（353）があり，この特徴は他の軟質系土器と同一である。ただ，354は完全な還元焔

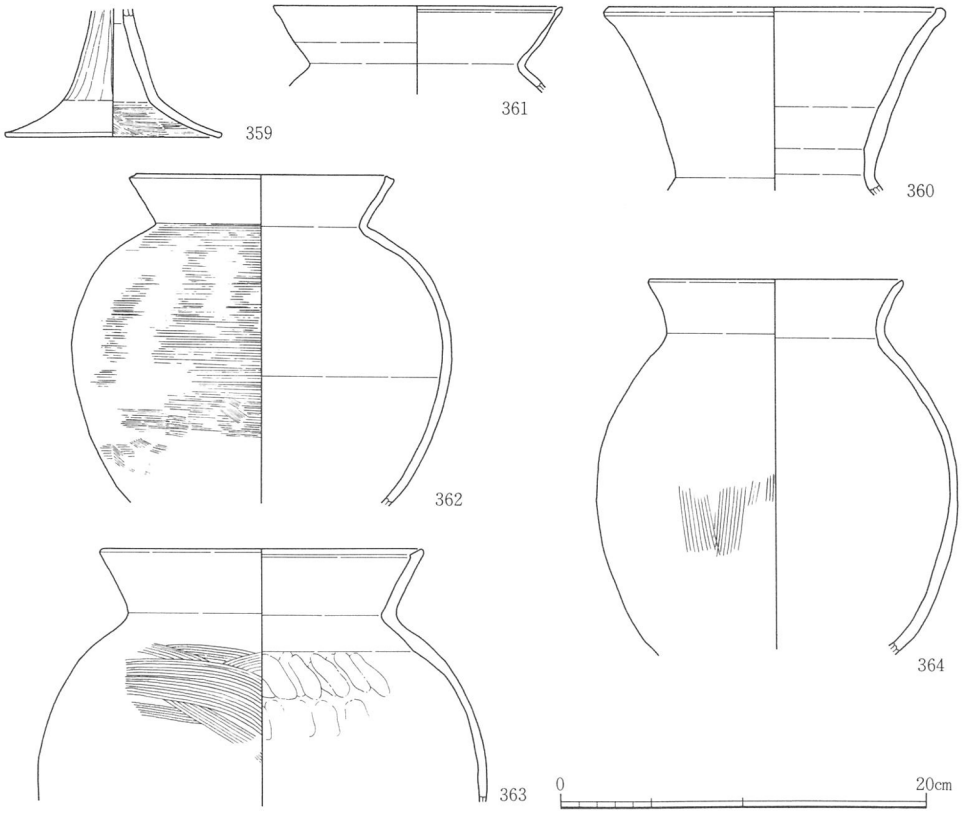


第52図　1－OL　土器溜り　下層出土遺物（10）S＝1/4

焼成によるもので，通有の須恵器と変わらない。胎土は353に砂粒が多く含まれていたが，他の製品は，353ほど顕著ではない。

脚台付鉢（355～356）

他にも破片があるがここでは完形に復元された2点を図示した。いずれも大型の深鉢に，低い重厚な脚台が付く。鉢部の形状は，ほぼ同一であるが356の方が若干長胴である。脚部は355が直立し，356は「ハ」の字状に開き円形透かしが3方に穿たれる。胎土はいずれも砂礫粒を多く含み，焼成は酸化焔焼成により堅固に焼き上がっている。窖窯焼成と推定される。また，土器の色調は外面は全体に暗褐色を呈するが，脚部の内側は明黄褐色を呈していた。さらに356は鉢部の下部に三日月状に黄褐色を呈する部分が認められた。これ



第53図　１－ＯＬ　土器溜り　下層出土遺物（11）Ｓ＝1/4

ら色調の観察からは，この土器が日常煮炊きに使用されたことがうかがえ，外面の三日月状の異色部は竈の袖，あるいは補助的な支脚の痕跡と考えられる。

甑（357・358）

いずれも口縁部は直立させる形態で，外面にはタタキ目を残存させる。焼成はいずれも還元焔焼成であるが，357のほうが堅固に焼き上がっている。胎土には多量の砂礫粒が含まれている。

土師器（第53図－359～364，図版64）

高杯，壺，甕を図示した。高杯359の脚部は裾が屈曲して開き，脚柱部内面にはヘラケズリ，脚裾内面にはハケ調整が認められる。壺360は口縁端部をわずかに肥厚させたもので，布留式土器の系譜を引くものである。甕は口縁部が内湾気味のもの（361～363）と，外反するもの（364）がある。361は口縁端部を肥厚させ，器壁は薄く仕上げている。363も口縁端部をわずかに肥厚させるが，361に比べると器壁は厚く，体部内面は指ナデ調整

が顕著に観察される。364は摩耗が著しいが，外面にはわずかに粗いハケ調整，内面にはナデ調整が観察される。

第３項　土器溜りの性格

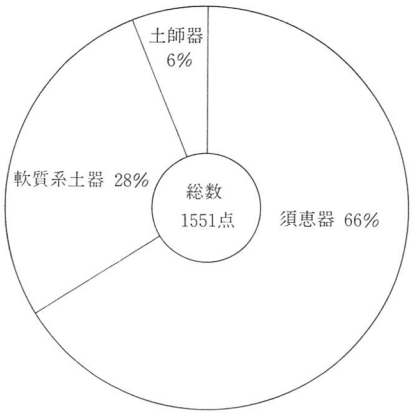
前項で土器溜りの検出状況や遺物について報告したが，ここで特に古墳時代中期における土器溜りの性格について触れておく。

まず，土器溜りの時期であるが，遺物については第Ⅶ章遺構と遺物の検討で詳説するため，ここでは簡単に触れておく。出土遺物には初期須恵器，軟質系土器，土師器があるが時期を決定するのに基準となるのは，出土量の最も多い初期須恵器である。この須恵器の様相を概観すると，①陶質土器の特徴が顕著に認められるもの，②陶質土器の特徴が認められるが紋様などは簡略化され形態変化したもの，③陶邑の須恵器編年の中で後続形式へたどれる形態のものの混在がうかがえる。

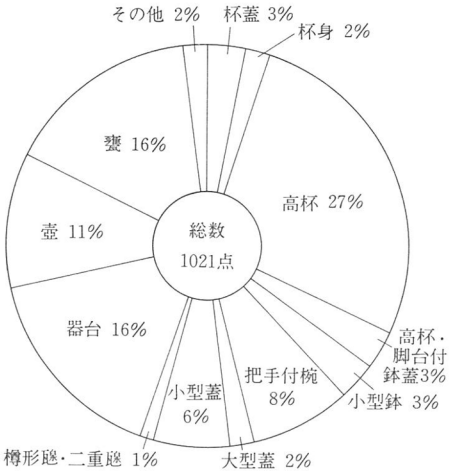
このうち時期が最も遡ると考えられる①については出土量が極端に少なく，混入の可能性もあり，この土器溜りの時期を直接的に反映したものとは考えられない。
ここでは出土量の最も多い③の形態のものが基準となる。この③を陶邑編年の中に当てはめるとＴＫ73型式からＴＫ216型式併行期の範疇で捉えられ，土器溜りの中心的な時期は若干の時期幅をもって考えられる。また，②については，各器種に認められるものでなく高杯の蓋・高杯・器台などの限られた器種にのみに認められるため，③の古相であるＴＫ73型式にほぼ併行するものと考えられよう。

次にこの土器溜りの遺物構成の特徴や遺物の残存状況について概観する。古墳時代中期に属すると考えられる遺物のうち，器種・器形の判明した土器は総数1500点余り（基本的に甕は口縁部の数）にのぼるが，須恵器・軟質系土器・土師器の出土数内訳は須恵器1021点（66％），軟質系土器432点（28％），土師器98点（６％）となり，須恵器の占める割合が最も多い。さらに，須恵器の器種構成比を見てみると高杯や器台の出土比率の高いことがうかがえる。当土器溜りより遡ると考えられる遺物を多数出土した393－ＯＬ（陶邑・大庭寺遺跡Ⅲで報告，393－ＯＬは総破片数で構成比率を表しているため基準は若干異なる）と比較してみても，１－ＯＬにおける高杯や器台の出土量やその比率の高さは際だっており，当土器溜りの特徴のひとつと言える。

器種構成の上では前記の特徴をもつが，須恵器の残存状況なども393－ＯＬと比較してみる。393－ＯＬでは，大甕の出土量も多く，完形品やそれに近いものも多く含まれてい



遺物構成



須恵器の器種構成

表１　１－ＯＬ土器溜り遺物器種構成比率表

た。ただこれらの中には，完形品ではあるが焼成時に底部や胴体部の一部が焼き歪み，ひび割れや小さな欠損箇所があり，甕本来の機能である貯蔵の役割が果たせない失敗製品が多く含まれていることがうかがえた。さらに，他の器種の高杯や器台などでも，窯の灰原ほどではないが，一部分が焼け歪んだり欠損した欠陥品が多くみられ，大甕と同様の傾向が認められた。

一方，１－ＯＬ土器溜りでは様相が大きく異なっている。大甕は大きな破片でも口頸部から胴部上半にかけてのもので，そのほとんどは小破片であり，高杯・器台などの小型・中型製品には歪みが少なく完形に復元されるものが多く認められた。特に高杯は歪みの無いものが多く，製品として完全品の出土が顕著であった。393－ＯＬの高杯の中にも時期が下り，１－ＯＬと同時期と考えられる形態のもの（蓋を逆転させたような杯部をもつもの）が出土しているが，これらはやはり１－ＯＬ同様完全な製品のものが多いようである。

他にもこの土器溜りでは，須恵器だけでなく軟質系土器や土師器の出土量の多さも注目される。軟質系土器や土師器の中でも特に甕は煮炊きに使用された土器で，これらには煤が付着するなどの使用痕跡のあるものが多く見られた。日常生活に使用された土器が，土器溜りに多く含まれていることも大きな特徴である。ただ，この軟質系土器の出土は393－ＯＬでも同じように認められ，１－ＯＬの特有の特徴ではない。

調査当時，１－ＯＬ土器溜りは，須恵器生産の過程の中で二次的な選別が土器溜り検出

地点の周辺で行われ，失敗製品がこの谷の斜面に投棄された可能性を考えていた。しかし，遺物整理の結果，前述したように失敗製品の出土は少なく，反対に高杯などには完全な製品が多く認められたことが確認され，遺物の様相からはこの周辺で選別が行われたとは言えないようである。さらに，出土状況も，土器溜りの位置する斜面の近くで選別が行われ，失敗品を投棄するならもう少し散在した状況になると推定される。

窯資料に比べると時期幅のある遺物が存在すること，焼き歪みのない製品が存在すること，軟質系土器をはじめとした日常土器がかなり認められることなどを重視すれば，この土器溜りは集落の生活品が投棄された状況を示すものと考えられよう。ただ，高杯や完形品の出土量が多いことなどからは，祭祀的な行為も考えておく必要があろう。

また，量は少ないながらも明らかな失敗品もあり，窯場から離れた場所で二次的な選別が行われたことは確実である。調査区外にも谷地形はのび密な遺物の出土も予想される。今後の調査を待たねばならないが二次的選別場所が，この１－ＯＬの斜面地を利用している可能性も充分考慮しておかねばならない。

他に土器溜りの性格とは直接関係ないが，この時期の土器溜りが検出されたことにより，前段階に引き続き集落が営まれ，周辺に当期の窯の存在が確実となったことは，大庭寺遺跡の展開を考える上で大きな成果と言える。

第Ⅴ章　第Ⅵ－Ｂ調査区の調査成果

第１節　２－ＯＬの調査概要

第１項　谷の概要と出土遺物（第11・54・55図，図版８～11）

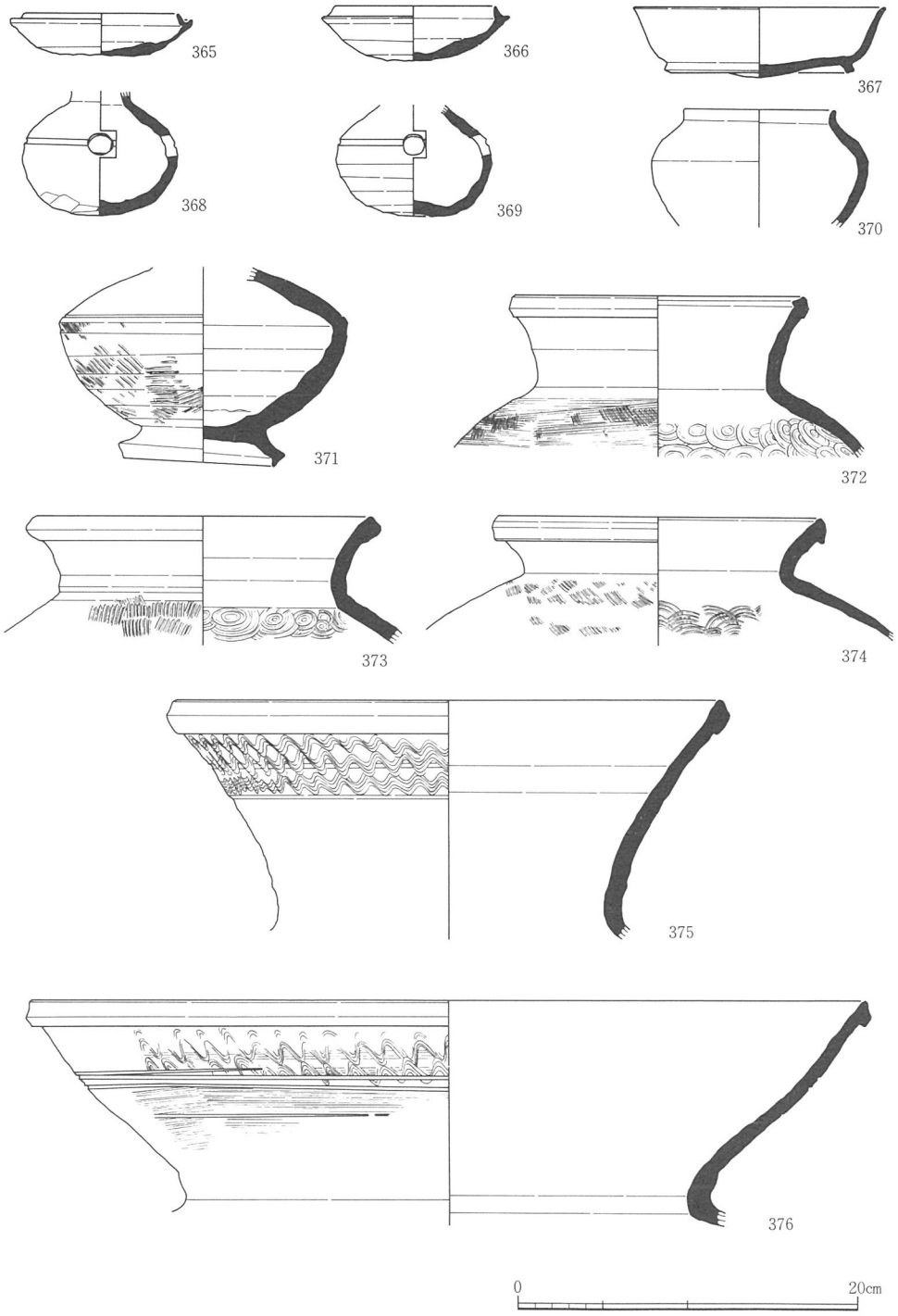
本報告分のⅥ－Ｂ調査区は，２－ＯＬの西側一部分に当たり，この調査区だけの成果では２－ＯＬの様相は把握できない。ここでは，他の調査区の成果も含め，当開析谷の概要について触れておく。なお，遺物や他の調査区で検出されている遺構などを含めた詳報告は，今後刊行される報告書で行う予定である。

現在濃登ノ池として残存する開析谷は，２本に枝別れするが，２－ＯＬと呼称したものは，このうち西側に位置するものである。２－ＯＬは，現在宅地造成や道路などにより地形は大きく改変されているが，これらの開発以前にもその一部はすでに耕作地として開発され，地形は部分的に改変されていたようである。

しかし，現在の大きな開発が行われる以前の地形図からは，旧地形を復元することは可能で，この谷は調査地からさらに丘陵奥部にのびることが看取される。さらに，調査地の南側には現在松池と呼称される溜池が存在し，旧地形を良好な状況で留めている場所も存在している。丘陵奥深くまでのびる開析谷（２－ＯＬ）であるが，調査地は開口部に近い場所に当たり，谷を東西に横断する形で調査を行うことができた。

調査地点での幅は，最も広い場所で約53mを測り，現在の残存した丘陵部との比高差は，古墳時代の底面で丘陵２側で約1.5～２ｍ，丘陵３側では2.5～３ｍを測る。古墳時代の底面の標高は平均で約29.5mで，古墳時代以降には最大で約２ｍの堆積が認められた。遺物の整理が終了していないので明確にはできないが，古墳時代・奈良時代・中世・近世の堆積層が存在するようである。谷の開発過程については，古墳時代以降については不明な部分が多いが，近世には谷に堤（図版11参照）を築き，溜池や耕作地として大きく開発されたことが明らかとなっている。一方，古墳時代には，堆積土の観察や遺構の状況から，古墳時代末までは自然の開析谷であったことが確認されている。また，古墳時代の下層には弥生時代の遺物が出土する堆積層も確認されている。

堆積土の出土遺物については前述のとおり整理途中のため，明確には把握できていない。ただ，第54図に示したとおり，古墳時代末のものが多い傾向はうかがえる。



第54図　２－ＯＬ出土遺物　Ｓ＝1/4

第55図　２－ＯＬ周辺遺構配置図

これは，後述する古墳時代末に属する須恵器窯の灰原（ＴＧ233号窯）の存在が大きく影響しているためと考えられる。また，奈良時代の須恵器（367）も出土しているが，近接した丘陵上に遺構が存在する谷地形（393－ＯＬ）と比べると，その出土量は少ない。

第２項　検出された遺構（第55・56図，図版12）

２－ＯＬでは，顕著な遺構が弥生時代と古墳時代の面で検出されている。

１．古墳時代の遺構

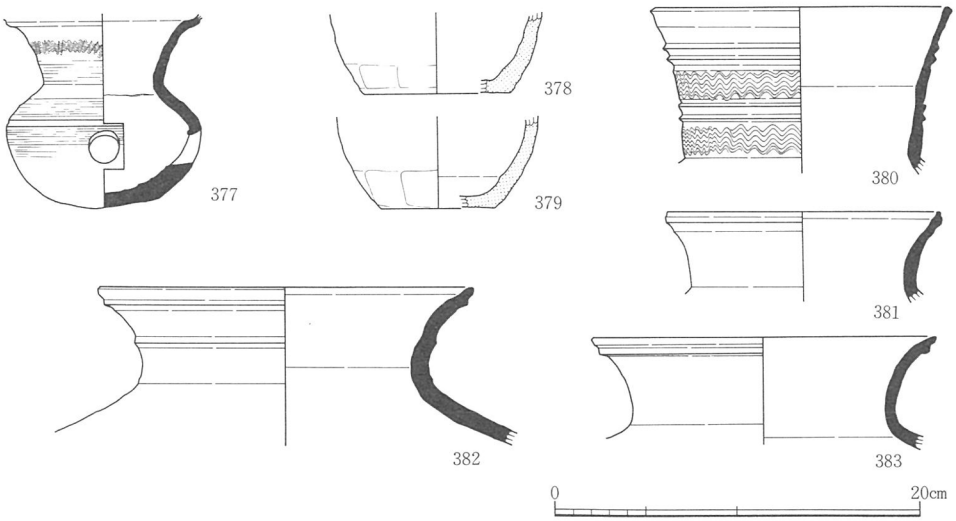
古墳時代の面で検出された遺構には，古墳時代中期の須恵器窯に伴う灰原２箇所（ＴＧ231・232号窯），古墳時代末の須恵器窯とその灰原（ＴＧ233号窯），後期の溝，自然流路・落込みなどがある。

古墳時代末の須恵器窯ＴＧ233号窯は丘陵２の斜面地に位置し，窯を中心として灰原は扇状に広がっていた。中期の窯は本体は残存していなかったが，灰原を確認したことにより２基の存在が明らかとなった。ＴＧ232号窯の灰原はＴＧ233号窯の灰原と重なるように，その下層に良好な状況で残存していた。ＴＧ231号窯の灰原はＴＧ232号窯から南東に約５ｍ離れた斜面部で検出され，ＴＧ232号窯に比べ小規模な灰原であった。

溝は人工のものと自然の流路がある。人工溝は丘陵２側で検出された38－ＯＳと丘陵３側で検出された1001－ＯＳがある。

38－ＯＳは，ＴＧ232号窯の灰原端から丘陵２の下端部に沿って走る。規模はＴＧ232号窯灰原端付近では幅2.3～４ｍ，深さ約0.６ｍを測るが，北側の丘陵下端付近では幅約1.3ｍ，深さ約0.3ｍと急に狭まり浅くなる。灰原との層位関係は，第68図に示したとおり，ＴＧ232号窯灰原を切ってこの溝が掘削され，溝のほぼ上端部まで埋まった後にＴＧ233号窯の灰原層が覆っており，先後関係はＴＧ232号窯→38－ＯＳ→ＴＧ233号窯となる。出土遺物は第56図に示した。灰原との位置や重複関係からＴＧ232号窯から流入した初期須恵器の出土が最も多いが，遺構の時期を表すものとしては377の甕がある。ほぼ，古墳時代後期ＴＫ47型式併行期と考えられる。

1001－ＯＳは，幅約１ｍの小規模なもので，丘陵３の斜面下端を沿うように走る。断面形は緩やかなＵ字形を呈し，深さは残存状況のよい場所で約0.3ｍを測る。溝の時期は出土遺物が少なく明確ではないが，38－ＯＳと同時期と考えられる。これらの溝の性格は，いずれも谷を水源とした水利目的が考えられ，今回の調査地では確認されていないが，谷の開口部付近には，谷水田のような耕作地の存在が推定されよう。



第56図　38－ＯＳ出土遺物　Ｓ＝1/4

自然流路は，谷底を蛇行しながら谷の開口部に向かって流れる。この流路では須恵器蓋杯の完形品が数点まとまって２箇所で出土しているが，出土状況から須恵器は人為的に置かれたことが看取できる。何らかの祭祀行為が，この溝，あるいはその周辺で行われたと考えられる。時期は38－ＯＳと同時期である。

他にも谷底には自然の落ち込みが数箇所あり，初期須恵器から古墳時代末までの遺物が混在して出土している。なお，38－ＯＳ以外の遺構は，12～14区で検出されており，詳細は『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』で報告予定である。

２．弥生時代の遺構

古墳時代面の下層で，自然流路が検出されている。調査区の関係上，部分的な検出に留まったが，蛇行しながら谷筋に沿って走ると考えられる。規模は古墳時代のものに比べ大きく，最深部では約１ｍを測る。堆積の状況は砂礫土やシルトの自然堆積が観察された。遺物は後期の弥生土器や木製品（農具）などの出土が顕著であった。

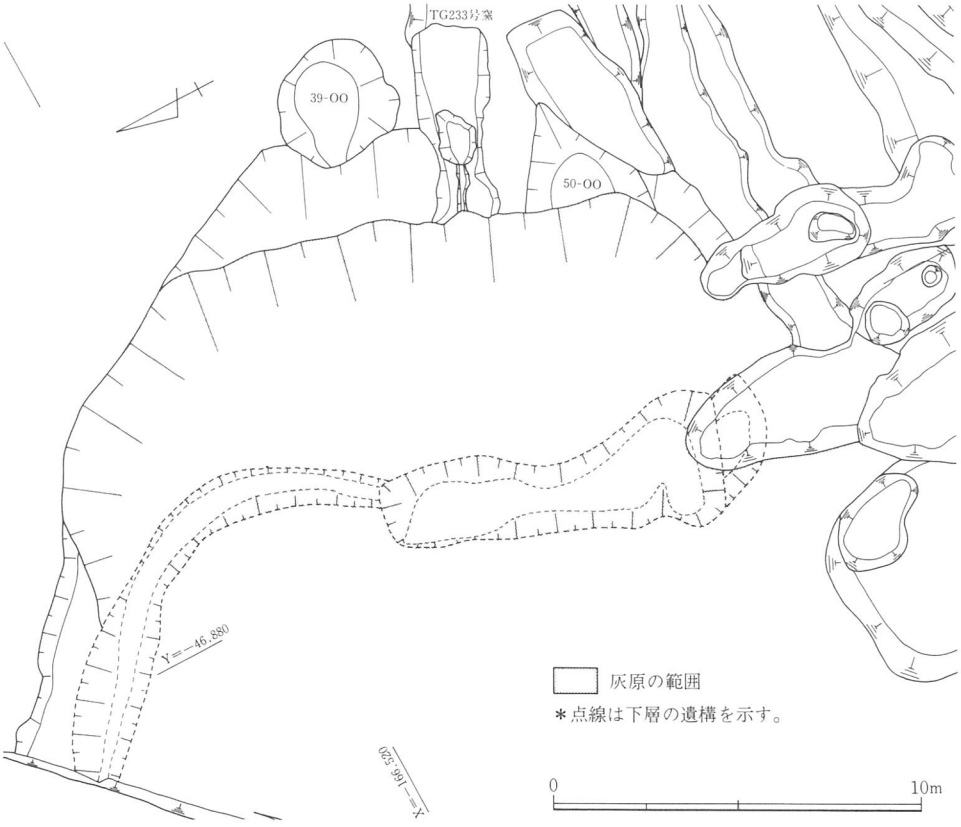
他にも，弥生時代では丘陵２側の斜面地で弥生時代中期の土器が多量に出土した包含層を確認している。土器の出土量は，丘陵２上に小規模ながら当期の集落が存在したことをうかがわせている。なお，弥生時代の遺構・遺物の詳細については，『陶邑・大庭寺遺跡Ⅴ』で報告する予定である。

第２節　ＴＧ233号窯の調査

第１項　ＴＧ233号窯の概要（第55・57図，図版12）

調査区の東側を南北にのびる舌状丘陵の西斜面上に窯体，その直下の斜面下部及び谷部にかけて灰原が存在する。灰原の下層にはＴＧ232号窯に伴う灰原，38－ＯＳが，同一地点において堆積している。

灰原は，南側を舌状丘陵から西にのびる濃登ノ池の山側の堤として利用された長さ約15ｍ，幅約10ｍ，高約１ｍの丘陵の張り出し部，北側を，舌状丘陵斜面下部付近を端部として広がる。上面に堆積している灰原のほとんどは，機械掘削の時点においてＴＧ233号窯に伴うものと推定された。しかし，機械掘削終了後に表面観察を行った結果，ＴＧ233号窯のものとは異なる時期と思われる遺物及び窯体が，灰原と斜面との境目付近にかけて多量に認められた。このことにより，下層に時期の異なる時期の灰原が残存している可能性



第57図　ＴＧ233号窯全体図

が推定された。また，窯体の下部ばかりでなく，周辺においても，灰原と同色，同系統の土が堆積していたため，窯体が，どの灰原に伴うものかこの時点では判断できなかった。

そのため，最初に灰原の調査を先行して行った。先ず，灰原上層の土を除去し，表面を精査し，出土状況の写真撮影及び，灰原の範囲を実測した後，ＴＧ233号窯の窯体に直行，平行するトレンチを２本設定し，灰原の堆積状況を確認した。その結果，ＴＧ233号窯とは異なる時期の灰原が単一層として下層に存在することを確認した。次に，出土した遺物が，どの窯に属するものかを層毎に確認しながら，上層に堆積するＴＧ233号窯の遺物を地点別に取り上げた。

窯体の調査は，両窯の灰原の調査がほぼ終了した時点から開始した。

第２項　窯体の状況（第58・59図，図版15・16・18）

窯体は，焼成部のほとんどが，後世の濃登ノ池築造時における丘陵の削平のため欠損し，焚口，燃焼部及び焼成部の一部が残存していたのみであった。窯の位置は，窯体下部と谷底部との高低差がほとんどなく，0.8m程度である。

窯体が残存していた焚口，燃焼部及び焼成部の一部は，丘陵斜面を掘り込み窯を築いているのではなく，斜面との接点から地表面に盛土を行い，そのほぼ中央部に窯を築く方法を用いている。その盛土は，丘陵斜面下部から谷底部に沿って楕円形に近い形を呈し，長辺約4.3m，短辺約４ｍで行っている。

このような窯を築いた理由としては次のことが考えられる。窯跡の存在していた丘陵は，後世に削平を受け現地形は残存していないが，東西両斜面の角度，現存の丘陵の幅などから非常に幅の狭い丘陵であったことがうかがえる。つまり窯を築くには少し短かったものと思われ，そのため予定していた窯の長さを得るため盛土を行い継ぎ足したものと考えている。

窯体内の埋土は，焚口付近を除き，黄白色粘砂土が堆積し，床面まで天井部が落ち込んだ状況であった。焚口は幅約1.4mでやや「ハ」の字形に開く。焚口からＴＧ233号窯（灰原）上面までは，高低差はほとんどない。前庭部の床面は，ほぼフラットである。前庭部付近の壁は，残存高0.3～0.5mを測り，焚口付近では少なくとも４回の補修の痕跡が認められる。焚口付近の最初に作られたと推定される壁面内の一部では，ＴＧ232号窯（灰原）の土器（甕体部片）及びＴＧ232号窯の窯体と推定される窯壁を利用して壁の補強を行っている。このことにより，ＴＧ233号窯は，ＴＧ232号窯を二次使用したのではなく，単独

の窯であることを最終的に確認した。

焼成部と燃焼部の境目付近の床面上には，ほぼ主軸線上に長径1.4m，短径0.95m，深さ0.4mを測る楕円形に近い形の舟形状ピットが作られている。そこからほぼ主軸線上に焚口方向に向かってのびる溝が存在する。溝は，検出長約1.6m，幅約0.25m，深さ約0.2mを測る。焼成部は，残存長は約2.5m，最大幅２m，床面の傾斜角17°を測る。床の重なりは全く認められず，壁の補修の痕跡は，最大３回を数える。

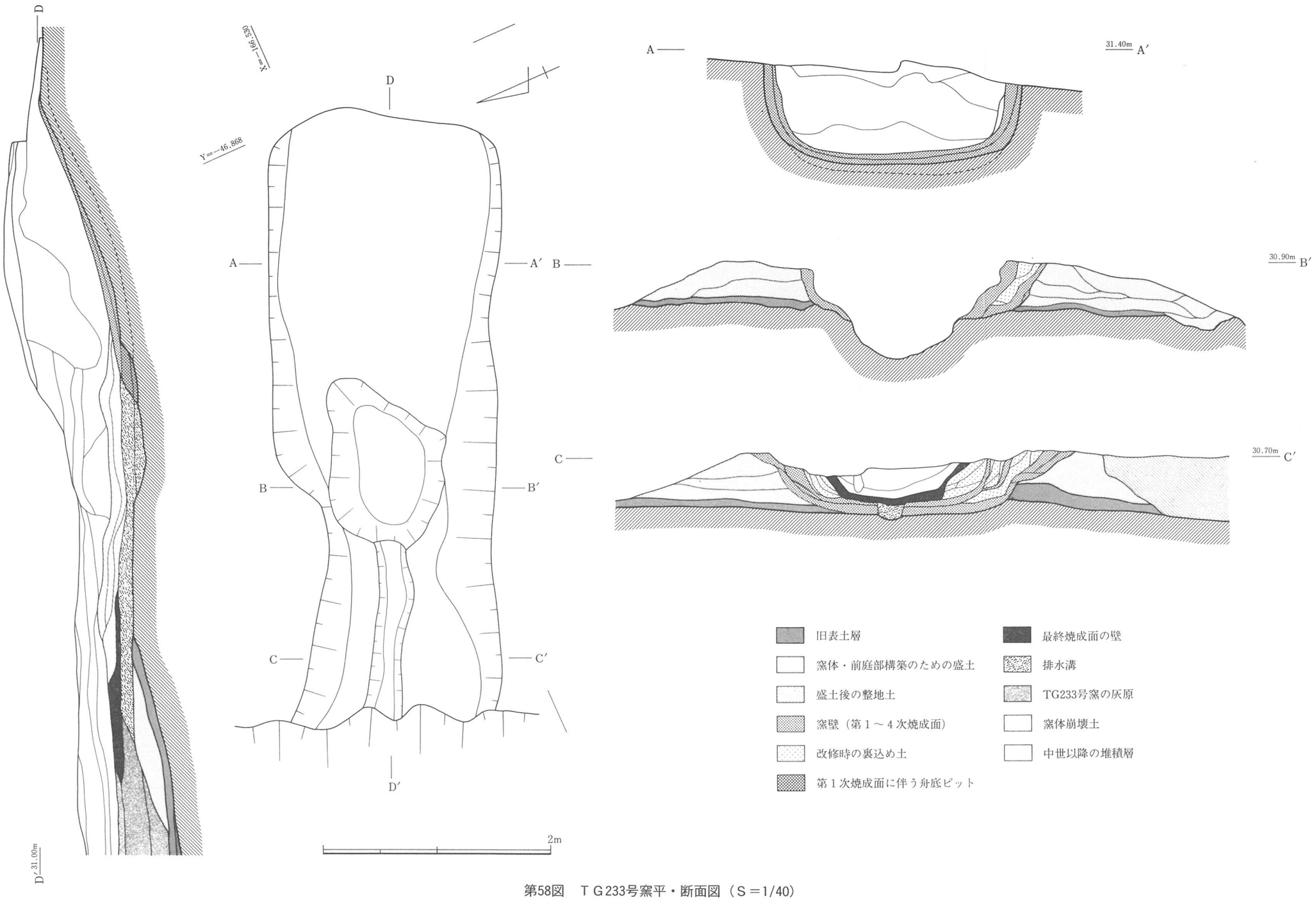
窯体内から出土した遺物は，ほとんどのものが舟形ピット周辺に集中しており，一部のものは，床面に付着した状態であった。そこから出土した遺物は，杯身，杯蓋，甕体部片のみであった。

盛土によって作られた窯の両側の部分には，灰原と同色，同系統の土が堆積した土坑状の落込みが存在する。東側は長軸約3.5m，短軸約３m，深さ約1.5m（39－ＯＯ），西側は現存長さ約３m，幅約3.5m，深さ約0.5m（50－ＯＯ）を測る。ここから出土した遺物は，ＴＧ232号窯と推定されるものが大半であったが，少量ながらＴＧ233号窯のものが存在していた。そのことからＴＧ233号窯の築造時，もしくは後世の整地土と判断している。

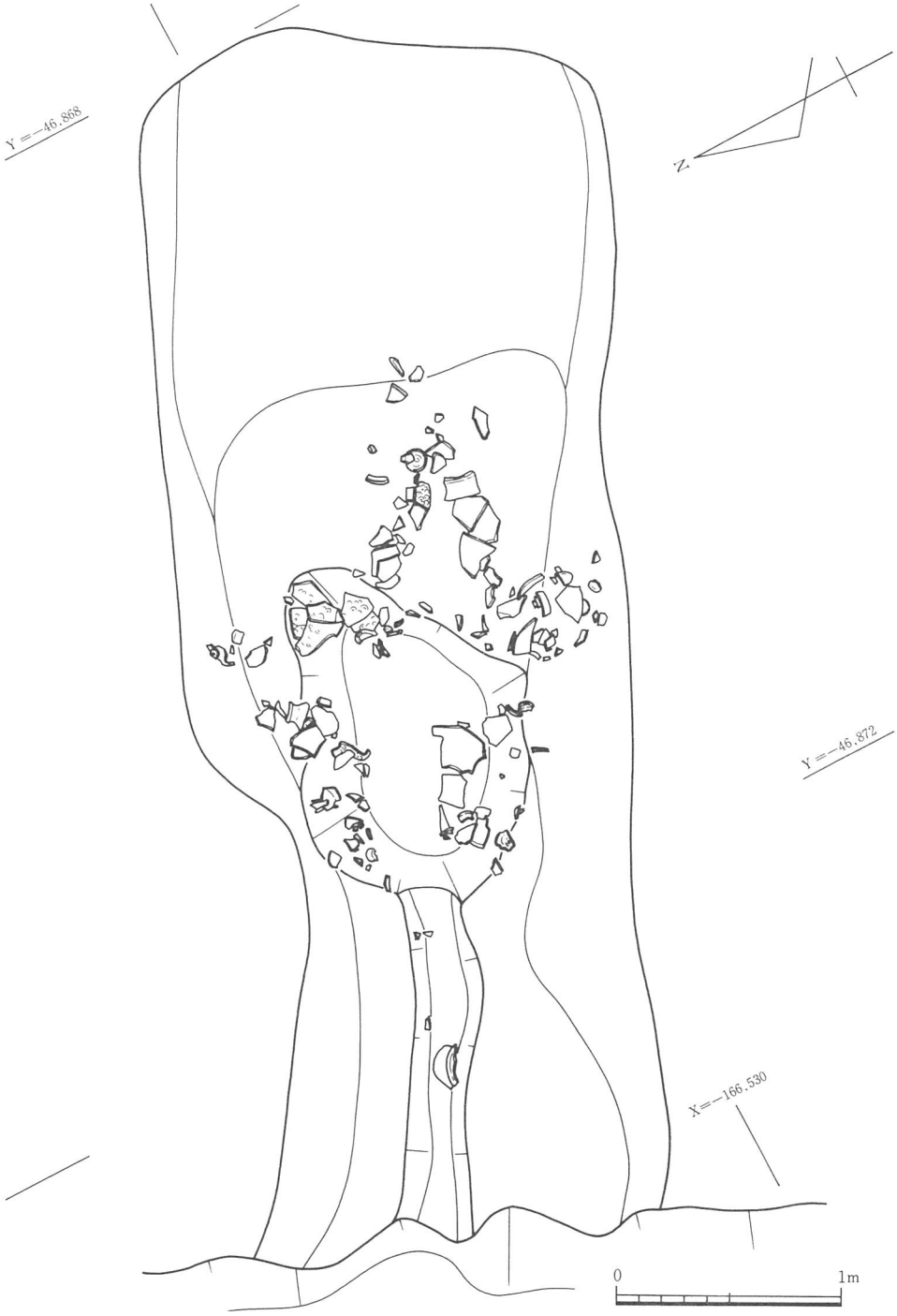
第３項　灰原の状況（第57・68図，図版13・14・17）

灰原は，焚口直下付近を中心として，ＴＧ232号窯（灰原）及び38－ＯＳを包み込むように丘陵斜面から谷底部に沿って楕円形に近い形で広がる。灰原上面はほぼフラットで，最大長10.5m，最大幅19m，最大厚60㎝を測る。灰原の上層は，ＴＧ233号窯からの遺物の単純層であるが，下層に行くに従いＴＧ232号窯のものが増加する。

灰原底面は，ほぼフラットである。灰原の南側は，下層に存在するＴＧ232号窯（灰原）の遺物が，幅約5.6m，高さ約0.7mにわたって灰原底部から盛り上がるように多量に堆積している。そしてその部分には，灰や炭類は，きわめて少なく，ＴＧ232号窯からと推定される遺物を多量に含む。そのことからＴＧ232号窯の灰原は，窯築造時には盛り上がっていたものと推定され，それを窯を築くために除去し，この周辺に集めたものと推定している。また，北側は，下層に存在するＴＧ232号窯（灰原）の北端に当たっており，斜面と灰原のあいだは，落込み状になり，それが，窯操業時に埋まって行った状況が土層断面によって観察された。また，濃登ノ池山側の堤内に，灰原と同色，同系統の土が部分的に存在していたこと，灰原上面がほぼフラットであったことなどから，灰原の一部は，堤の築造時に削平を受けたものと思われる。



第58図　ＴＧ233号窯平・断面図（Ｓ＝1/40）



第59図　ＴＧ233号窯最終焼成面遺物出土状況（Ｓ＝1/30）

第４項　出土遺物（第60～67図・図版66～71）

ＴＧ233号窯の出土須恵器は，窯の窯体内最終焼成面出土遺物，船底ピット，窯体内の埋土，灰原出土のものに分け，代表的なものについて図示している。以下，簡単に説明を行う。

１．窯体内最終焼成面出土遺物（第60図，図版66）

杯蓋（384～388）

口径は11㎝前後を測る。天井部は，扁平な丸みをもつもの（384～387）と，器高が高いもの（388）もあるが，出土量は圧倒的に前者の形状のものが多い。天井部の回転ヘラケズリは，いずれも上部付近の狭い範囲に行っているが，頂部まで完全に行われず，ヘラ切り未調整部分が残存したもの（384・388）や粗いヘラケズリのため天井部に段の残存したもの（387）もみられる。

杯身（390～393）

口径はいずれも10㎝前後である。底体部の形状は，極端に扁平なもの（390）もあるが，ほとんどは扁平な丸みをもつ。立ち上がりは短く内傾するが，受部の上端よりは上方にある。底体部の回転ヘラケズリは，杯蓋と同様で底部の狭い範囲に粗く施され，段の残存するものやヘラ切り未調整のものもみられる。また，杯身の中には自然釉の付着が蓋に比べ顕著なもの（389・391・392）もみられた。このうち392には底部から受部方向に釉の流れが観察され，杯身を上方にして焼成された可能性がある。

高杯（394）

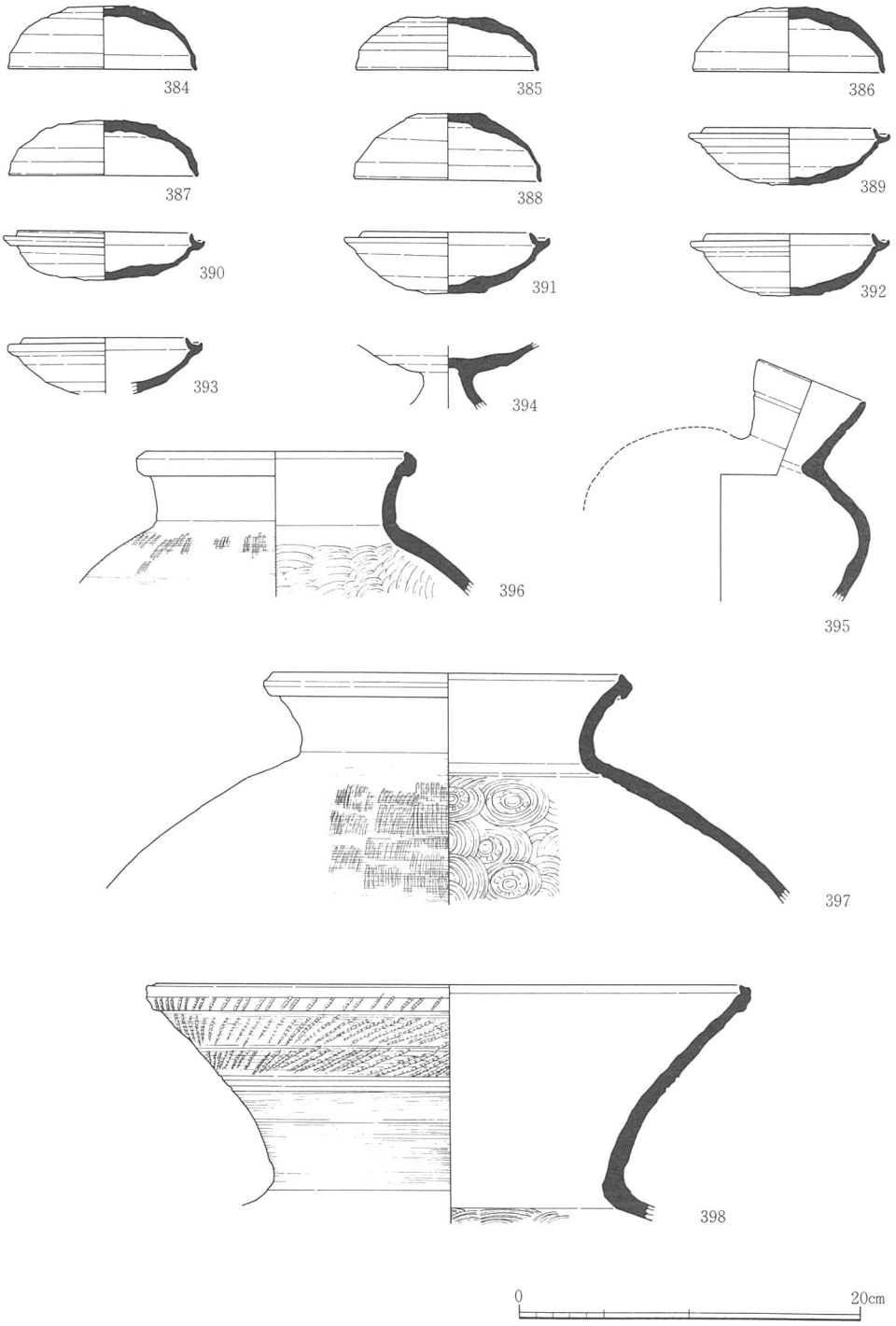
高杯は図示できるものが１点のみであった。図示できたものも破片資料のため全体器形を復元できないが，船底ピット出土の低脚無蓋高杯407と同形態と考えられる。

平瓶（395）

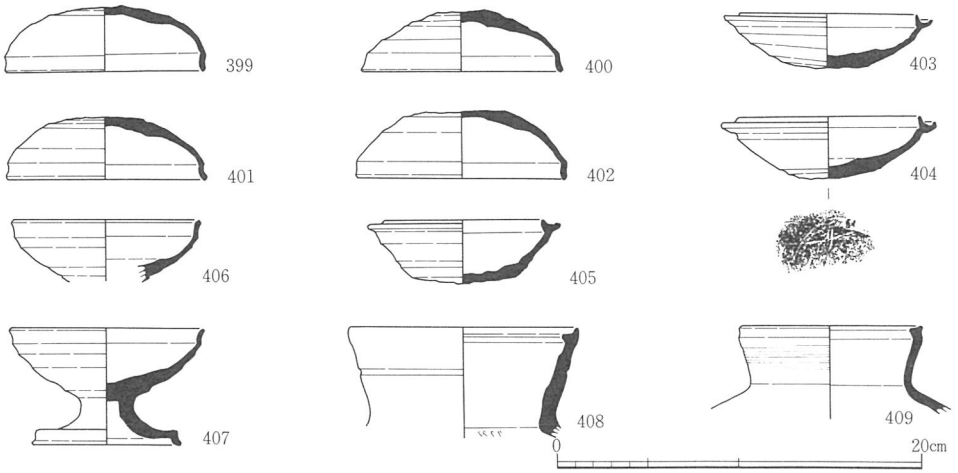
口縁から体部にかけての破片資料のため全体器形は把握できないが，体部は比較的丸みをもつ形状と推定される。

甕（396～398）

小型（396）・中型（397）・大型（398）のものがある。小型・中型品は，頸部は短く外反するものが多く，口縁端部は外側に折り曲げたもの（397）もみられる。大型品は，口頸部がラッパ状に大きく開き，口縁端部を断面台形に肥厚させる。また，小・中型品には紋様はみられなかったが，大型品にはカキ目や刺突紋が施されている。体部内面の当て具痕は，いずれの製品もそのまま残存している。



第60図　ＴＧ233号窯　窯体内最終焼成面出土遺物　Ｓ＝1/4



第61図　ＴＧ233号窯　船底ピット出土遺物　Ｓ＝1/4

２．船底ピット出土遺物（第61図，図版66）

杯蓋（399～402）

器形や調整の特徴は，前述の窯体出土のものと同一で，異なる特徴をもつものは無い。自然釉は，全体に付着したものはみられないが，402には口縁部から天井部方向の流れが観察され，ここでも杯身を上方にして焼成されたものの存在が確認された。

杯身（403～405）

船底ピットでは前述の窯体出土のものと同一形態の他に，口径が8.5㎝とやや小型で立ち上がりも極端に短いもの（405）がある。また，405は内面にも自然釉が付着するが，これは焼成途中で破損したためと考えられる。

高杯（406・407）

完形に図上復元できる低脚無蓋高杯の407がある。杯部は蓋を逆転させたような形態で，脚部は裾が大きく開き端部を下方に鋭く屈曲させる。406も杯部のみの残存であるが，407と同形態と推定される。

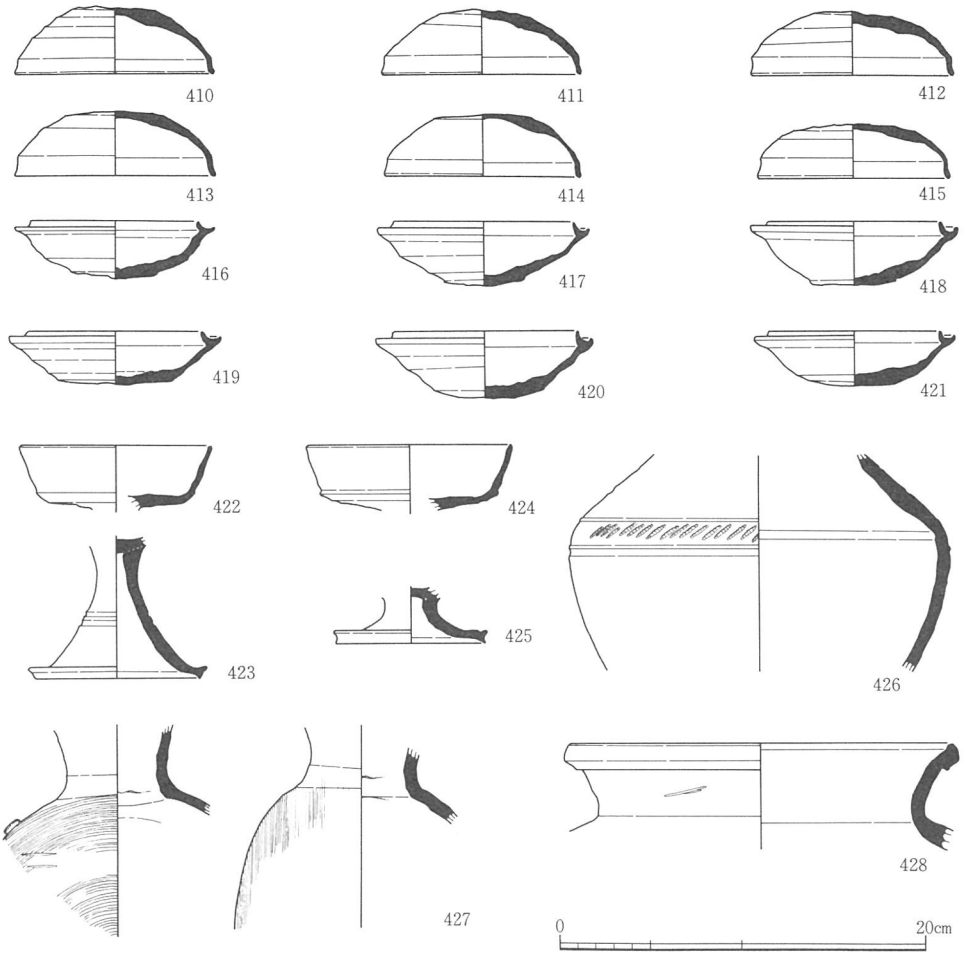
壺（408・409）

408・409とも直口壺である。408は口縁端部付近の内面に蓋受と考えられる断面三角形の凸帯が巡る。409は小型品で口縁端部には平らな面をもつ。

３．窯体内埋土出土遺物（第62・63図，図版67・70）

杯蓋（410～415）

ほとんどは，器形や調整の特徴は窯体出土品と同形態であるが，口径10.5㎝，器高2.9



第62図　ＴＧ233号窯　窯体内埋土出土遺物（１）Ｓ＝1/4

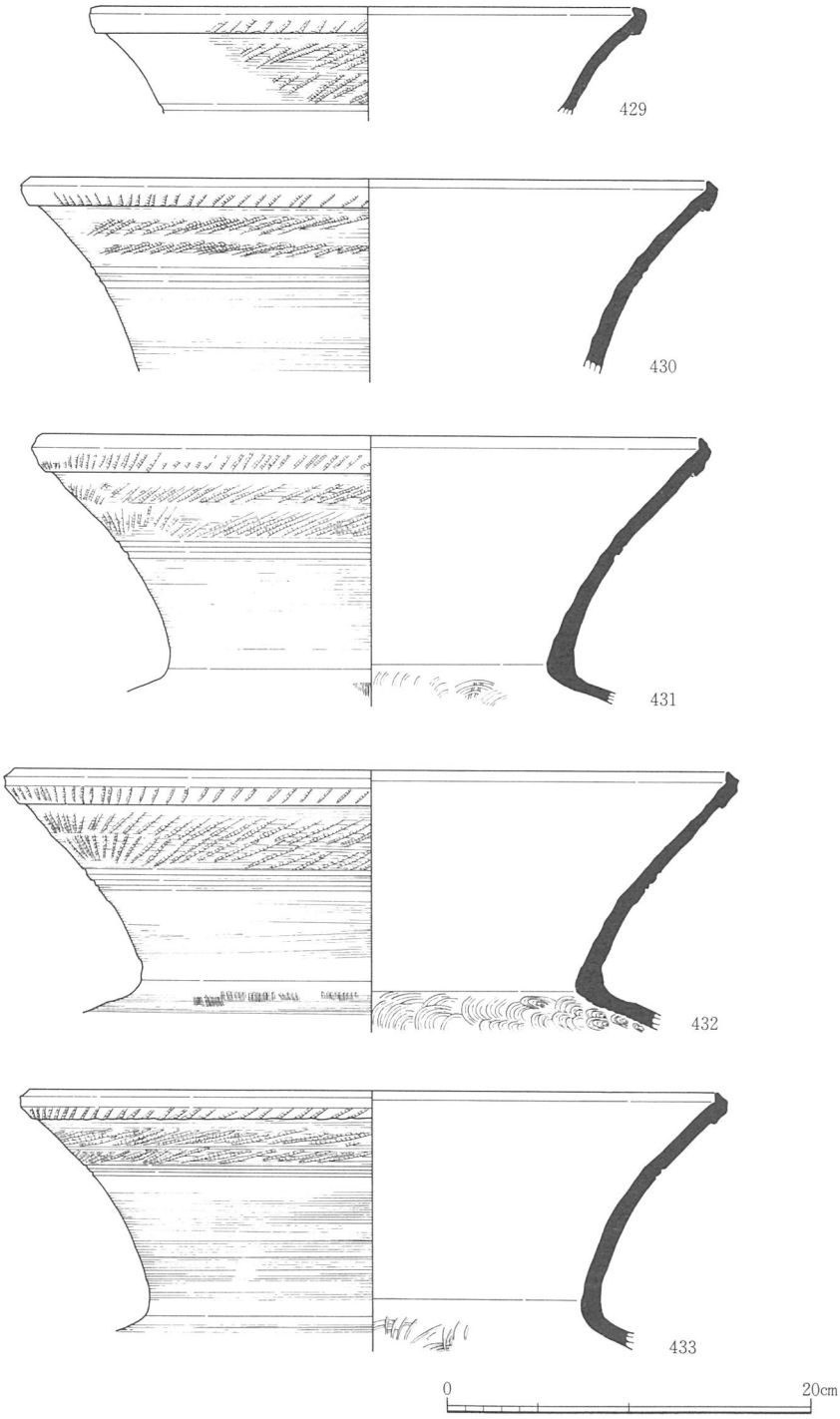
㎝と，他より小型のもの（415）もみられる。

杯身（416～421）

口径10㎝前後のものの他に，口径９～9.5㎝を測るやや小型品（416•418・419・421）が混在している。自然釉は底部全面に付着したもの（417・420）もみられた。

高杯（422～425）

長脚高杯（423）と低脚高杯（425）がある。長脚高杯の杯部は，口縁部を上方に大きく屈曲させる形態（422・424）が伴うと推定される。425は，脚部の端部の形態に若干の差異はあるが，前述407と同形態の無蓋高杯と考えられる。



第63図　ＴＧ233号窯　窯体内埋土出土遺物（２）Ｓ＝1/4

提瓶（427）

小破片であるため全体は復元できないが，体部の肩部には把手の形骸化した円形の粘土粒を貼り付けている。

壺（426）

体部片のため全体の器形は復元できないが，短い脚台の付く長頸壺と考えられる。体部の肩部には刺突文が巡り，低い凸帯によって区切られている。

甕（428～433）

口頸部が短く外反する小型品（428）と大きくラッパ状に開く大型品（429～433）がある。428の口縁部は台形状に肥厚させる。429～433は口径にばらつきはあるが，いずれも口縁端部は外側を台形状に，内面を断面三角形に肥厚させる形態である。文様構成も同様で，いずれも粗いカキ目の後に刺突文を巡らしている。

4．灰原出土遺物（第64～67図，図版68～71）

杯蓋（434・435）

435は口径が11㎝を越えるが，器形や調整の特徴は前出のものと同様である。

杯身（436～442）

口径10㎝前後のものが多いが，これらよりやや小型のもの（436・440）や11㎝を越える大型品（442）もみられる。自然釉は底体部全面に付着しているものもある。

高杯（443～447・449・450）

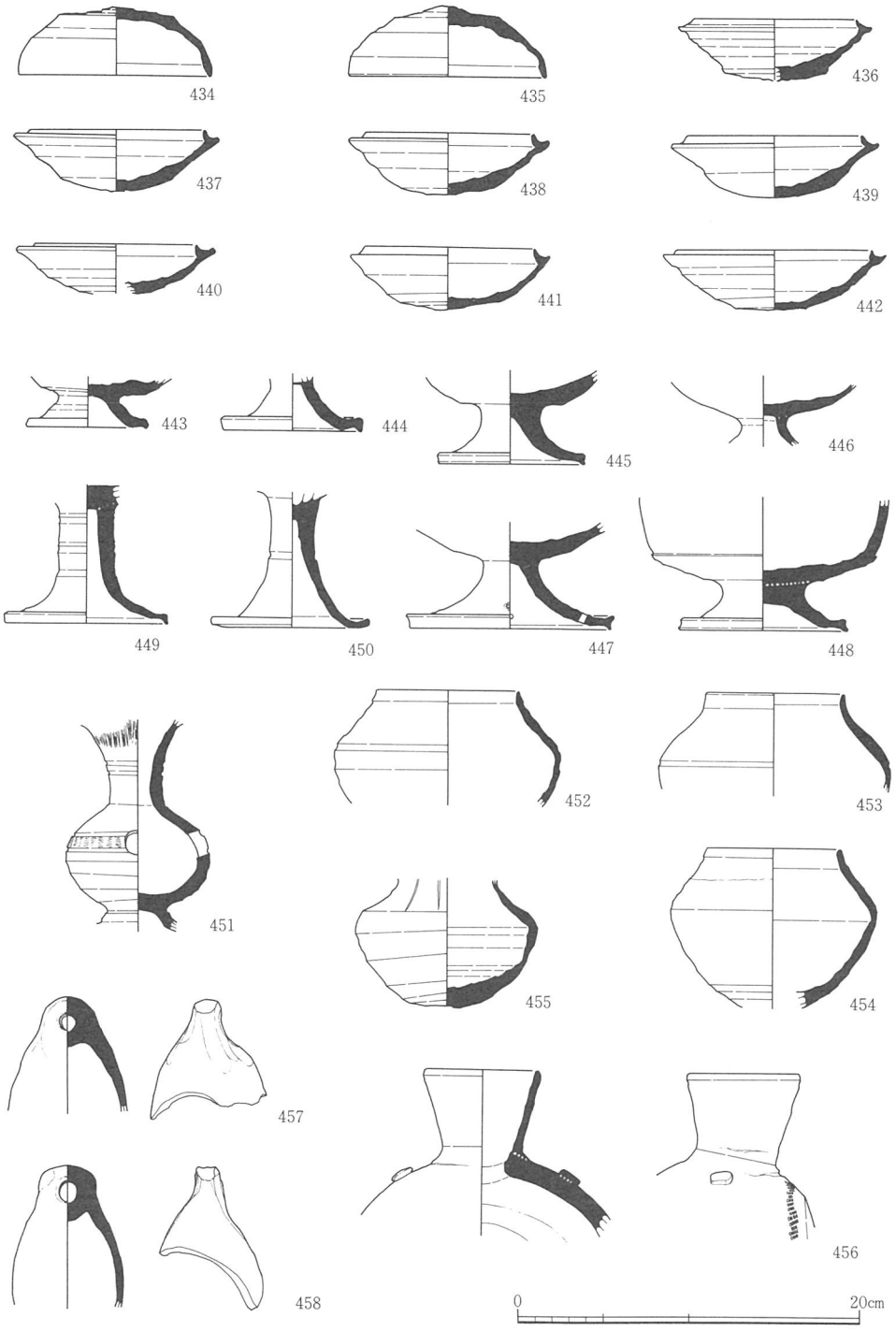
低脚（443～447）と長脚（449・450）のものがある。低脚高杯は，脚端径が7.2㎝，8.5㎝前後，11㎝を越える3種があるが，8.5㎝前後のものの出土量が多い。脚端部も多くは下方に折り曲げるように屈曲させるが，447は上下に肥厚させている。長脚高杯は，低脚に比べ出土量は少ないが，脚柱部や脚端部の特徴には差異がみられた。杯部は，いずれも無蓋タイプと考えられ，低脚高杯は船底ピット出土の第61図407と長脚高杯は窯体内埋土出土の第62図422・423と同形態と推定されよう。

脚台付鉢（448）

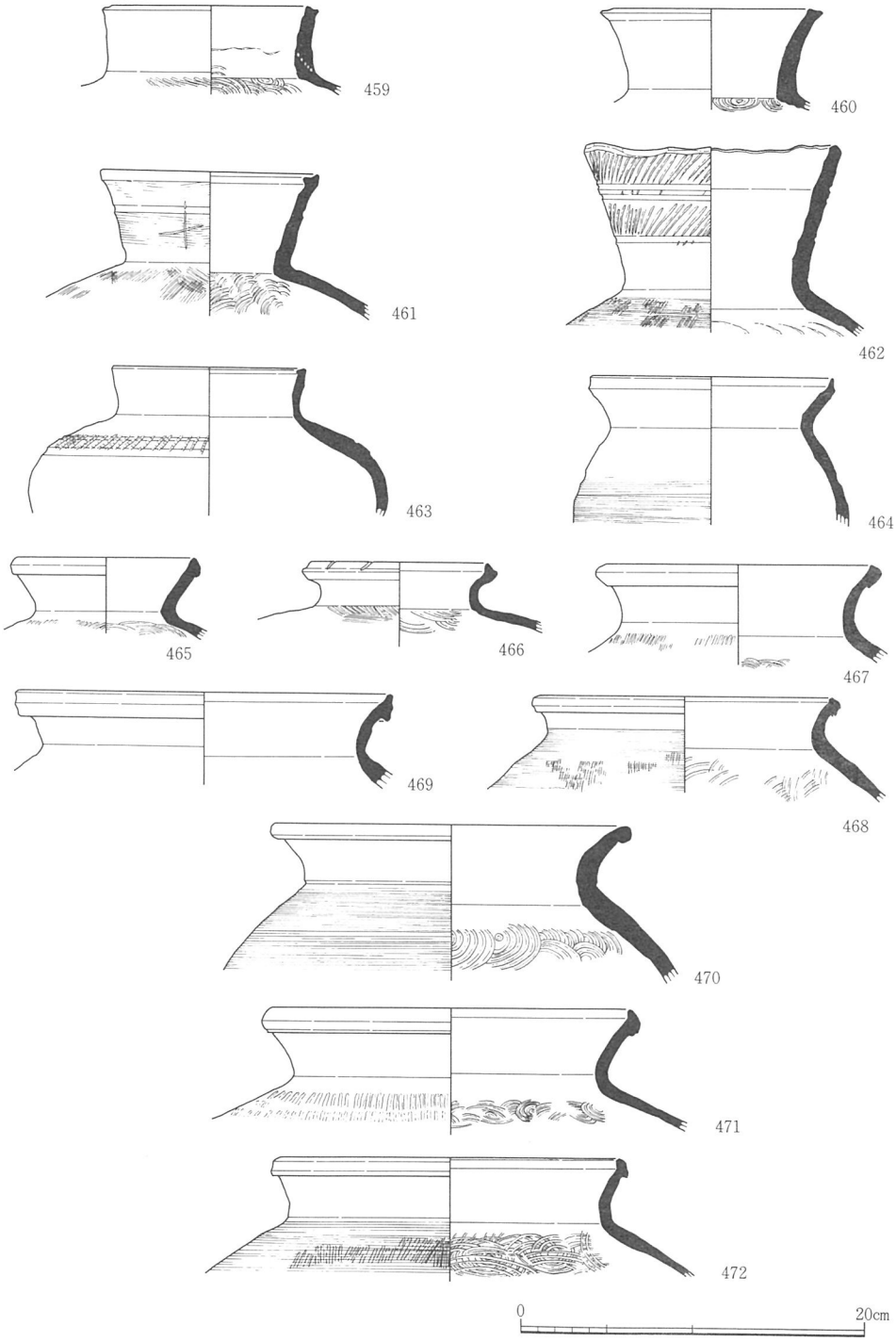
脚部の特徴は，低脚高杯の脚部と共通する。杯部は完存していないが，このまま屈曲して直立する口縁部と推定される。

瑕（451）

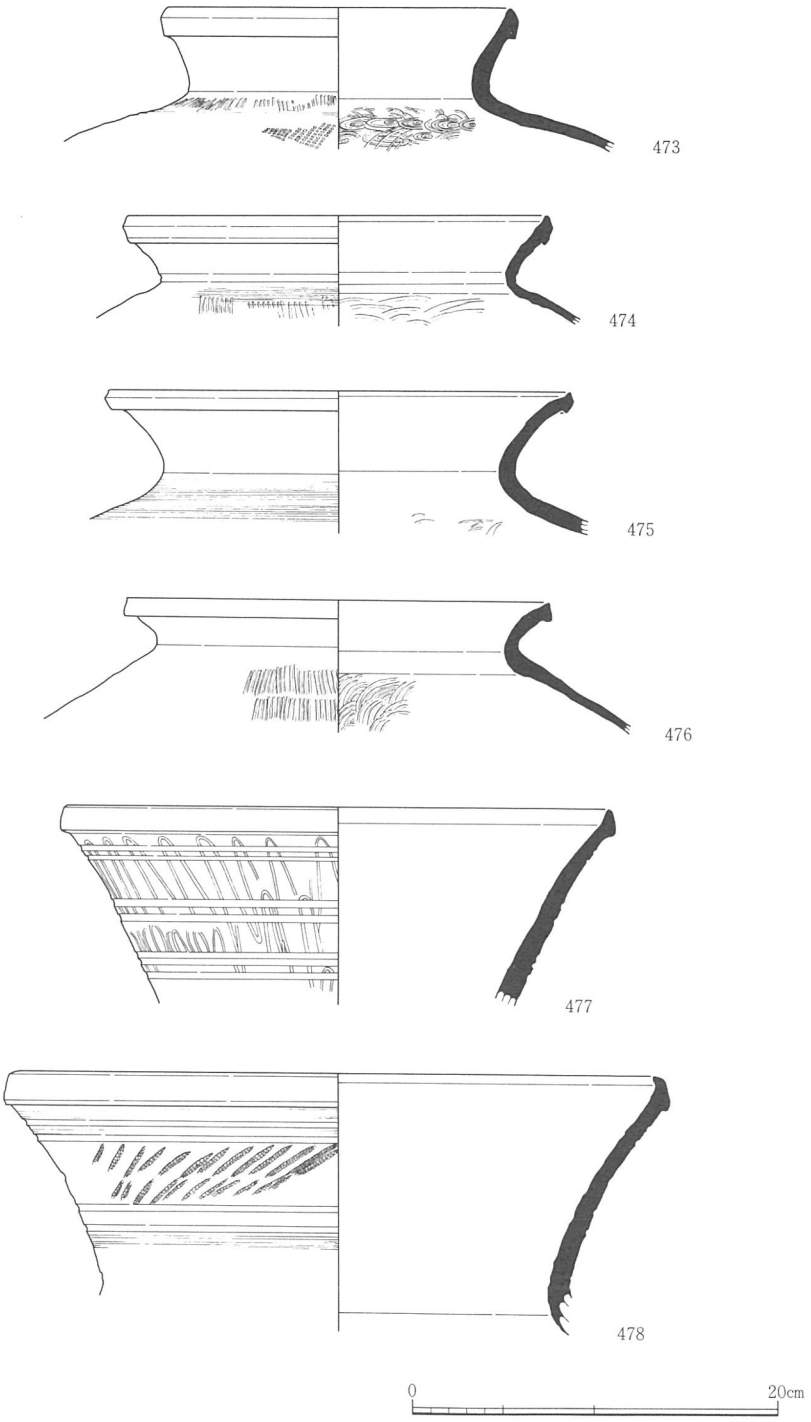
ここでは脚台付瑕を図示したが，全体の中でも瑕の出土量は少ない。



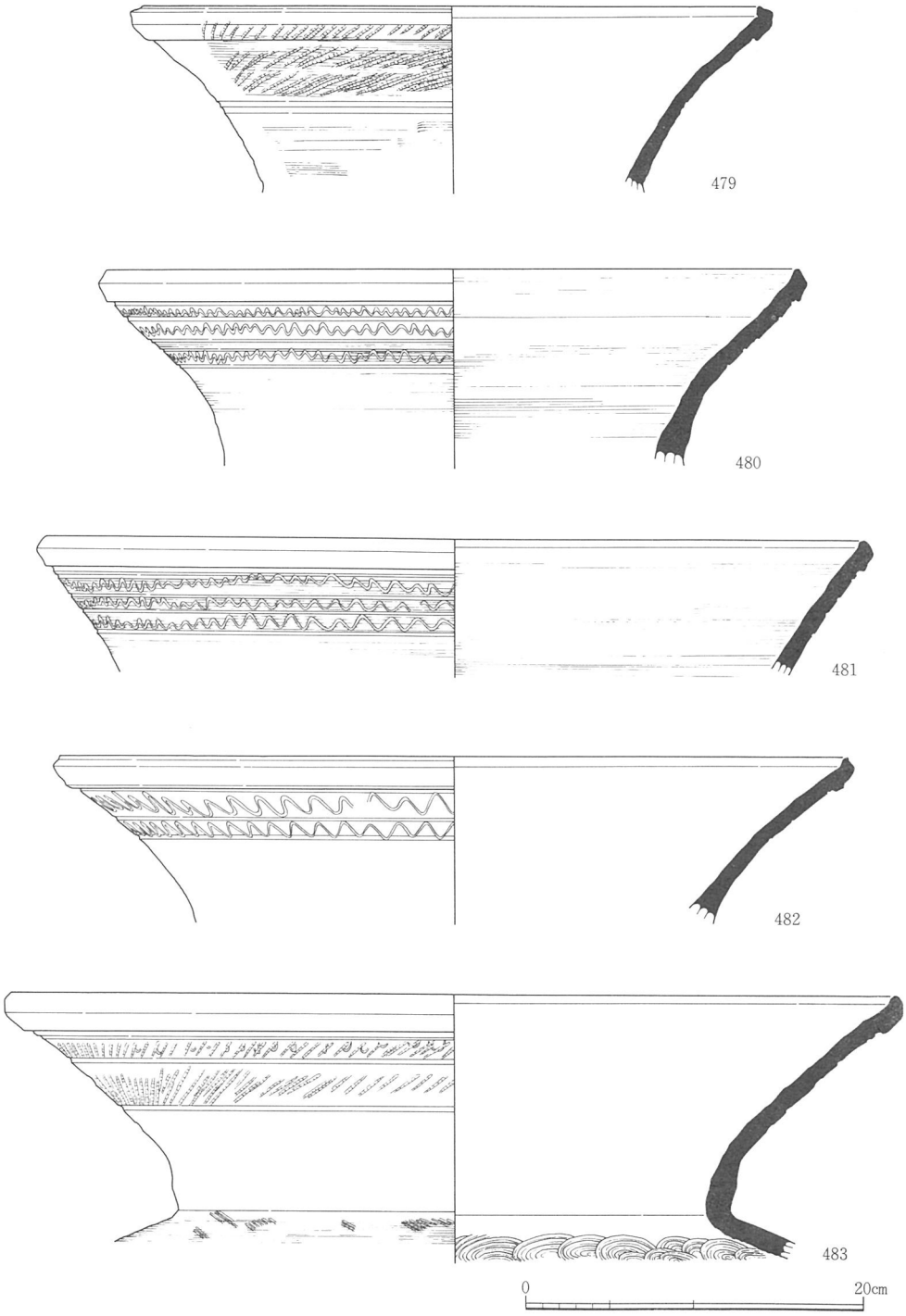
第64図　ＴＧ233号窯　灰原出土遺物（１）Ｓ＝1/4



第65図　ＴＧ233号窯　灰原出土遺物（２）Ｓ＝1/4



第66図　ＴＧ233号窯　灰原出土遺物（３）Ｓ＝1/4



第67図　ＴＧ233号窯　灰原出土遺物（４）Ｓ＝1/4

小型短頸壺（452～455）

口縁部は上方に折り曲げたように短く立ち上がり，体部には中央付近に凹線を巡らせるもの（452・453）がある。455は小型広口壺の可能性もある。

提瓶（456）

片面に平らな面をもつことがうかがえ，体部上面には部分的にタタキ目が残存している。

蛸壺（457・458）

窯体では出土していないが，釣鐘形のものが灰原で数点出土している。

壺（459～463）

直口壺（459～462）のうち462の口縁部はヘラ切りやナデ調整によって口縁部を仕上げているが，この調整は紋様施紋後に行われ，上方にのびていた口頸部を途中で切断したことがうかがえる。短頸壺463は，下層のＴＧ232号窯の混入と考えられるものである。

甕（464～483）

小型（465・466）・中型（467～477）・大型（478～483）品がある。小型甕は，口頸部が短く外反するものと，ラッパ状に開くものがある。中型甕のほとんどは，口頸部を短く外反させ口縁端部にも共通した特徴をもつが，口頸部が極端に短い製品もわずかながらみられる。大型甕は，いずれも口頸部が大きくラッパ状に開く形態のものであるが，灰原出土品には頸部に形骸化した波状紋を施したものがみられる。477は口径から中型甕としたが，口頸部の諸特徴は大型甕に通有のものである。

５．遺物の時期

遺物の時期を決定するには，まず蓋杯が基準となる。この蓋杯の特徴を列挙すれば，法量は口径8.5～10㎝前後，立ち上がりは短く内傾するが受部上端よりは上方に位置している，外面の回転ヘラケズリは狭い，底部はヘラ切り未調整などがあげられ，陶邑編年のうち田辺編年ではＴＫ209型式，中村編年ではⅡ型式６段階の範疇で捉えられよう。

同様に高杯，瓿，壺，甕など他の器種も，その諸特徴からは当期の範疇で捉えられるものである。

また，遺物の時期とは直接関係ないが，蓋杯における自然釉の付着状況からは，杯身を上面にして焼成したものの存在が確認された。これは偶発的な要因も考えられるが，出土量も多く，自然釉の流れによる蓋と杯の釉着をさけるためなど，意識的に行われていた可能性が指摘できよう。

第３節　ＴＧ232号窯の調査

第１項　ＴＧ232号窯の概要（第55図，付図１，図版12）

窯体は，ＴＧ233号窯（窯体）築造時，ないしはその後に行われた丘陵の削平のため欠失している。灰原の上層にはＴＧ233号窯に伴う灰原が，同一地点において覆い被さるように堆積している。

検出した灰原は，機械掘削の時点においてＴＧ233号窯に伴うものと思われた。しかし，機械掘削終了後に表面観察を行った結果，ＴＧ233号窯のものとは異なる時期と思われる遺物が，灰原と斜面との境目付近にかけて多量に認められた。そのことにより，下層に時期の異なる灰原が現存している可能性があるものと推定された。

そのため調査は，まず最初に，灰原の堆積状況を確認した。その結果，ＴＧ233号窯とは別の灰原が下層に存在することを確認した。次に，出土した遺物が，どの窯に属するものかを層毎に確認しながら上層のＴＧ233号窯の遺物を取り上げ，灰原の上面を検出した。その後写真撮影及び遺物出土状況の実測を行い，地点毎に遺物を取り上げた。

第２項　灰原の状況（第68図，付図２，図版19～29）

灰原の南側は，舌状丘陵から西にのびる濃登ノ池の山側の堤として利用された長さ約15ｍ，幅約10ｍ，高さ約１ｍの張り出し部がＴＧ231号窯の灰原と分けるように存在している。東側の丘陵下部付近は，後世のＴＧ233号窯（窯体）築造時に削平を受け，その端部にそって緩やかに内湾する。北側は，灰原検出時には上層の埋土が同色，同系統のため確認できなかったが，谷部と丘陵斜面部を画するように，北に向かって延びる６世紀初頭と推定される溝（38－ＯＳ）によって，削平を受けている。

灰原の現状は，上面はほぼフラットで，全長約6.5ｍ，幅約16ｍ，厚さ約0.5ｍを測り，ＴＧ233号窯（窯体）下部の丘陵斜面下部から谷部にかけて三日月状に残存している。灰原は，土層断面観察の結果，大まかに上層，下層の２層に分けることができる。

灰原は，灰原に設置した土層観察用畦を観察した結果，灰原の南及び北側において落込み状のものが認められた。灰原の南側の落込みは，幅約5.2ｍ，深さ約0.5ｍを測り，上層には，薄くＴＧ233号窯の灰原が堆積している。落込みは，灰原と同様に灰，炭を含むが量的には少ない。層中には，粘質土が多く混入し，灰，炭は，若干褐色を帯び，落込みを包み込んでいる状況が土層断面で観察された。このことから，純粋な灰原ではなくＴＧ

233号窯築造時に整地されたものと判断した。出土した遺物は，灰原に放棄されたものよりも多い。北側の落込みは，幅約6.0m，深さ約1.1mを測る。落込みは，平面での観察の結果，丘陵斜面から下に向かってラッパ状に開く，溝状のものと推定している。これらの落込みからはともに，わずかながら下層に灰原が堆積しているのが観察された。上記の状況が土層面及び平面観察の結果認められたことから，ＴＧ232号窯廃絶時において灰原は，灰原の北側及び南側は，中央部と比較すると薄く堆積し，中央部に向かって盛り上がっていた状況を呈していたものと推定される。

また，ＴＧ233号窯（灰原）上面の東辺部において，窯体片と共に多量の遺物が混入していたことから，灰原は，後世に削平された丘陵の斜面上及びＴＧ233号窯（窯体）付近にも存在していたものと思われる。

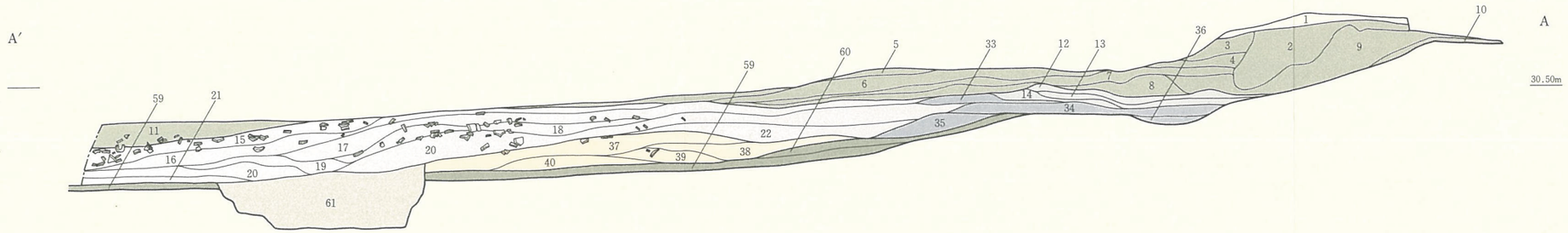
灰原からは多量の遺物が出土した。灰原上層の遺物は破片が多く，散乱した状態で出土した。灰原の表面観察では，部分的に大甕の口縁部，器台片，他の器種の破片が少量見受けられるものの，大甕の体部片がほとんどであった。これらの上層の遺物を取り除き，出土状況を観察すると，特に灰原の中央部付近及び，北側斜面で大型甕などの大型破片の出土が顕著であった。他にＴＧ232号窯（窯体）に伴う遺物は，ＴＧ233号窯（灰原）及び周辺の遺構，濃登ノ池の堆積層からも出土し，これらを合計するとコンテナ1400箱に近い。

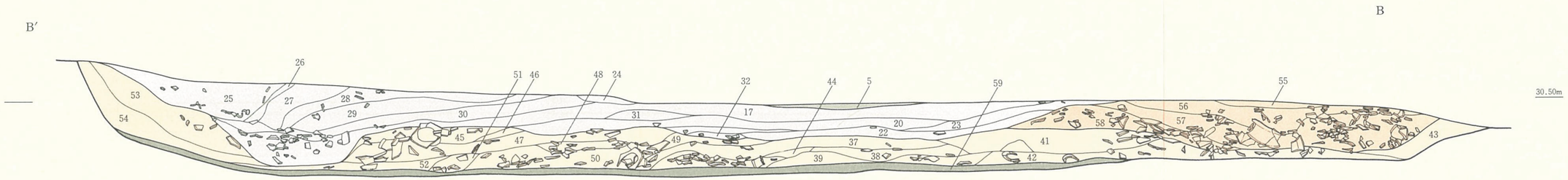
これらの灰原からの遺物の出土状況から下記のことを想定している。

窯跡の存在していた丘陵は，後世に削平を受け現地形は残存していないが，灰原の広がりから西側の斜面上に窯が築かれていたことは明らかである。東西両斜面の角度や丘陵の幅などから，窯の位置は，他の例と比較すると，窯口と谷底部との比高差はきわめて低い位置にあるものと推定している。

そのため大型の失敗品を焚口から掻き出し，その周辺に放置すれば，窯の焚口付近は，うず高く灰原が積まれた状況になるものと思われる。それを防ぐために大型の失敗品を焚口よりやや離れた位置の地山直上に平均的に配置し，その上を灰や炭などにより整地することによって作業スペースを確保したものと推定している。

また，削平された窯本体は，ＴＧ233号窯の灰原の広がりの上層にＴＧ233号窯の灰原が認められることから，ほぼ同一地点に存在していた可能性が高い。その状況により，ＴＧ233号窯（窯体）が二次使用された可能性もあった。このため慎重にＴＧ233号窯（窯体）の調査を進めたが，その痕跡は全く認められなかった。





旧表土

TG232号窯の灰原層

TG232号窯の灰原層

38-OS

TG233号窯の灰原層

TG233号窯に伴う盛土

TG233号窯の崩壊土

中世以降の堆積層

表土層

1．10YR　7/1　灰白色粘質砂土
2．2.5Y　8/1　灰白色粘質砂土(礫、小石、須恵器を多量に含む)
3．2.5Y　7/6　明黄褐色粘質砂土
4．5Y　6/1　灰色粘質砂土(黄色粘質土をブロック状に含む)
5．10YR　7/1　灰白色砂質粘土
6．5Y　3/1　オリーブ黒色粘質砂土
7．2.5Y　7/2　灰黄色粘質砂土
8．2.5Y　7/1　灰白色粘質砂土
9．2.5Y　4/1　黄白色粘質砂土(黄色粘質土をブロック状に含む)
10．5Y　3/1　オリーブ黒色粘質砂土(黄色粘質土をブロック状に含む)
11．7.5Y　4/1　灰色粘質砂土
11．2.5Y　8/6　黄　色 ｝粘質土
　5B　6/1　青灰色 ｝粘質土
　N　3/0　暗灰色 ｝粘質土
13．7.5GY　7/1　明緑灰色粘質土
14．7.5YR　2/2　黒褐色粘質土
15．5Y　3/1　オリーブ黒色粘質砂土(須恵器、礫を多量に含む)
16．10YR　1.7/1　黒色粘質砂土(炭の濃度が高い)
17．2.5Y　3/1　黒褐色粘質砂土
18．10YR　2/1　黒色粘質砂土(須恵器、礫を多量に含む)
19．10YR　8/4　浅黄橙色粘質シルト(炭化物を含む)
20．2.5YR　1.7/1　赤黒粘質砂土
21．2.5Y　6/3　にぶい黄色砂
22．10YR　2/1　黒色粘質砂土(灰や炭化物が多い)
23．2.5Y　8/6　黄　色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む)
　5B　6/1　青灰色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む)
　N　3/0　暗灰色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む)
24．7.5YR　5/2　灰褐色シルト
25．5Y　2/1　黒色粘質砂土(下部に土器、須恵器、小石等を含む)
26．2.5Y　4/2　暗灰黄色土(灰や炭化物が多い)
27．2.5Y　4/1　黄灰色土(灰や炭化物が多い)
28．2.5Y　2/1　黒色粘質砂土(炭化物、土器、須恵器、小石、礫を多量に含む)
29．2.5Y　5/1　黄灰色粘質砂土(黄色粘質土をブロック状に含む)
30．10YR　4/1　褐灰色粘質砂土(黄色粘質土をブロック状に含む)
31．2.5Y　8/6　黄　色 ｝粘質土(須恵器、炭化物を多量に含む)
　5B　6/1　青灰色 ｝粘質土(須恵器、炭化物を多量に含む)
　N　3/0　暗灰色 ｝粘質土(須恵器、炭化物を多量に含む)
32．2.5YR　2/1　赤黒色土(灰や炭化物が多い)
33．7.5YR　2/1　黒色粘質土
34．2.5Y　6/2　灰黄色土
35．2.5Y　4/1　黄灰色粘質土(炭化物を含む)
36．5GY　2/1　オリーブ黒色粘質土
37．10YR　3/1　黒褐色粘質砂土
38．10YR　4/1　褐灰色土(炭化物を含む)
39．5Y　6/2　灰オリーブ色粘土(灰や炭化物が多い)
40．10BG　1.7/1　青黒色土(灰や炭化物が多い)
41．7.5Y　8/1　灰白色粘土と窯体の混合層(灰が多い)
42．7.5Y　5/1　灰色粘土(灰や炭化物が多い)

0　4m

43．2.5Y　7/1　灰白色粘質土
44．7.5Y　7/3　浅黄色粘土
45．2.5Y　3/1　黒褐色粘質砂土
46．2.5Y　8/6　黄　色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む、灰や炭化物が多い)
　5B　6/1　黄灰色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む、灰や炭化物が多い)
　N　3/0　暗灰色 ｝粘質土(須恵器を多量に含む、灰や炭化物が多い)
47．10YR　2/1　黒色粘質砂土(灰や炭化物が多い)
48．5Y　3/1　オリーブ黒色粘質砂土(灰や炭化物が多い)
49．5Y　3/1　オリーブ黒色土(2.5Y 8/6 黄色粘質土が多量に含まれる、灰や炭化物が多い)
50．5Y　3/1　オリーブ黒色土(2.5Y 8/6 黄色粘質土が多量に含まれる、灰や炭化物が多い)
51．10Y　4/1　灰色土(灰や炭化物が多い)
52．10Y　4/1　灰色土(灰や炭化物が多い)
53．2.5Y　7/2　灰黄色砂質粘土
54．2.5Y　5/3　黄褐色砂質粘土(小石、礫を含む)
55．5Y　5/1　灰色土(灰や炭化物が多い)
56．2.5Y　3/1　黒褐色粘質砂土
57．5Y　5/1　灰色土(灰や炭化物が多い)
58．10YR　1.7/1　黒色土(灰や炭化物が多い)
59．2.5Y　5/3　黄褐色粘土(弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む)
60．10YR　4/3　にぶい黄褐色粘土(弥生時代後期～古墳時代前期の遺物を含む)
61．38-OS

第68図　ＴＧ232・233号窯　灰原断面図

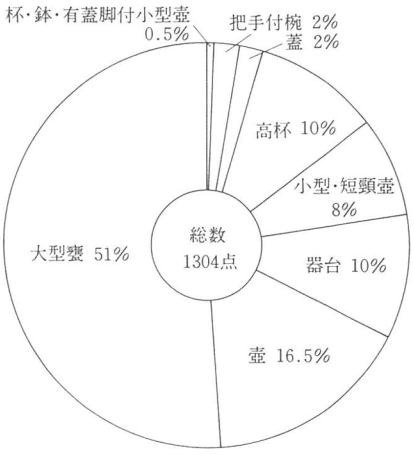
第３項　出土遺物

１．器種構成

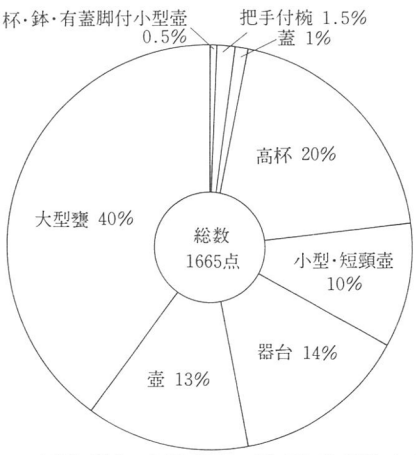
ＴＧ232号窯に伴う灰原から出土した遺物は，コンテナ箱にして約1400であるが，当然，出土遺物のほとんどは須恵器である。まず，須恵器の器種構成について示す。

ＴＧ232号窯で焼成された須恵器には，杯，有蓋脚付小型壺，把手付椀，蓋，高杯，瓿，小型直口壺，器台，壺，大型甕などがある。これらの器種の構成比率については表２に示したが，大型甕が他を大きく圧倒し，中心的に焼成されたことがうかがえた。さらに，大型甕には遠く及ばないが，壺，器台，高杯，小型壺もそれぞれ全体の10～20％を占め，大型甕に次ぐ主製品であったこともうかがえる。一方，蓋，杯，把手付椀の出土数は少ない。特に，杯は数点しかなく，この窯ではほとんど焼成されていないと言っても過言ではない。また，蓋の出土数も１％と少ないが，高杯の中でも蓋とセットとなる有蓋高杯の出土数が少なく，ほぼ対応した結果となっている。

須恵器以外の遺物では，須恵質の船形土器，朝鮮半島系の日常土器である軟質系土器，土師器，窯道具，窯壁片が出土している。出土数はいずれの遺物も限られるが，軟質系土器は46点と比較的多く，須恵器だけでなく生活に必要な軟質系土器も窯で焼成していたことも確認された。なお，土師器については灰原中から出土しているが，窯で焼成されたものではない。

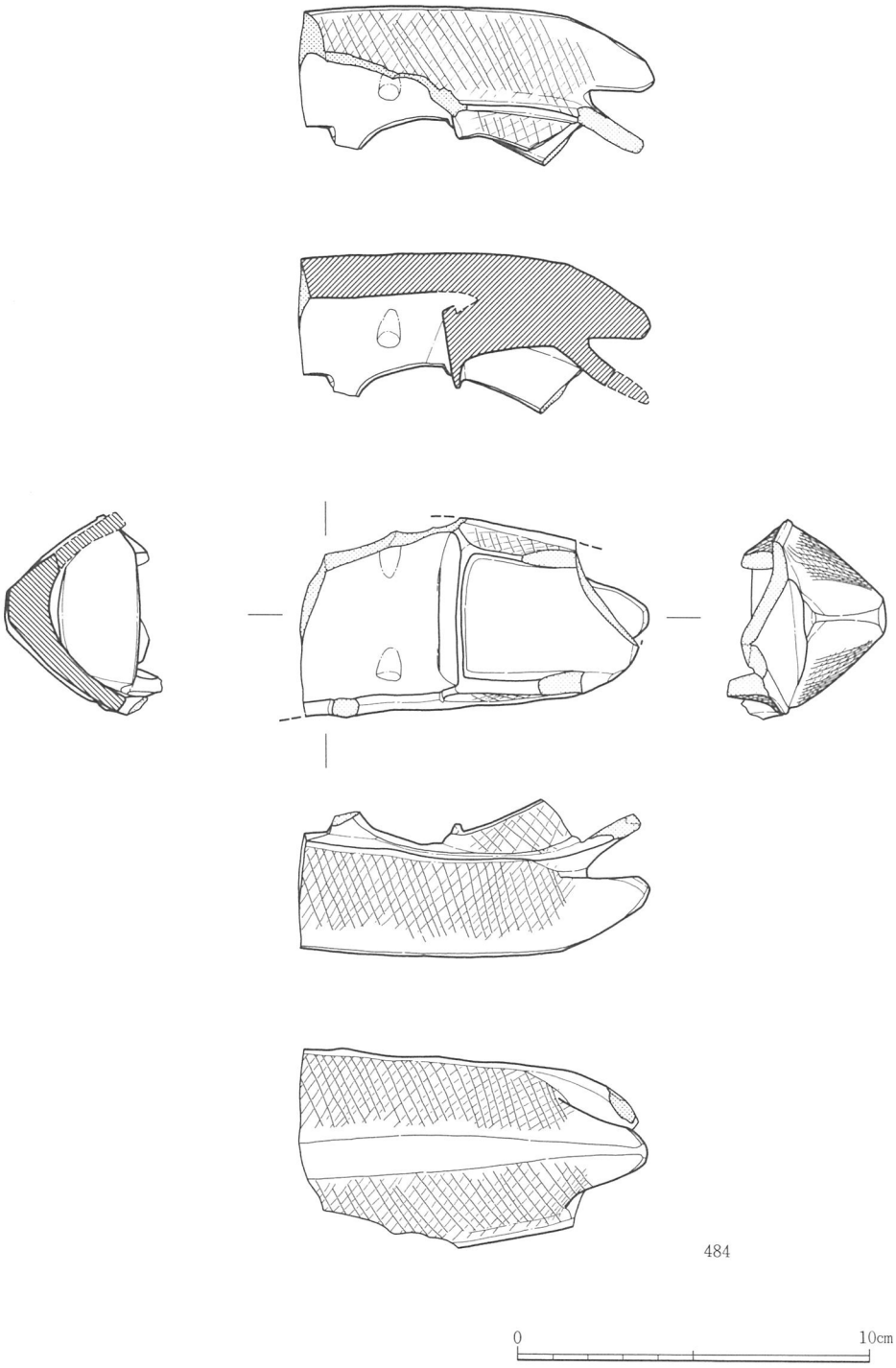


1．高杯・器台・小型壺は口縁部・杯部のみ。

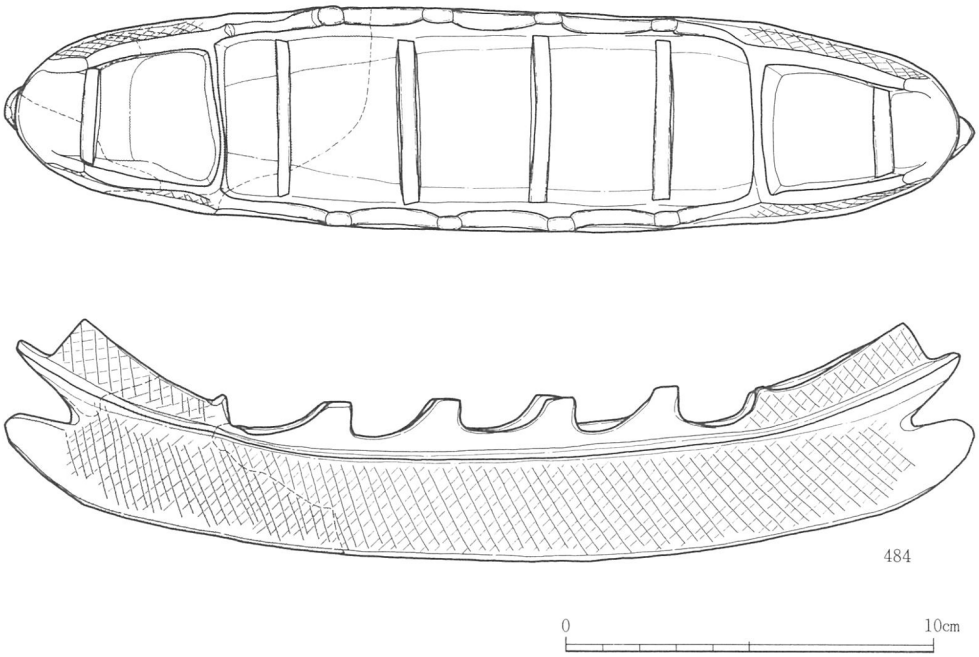


2.高杯・器台・小型壺は口縁・脚・体部片含む。

表２　ＴＧ232号窯出土須恵器の器種構成比率



第69図　ＴＧ232号窯出土船形土器　Ｓ＝1/2



第70図　ＴＧ232号窯出土船形土器の復元図　Ｓ＝1/2

２．船形土器（第69・70図－484，図版73）１点

準備造船を模して作られた，須恵質製品である。残存部は，船底と上部の竪板，船側板の一部分で，残存長約9.0㎝，最大幅5.5㎝，高さ約6.0㎝を測る。

船底部は，最大幅5.5㎝，高さ約3.2㎝を測り，先端部に向かって約２㎝程度反り上がっている。船底部上端付近には稜線を巡らせており，舷側板との境界を表現している。船底部の断面は，中央部が「Ｖ」字形，先端部付近は三角形に近い形を呈する。船底部の厚さは，底部付近が約1.2㎝，側面は約0.5㎝を測る。外面には櫛描きによる細かい斜格子文が施され，内面には仕切り板が表現されていた痕跡が認められる。

上部の竪板は，先端部で約1.5㎝程上方に立ち上がる。厚さは先端部付近で0.5㎝を測り，文様は施されてはいない。竪板と船底部との接合部は，明確な部材境の表現が認められず，竪板の側面の稜線と船底上端を表現した稜線が一本化しており，船の構造を示す細部表現の簡略化がうかがえる。舷側板は，先端の一部が欠損しているが，船体の中央寄り付近にはピポットの一部が認められる。ピポットの一部は欠損しているが，残存状況から，先端部方向に傾斜した台形に近い形と推定される。舷側板の外面には櫛描きによる細かい斜格子文が施される。デッキについては，明確な部材表現は認められないが，肉厚な平坦面に

よって表現されている。隔壁は，デッキの船体中央寄りに作りだし，竪板先端部上面にも，舷側板上部をつなぐ形で表現していた可能性が高い。

これらのことより出土した船形土器は，竪板と船底部の接合部やデッキに見られるように各部材の細部表現などが簡略化されているものの，基本的には当時の船の構造を忠実に表現した製品と言える。

出土した船形土器の残存部の状況から全体像の復元を試みる。

舳艫の区別は，船体の中央部の舷側板上部に表現されているピポットが一方向に傾斜し，傾く方向から考えると，この船形土器の残存部は船首部と推定される。古墳時代の船形埴輪の例を参考にすると，その形状は，船体の両端部がほぼ左右対象であり，船体中央部については，舷側板上部にピポットが両舷対称に数個配置されていたと考えられる。これから出土した船形土器は，約３分の１が残存していると思われ，全長27㎝前後と推定している。

脚台の有無は，その部分が欠失しているため不明であるが，韓半島南部からの出土例には脚台の付くものが多く，また，出土した船形土器の形状からもそのままでは不安定であることから，なんらかの支え（脚台）が付いていた可能性が高い。

３．須恵器

杯（第71図－485～488，図版74）

杯は４点しか出土していないが，器形などの特徴からＡ～Ｃ類に分類される。

Ａ類（485）１点

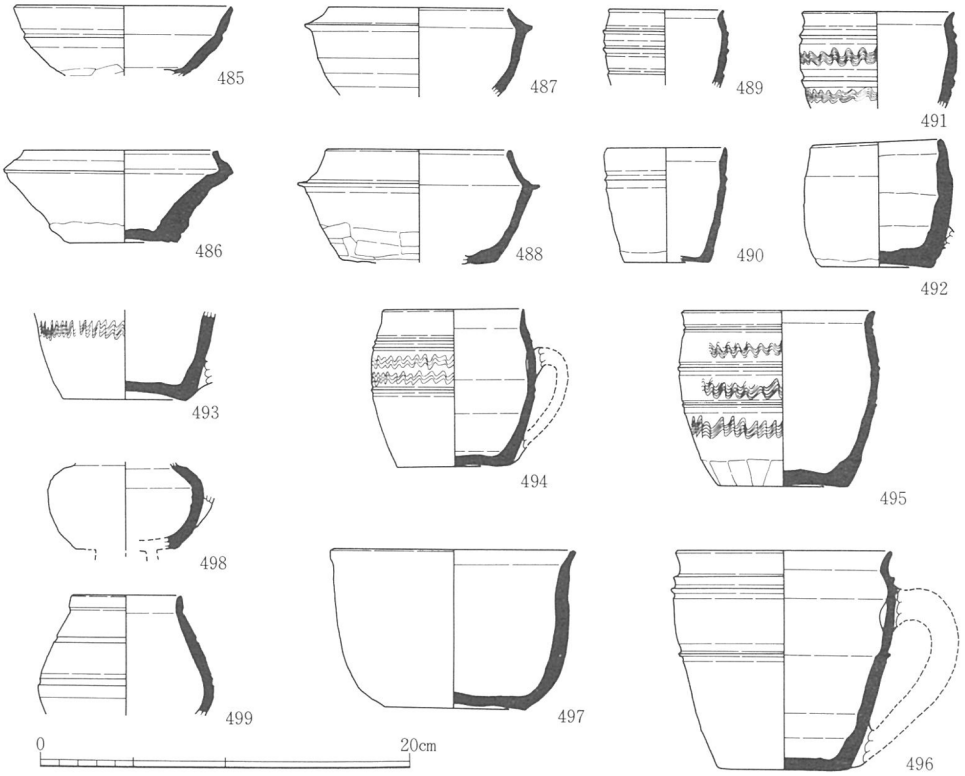
体部は外方向に直線的にのび，全体器形は鉢形を呈する。口縁部は上方に若干屈曲し，体部との境界には凸線が巡る。底部の外面には静止ヘラケズリを施すが，底面は未調整である。

Ｂ類（486）１点

体部は直線的にのび，口縁部を大きく内傾させる。調整は，体部から口縁部にかけては回転ナデによって仕上げるが，平底の底部は未調整のままである。また，胎土には他の杯に比べ砂礫粒が多く含まれ，粗いつくりの感を受ける。

Ｃ類（487・488）２点

受部を有するものである。488の体部は平底の底部から直線的にのび，立ち上がりは若干内傾して上方に高くのびる。受部は水平に短く張り出すが，その形態からは蓋受として



第71図　ＴＧ232号窯出土須恵器（杯・把手付椀・小型鉢など）Ｓ＝1/4

の機能は疑問視される。調整は，体部から口縁部にかけては回転ナデによって整え，底部は底面から外面にかけて静止ヘラケズリで仕上げている。487は体部に丸みをもち立ち上がりは短い。ただ，487は底部の形態が欠損のため把握できず，ここでは杯としたが高杯の可能性もある。

把手付椀（第71図－489～496，図版74）

把手付椀は29点（口縁～底部５，口縁５，底部６，把手13点）出土しているが，器形の特徴からＡ～Ｆ類に分類され，法量などの違いによりさらに細分される。

Ａ類

小型品で体部に丸みをもつものである。

Ａ－１類（489）１点

口縁部が短く外反し，体部は凸帯によって細かく区切られる。小型品のためか紋様は施されていない。

Ａ－２類（491）３点

器形はＡ－１類と共通するが，口径が7.5㎝とやや大型である。紋様帯は凸帯によって細かく区切られる。

Ｂ類（490）１点

体部，口縁部が直線的にのびる形態である。490は小型品のためか紋様は施されず，体部と口縁部の境界に凸帯を巡らすだけである。また，この灰原では確認されていないが集落の調査（393－ＯＬ）では，口径約10㎝を測る製品も出土しており，当窯でも小型品だけでなく中型品も焼成されていた可能性が高い。

Ｃ類（494）３点

器形は，体部に若干の丸みを帯びるが，口縁部は直立気味にのびる特徴をもつ。全体のつくりはていねいで，紋様帯を区画する凸帯は，図面では判別しにくいが，他に比べ繊細に鋭く引き出している。底部の調整も外面は端部までナデ調整を施している。また，494以外は底部の破片で，Ｃ類の可能性が高いものである。

Ｄ類（495）１点

体部の形はＣ類と似るが，口縁部は短く外反し凸帯の稜も鈍い。特に口縁部と体部との境界は沈線のようにも見える。調整は比較的ていねいで，底部の静止ヘラケズリも横方向にていねいに行っている。

Ｅ類（496）１点

口径11.5㎝，器高11.8㎝の大型品である。口径の割に器高が高く，直線的な体部に短く外反する口縁部を有する。全体のつくりはていねいで，凸帯の稜は鋭く，底部は端部までナデ調整を施している。把手は残存していないが，断面形は円形と推定される。

Ｆ類（492）１点

手づくね土器のような粗いつくりのものである。器壁は厚く，粘土紐のつみあげ痕跡が外・内面に残されている。

把手部　図示していないが，断面円形のものと板状のものがある。出土量は確認された14点のうち板状のものは４点で，円形の方が多いようである。

鉢（第71図－497・499，図版74）

Ａ類（497）１点

平底鉢である。直立気味にのびる体部から，口縁部を緩やかに外反させる。調整は全体

を回転ナデによって整え，底部は外面や底面を静止ヘラケズリによって仕上げている。

Ｂ類（499）１点

破片資料のため全体の器形は把握できないが，下膨れの形状をした小型鉢である。脚部を伴う可能性が高い。

有蓋脚付小型壺（第71図－498）１点

小破片資料であるが，残存部の形状から有蓋脚付小型壺と推定される。498は無紋であるが，似たような大きさで壺部に紋様を有するものが集落部（393－ＯＬ土器番号462『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』）から出土している。

蓋（第72・73図－500～515，図版75・76）

蓋は小破片も含め24点出土しているが，器形などの特徴からＡ～Ｆ類に分類され，紋様や細部の特徴からさらに細分可能なものもある。蓋のセット関係はＡ～Ｄ類は高杯に伴うものであり，Ｆ類は小型壺などに伴うものと推定される。また，24点のうち小破片のためＡ～Ｄ類のいずれに分類されるか，明確には判断できないものが４点ある。

Ａ類（500～502・505・507）

天井部に緩やかな丸みをもつものである。

Ａ－１類（500）１点

天井部と口縁部の境には凸帯が水平に張り出す。口縁部はほぼ直立し，内面にも口縁部から体部の変換点に稜が認められる。天井部の紋様は沈線紋と櫛による刺突紋によって飾られるが，刺突紋は櫛で強く押さえたような施紋状況を呈している。つまみの形態は不明である。

Ａ－２類（501）１点

天井部や凸帯はＡ－１類と似るが，Ａ－２類は口縁部が外方向に開き，内面も滑らかな丸みをもつものである。つまみは頂部が円錐状に隆起し，端部の稜は鋭く仕上げている。紋様は沈線紋と刺突紋によって飾られている。刺突紋はＡ－１類ほどではないが，櫛で軽く押さえたような施紋状況である。

Ａ－３類（502）１点

Ａ－１・２類に比べ天井部の丸みに張りがある。口縁部はほぼ直立するが，Ａ－１類ほどではなく，やや外方向に開いている。つまみはＡ－２類に比べ端部の稜は甘く，頂部は

わずかに円錐状に隆起させる程度である。

Ａ－４類（505・508）５点

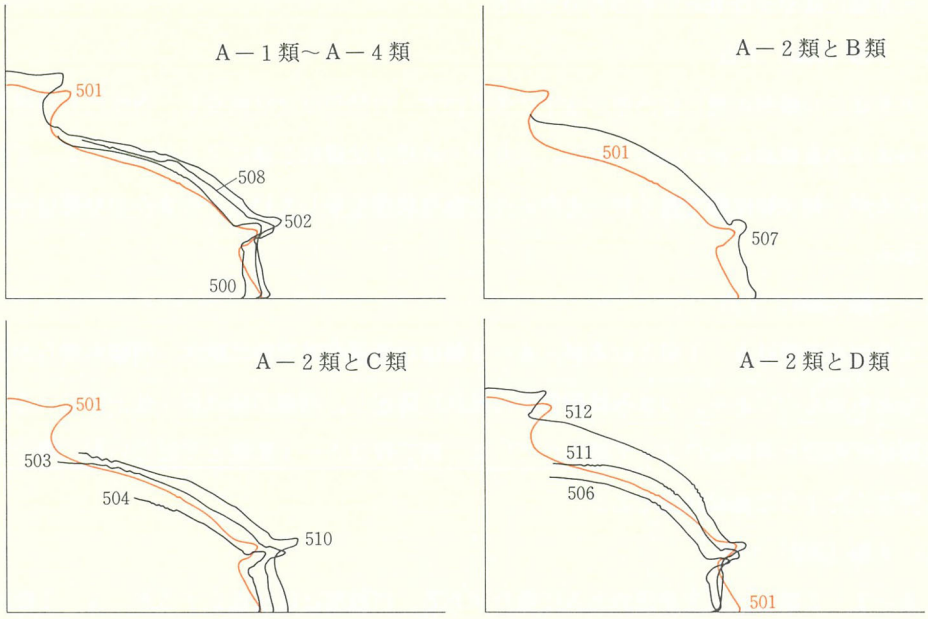
器形の特徴はＡ－１類と共通するが，紋様帯の区画を稜の甘い凸帯を低く引き出して巡らすものである。

Ｂ類（507）１点

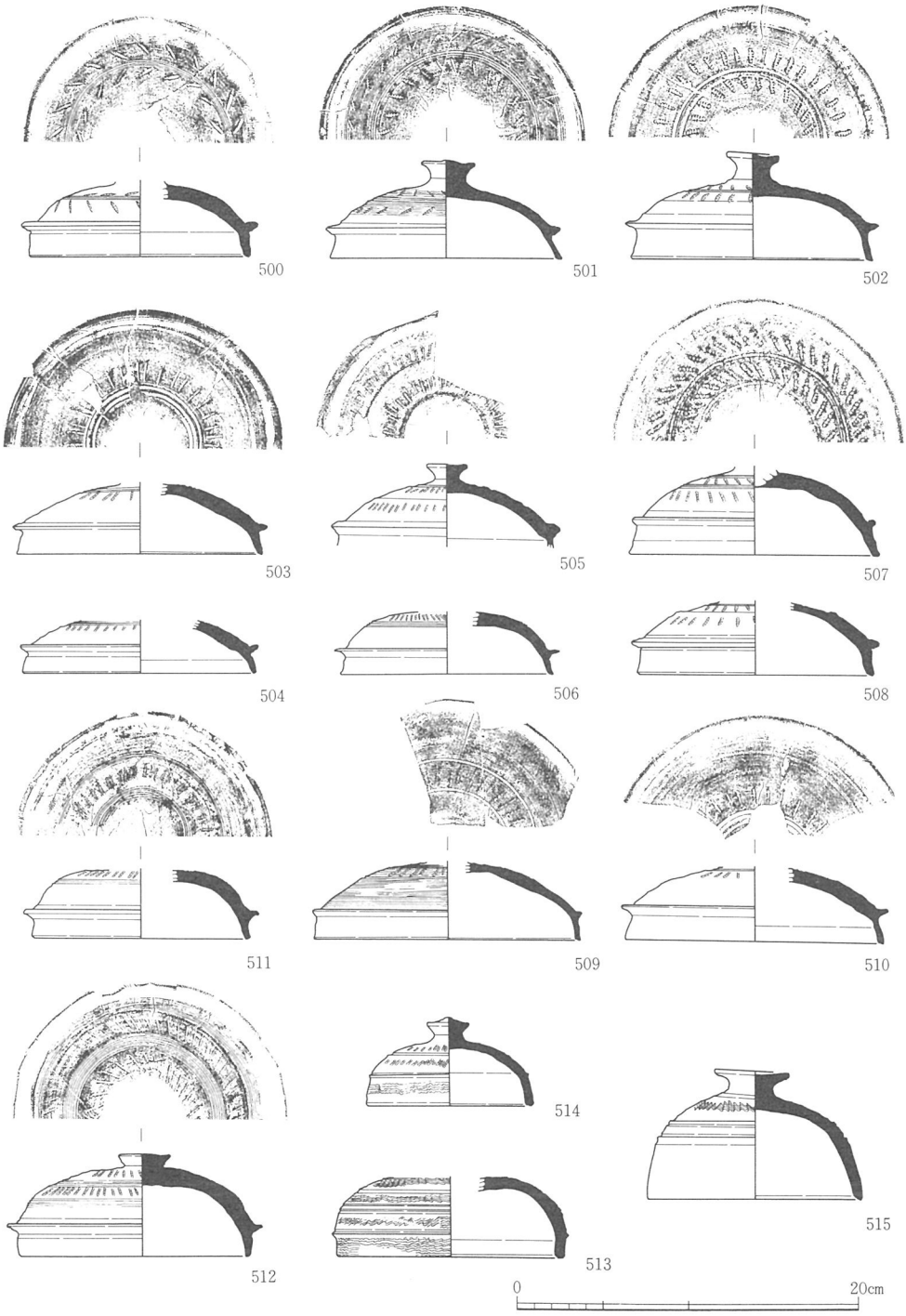
口縁部は外方向に開き，器高は高く，全体に丸みを帯びるものである。Ｂ類は口縁部と天井部の境の凸帯に特徴があり，Ａ類のように鋭い稜をもって大きく張り出すものではなく，丸く肥厚させた短い形態のものである。つまみの形態は不明である。紋様はＡ類同様刺突紋と沈線紋によって飾られるが，刺突紋は単に櫛で突いたためか列点状を呈する。

Ｃ類（503・504・509・510）５点

Ａ・Ｂ類に比べ，口径の割に器高が低いもので，扁平な天井部の感を受ける。口縁部は，ほぼ直立するものとやや外方向に開くものがあるが，Ａ－２類のように大きく開くものは無い。口縁部と天井部の境の凸帯は，ほぼ水平に大きく張り出すもの（503）と短いもの（509）がある。天井部の刺突紋は，Ｂ類と酷似し列点状を呈する。



第72図　蓋断面形の比較



第73図　ＴＧ232号窯出土須恵器（蓋）Ｓ＝1/4

Ｄ類（506・511・512）３点

Ａ・Ｂ類に比べ，口径の割に器高が高いものである。つまみは低く扁平で，頂部は若干円錐状に隆起するがＡ－２類ほど顕著ではない。

Ｅ類（513）１点

天井部は口縁部から急角度で立ち上がり，頂部は平坦である。天井部と口縁部の境の凸帯はＡ～Ｃ類のような明確なものではない。紋様は波状紋が天井部だけでなく口縁部にも施紋され，天井部の紋様帯は稜の甘い凸帯によって区切られている。なお，このＥ類については高杯の可能性もあるが，天井部の残存部の状況からは，高杯の脚部の接合は考えにくく，さらに天井部の頂部にまで紋様を施していることから蓋と推定した。

Ｆ類（514・515）２点

514は小型の蓋で，有蓋脚台付小型壺に伴うものと考えられる。つまみは頂部が円錐状に隆起し端部の稜は鋭い。天井部には刺突紋と沈線紋が巡り，口縁部にも波状紋が巡る。

515は器高の高い大型の蓋で，短頸壺や直口壺に伴う可能性がある。

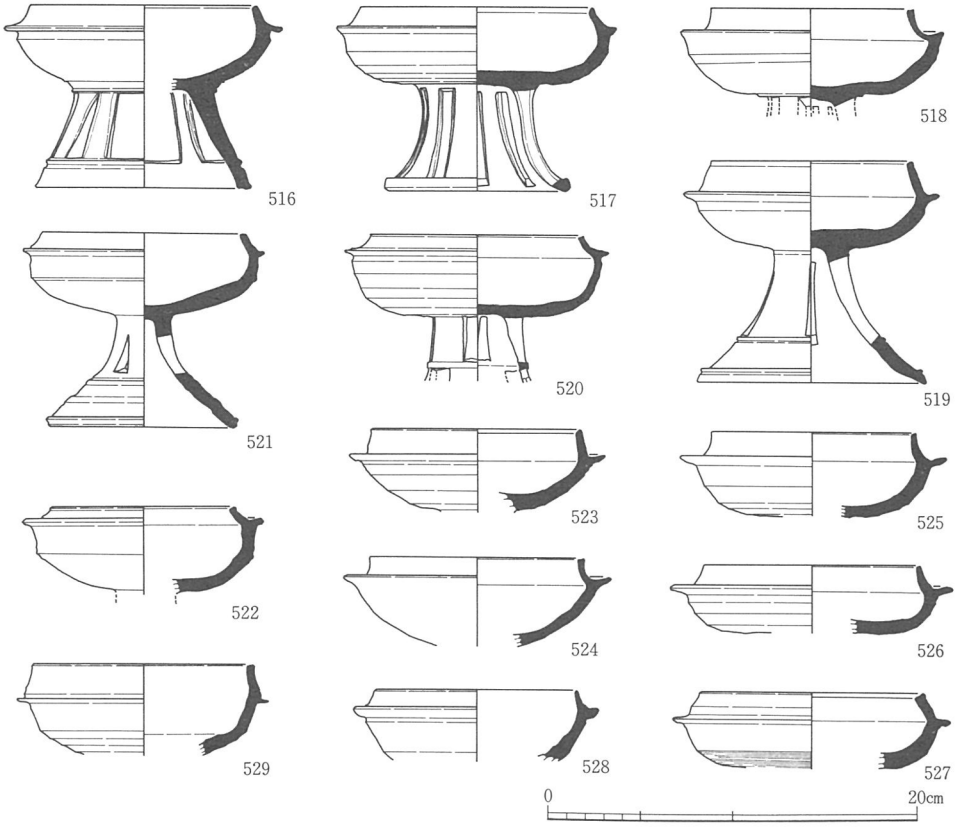
他に蓋の特徴で注目されることに，焼成時の配置の問題がある。外内面のどちらを上面にして焼成したかである。集落部の393－ＯＬ出土の蓋には，内面に自然釉の付着が認められ，内面を上方にして焼成されたことが確認されている。灰原出土品も自然釉が付着したものについて観察すると，一部外面にのみに認められるものもあるが，ほとんどは内面に認められた。393－ＯＬ同様内面を上面にして焼成されていたことが指摘されよう。また，この焼成方法は，『陶邑・大庭寺遺跡Ⅲ』の報告書の中でも指摘されているように，陶質土器と共通した特徴のひとつである。

高杯（第74～81図，図版77～89）

高杯は総計337点（杯部～脚部17点，杯118点，脚部202点）出土しているが，杯部から脚部までの形態が把握されるものは少ない。ここではまず有蓋と無蓋に分け，完形復元できるものを中心として分類を行っている。

有蓋高杯（第74図－516～529，図版77～78）28点＜分類不明４点＞

有蓋高杯は28点出土している。各類の出土点数については，基本的に杯部から脚部まで復元できるものと杯部の破片数である。



第74図　ＴＧ232号窯出土須恵器（有蓋高杯）Ｓ＝1/4

Ａ類（516）３点

杯部の蓋受が水平に大きく張り出す，杯部と脚部の接合部に明確な段を有する，大型方形透かし（６方）の脚部形態などが器形の特徴である。調整は，杯部外面を回転ヘラケズリの後に回転ナデによって整えられ，脚部の細い脚柱の端面はヘラケズリにより面取りが施されるなど，全体的にていねいに仕上げられていることが看取される。また，516以外の破片は脚部の一部である。

Ｂ類（517・518）４点

多窓透かしの脚部が特徴で，517は９方，518は10方である。蓋受はＡ類に比べ短く体部から肥厚させたような形態で，杯部と脚部の接合部にはＡ類ほど明確ではないが段を有するもの（518）もある。また，脚柱部にはＡ類同様面取りが施され，杯部外面調整もていねいに行われている。

Ｃ類（519・525～527）７点

杯部は，体部に丸みをもち，蓋受が水平に大きく張り出すものである。脚部は残存例が少ないが，519では長方形透かしを３～４方向に配している。

Ｃ－１類（519）４点

杯部は立ち上がり部が高い特徴を有する。脚部は，柱部に長方形の４方透かしを配し，脚裾や脚裾と脚柱の境界付近には凸帯を巡らせる。

Ｃ－２類（525・526・527）３点

Ｃ－１類に比べ杯部の立ち上がりは低い。脚部の形態については不明であるが，残存部の状況からは多窓透かしのものは考えにくく，ここではＣ類の範疇で捉えた。体部の外面調整は基本的にていねいな回転ナデで整えているが，525は回転ヘラケズリの調整痕が顕著に観察された。

また，526・527は杯部が浅く別形態の可能性もあるが，遺物が小破片のため復元図が不正確な可能性もあり，ここではＣ－２類として考えておく。

Ｄ類（520）１点

脚部に，長方形透かしを千鳥状に数段配する形態である。杯部は体部の張りが比較的大きい，蓋受の張り出しは短い，立ち上がりは大きく内傾し低いなどの特徴を有する。体部の外面調整は回転ナデで整えている。

Ｅ類（521・522）２点

杯部の体部が屈曲してのび，屈曲部に明確な稜をつくりだす形態である。蓋受は短く，立ち上がりも内傾し低い。脚部は柱部に三角形透かしを３方に配し，大きく開く脚裾には稜の鈍い凸帯を巡らす。

Ｆ類（523・524）５点

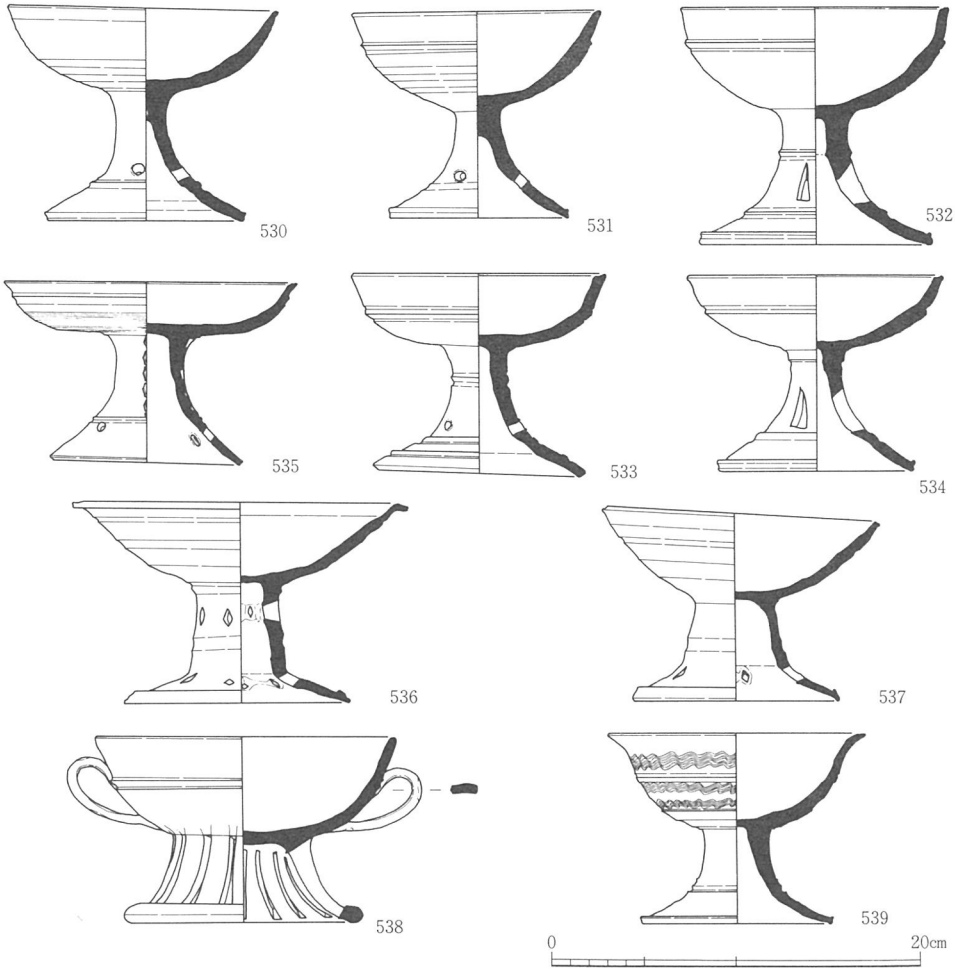
杯体部の張りが小さいものである。脚部は不明であるが，杯の残存状況からは脚柱部の細い形態のものが伴うと考えられる。

Ｇ類（529）１点

立ち上がり部が直立し，体部は屈曲してのびるものである。蓋受が極端に短く，その形態から蓋とも考えられるが，ここでは高杯として報告している。

Ｈ類（528）１点

直線的にのびる杯体部のものである。底部は欠損のため不明であるが，欠損状況からは平底とも考えられ，杯の可能性もある。



第75図　ＴＧ232号窯出土須恵器（無蓋高杯１）Ｓ＝1/4

無蓋高杯（第75～78図－530～581）112点＜分類不明７点含む＞

Ａ類（530・540～547）12点

杯部は浅い半球状を呈する。脚部は，細い柱部から裾部が大きく開き，裾上部に凸帯を巡らす。透かしは小型円形のものを３方に配す。

Ｂ類　24点＜細分不明11点含む＞

杯部の口縁部と体部の境界に凸帯を巡らせるものである。また，Ｂ類は杯部，脚部の形態差により細分される。

Ｂ－１類（531・548・549）６点

杯部は半球状を呈する。脚部は，Ａ類と同形態で，細い柱部から裾部が大きく開き，小

型円形透かしを３方に配す。

Ｂ－２類（534・551）３点

杯部は浅い半球状を呈する。脚部は裾が大きく開き，凸帯は裾の上部と下端部に巡る。透かしは，脚柱部に三角形のものを３方に配す。また，534には杯部と脚柱部の境界に低い段が作り出されている。

Ｂ－３類（533・550・552）３点

杯部は浅く，扁平な体部から口縁部が屈曲して外方向にのびる。脚部は裾部が大きく開き，柱部に凸帯を巡らす。

Ｂ－４類（532）１点

杯部は半球状を呈するが，口径，深さともＢ類の中では最も大きい。脚部も裾部が大きく開く形態ではあるが，脚柱は太く，器高も高い。透かしは三角形のものを３方に配し，凸帯は柱部，裾部上端，裾部下端に巡る。

Ｃ類（535・553・554）３点

杯部は浅い皿状を呈し，口縁部を短く外反させる。脚部は太い柱部から，裾が直線的に開き，凸帯を裾部の上方に巡らす。透かしは，脚柱部に貫通しない菱形の押形を５個直列配置したものを４方向に配し，裾部には円形透かしを４方向に柱部の紋様と千鳥状に配する。

Ｄ類（536・537・558）３点

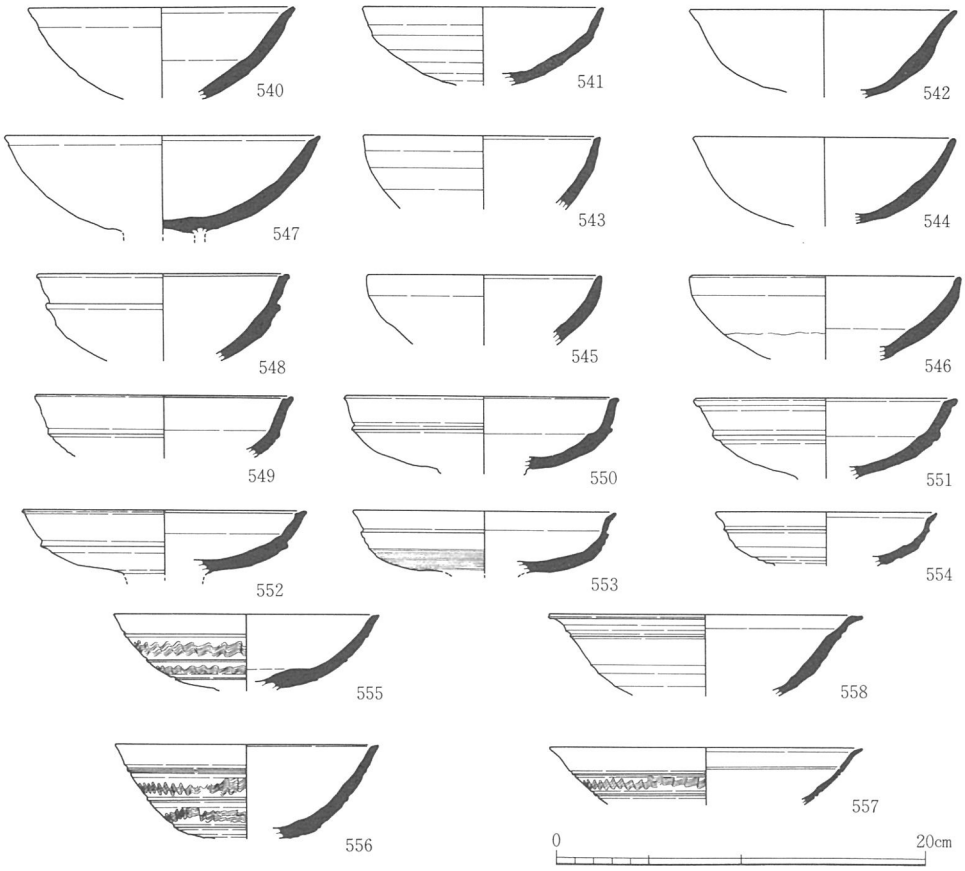
杯部は，口縁部を短く外反させるものと体部からそのままのびるものがあるが，体部はいずれも直線的に外方向にのびる形態である。脚部は太い柱部から裾部を屈曲させ，裾端を上方に凸帯状に肥厚させる。透かしは菱形のものを柱と裾の屈曲部や柱部に配し，孔の内面にはていねいなケズリを施している。

Ｅ類（538）１点

他類に比べ大型品である。杯部は体部に丸みをもち，口縁部はそのまま体部からのびる。口縁と体部の境界には鋭い稜をもった凸帯が巡り，境界から底部にかけて２個対称の板状把手がつく。脚部は有蓋高杯Ｂ類と共通した多窓透かしの形態で，538は15方の透かしを配する。

Ｆ類（539・555～557）12点

杯部は，丸みをもった体部から口縁部を緩やかに外反させる。外面には波状紋が施され，紋様帯は低い凸帯によって区切られる。



第76図　ＴＧ232号窯出土須恵器（無蓋高杯２）Ｓ＝1/4

Ｇ類　13点

杯部の形状は直線的な体部から口縁部を緩やかに外反させるもので，土師器の高杯と似ている。

Ｇ－１類（559・560）12点

底部付近に刻み目状の段を有する。また，外面には縦方向の細かいハケ状の調整が部分的にみられるものもある。

Ｇ－２類（561）１点

Ｇ－２類は底部付近の段は，鋭い稜の凸帯により表現されている。

Ｈ類（562・563）２点

口縁部は大きく外反し，体部との境界には鋭い稜をもつ。また，このＨ類は出土点数は２点と少ないが，いずれも焼成は瓦質に仕上がっている。

第77図　ＴＧ232号窯出土須恵器（無蓋高杯３）Ｓ＝1/4

Ｉ類（566）２点

扁平な底部から，口縁部が屈曲して上方にのびるもので，脚部との接合部付近には凸帯状の段がある。

Ｊ類（564・565）２点

大型と小型のものがある。蓋を逆転させたような形態の杯部で，口縁部や体部に波状紋を巡らす。蓋513と似るが残存の状況から564には，脚部の痕跡が観察され高杯とした。565については蓋の可能性もある。

Ｋ類（569）１点

小型高杯である。扁平な底部から，体部と口縁部が直線的にのびる形態である。体部には波状紋を施し，口縁部と体部，体部と底部の境界には鋭い凸帯が巡る。